

政策マンからみた都市と自治

——名古屋市政を振り返って——

吉井 信雄

「オーラルヒストリー・プロジェクト」 吉井信雄特任教授に聞く

このオーラルヒストリー・プロジェクトは、様々な分野で活躍した人の経験を後世に伝え、今後の参考にするために、ヒアリングを行い、記録として残すものである。なるべくヒアリング内容に忠実になるように最小限の修正にとどめ口語体としている。今回は名古屋市政で40年以上にわたり政策マンとして活躍した名市大特任教授の吉井信雄氏にインタビューを行った。

●どうして公務員になったのですか？ 公務員を選択した理由をお聞かせください。

(学生時代はクラブ活動と大学紛争)

私は、名古屋生まれの名古屋育ちです。昭和41年に名古屋大学経済学部に入りました。大学3年生くらいからだ記憶していますが、全国的な大学紛争の波が名古屋大学にも押し寄せ、4年生の時には経済学部が占拠され、機動隊が入りました。1年間全く授業がない状態でしたね。自分達で本を読み議論ばかりしていました。

当時はマルクス・レーニンの人気が高かったですね。マルクスの資本論や、レーニンの帝国主義論なんかを読んでよく友人と議論していました。従って、社会に対する批判精神は旺盛で問題意識だけではありません。でも授業も受けていませんから学力は低かったと思います。大学紛争以外ではクラブ(混声合唱団)にうつつを抜かしていました。当時は就職については、売り手市場で、非常に楽で、3年生の時にはすでに就職先が決まっていたんです。最初、銀行に入ったんですよ。ゼミの先生に行って来いと言われて行きましたが、その場で内定してしまいました。従って、4年生の1年間は本を読んだり、歌を歌ったりということでした。

(果てしない利潤追求に嫌気がさし、銀行を11ヶ月で退職)

卒業して銀行に入ったのですが、11ヶ月で辞めました。どうして辞めたかということ、一口で言うと「止めどのない利潤獲得競争に嫌気がさした」ということですかね。銀行というのは利潤を極大化するために預金を獲得し、それを企業などに貸し出して利益を出します。私が入行した銀行は規模の小さい貯蓄銀行が大同合併した銀行だったものですから、小さな支店が数多く不効率に立地し、効率が悪い銀行でした。常に預金獲得のノルマが課せられて、預金を集めて来いと。それを達成すると、さらに次のノルマ。それも全部銀行のため。そんなことをこの先30年、40年とやっていくのかと思うと非常にむなしく思えまし

た。一方、当時、大きな金融再編成の波が押し寄せていました。山崎豊子さんの「華麗なる一族」がちょうど出版された頃ですね。本を読みましたが、小が大をのむ合併について書かれていました。これは、いずれ金融再編の大波に襲われるなど直観的に思いましたね。その場合は、うちの銀行はきっと吸収される側だろうなどということも考えて、辞める決断をしました。じゃあ辞めてどうするのか。銀行を辞めてメーカーに行くのかと。でも結局メーカーでも私企業ですから同じことだろうと。つまりその会社のために利益をどれだけ出すかに奉仕するということだろうと。これはやっぱり同じだろうと。そうすると選択肢はなんだと言うと、私企業以外の公務だということしかなかったのです。

(銀行を辞めて名古屋市の職員に)

公務員になるにしても、国へ行くか県へ行くか市町村へ行くかと3種類あるわけです。国というのはやはり大き過ぎると私は思いました。大き過ぎるとはどういうことかという大企業の歯車になるのとよく似ていて、ある省に入れば一生その省のために働くわけですから、他の省のことはよくはわからない。つまり手に取ることができない規模なのです。これだけ大きいと縦割りのセクショナリズムも強いですね。よく言われる「省あって国家なし。局あって省なし」ですね。しかも国家とか国というのは実は実体がないものです。リアルな現実には、地域という空間(場所)があって、そこに市町村という地方政府がある。しかも住民はそこに住んでいますから、市町村という一番基礎的な自治体こそが住民と直接接している自治体ですね。基礎的自治体と言われますが、市町村には地域住民と直接接する面白さがあります。市町村の場合は「ゆりかごから墓場まで」と言われる様に、人が生活するすべての分野にわたって、すべて関わっていますから非常に面白い。市町村は可視的です。つまり目に見える実態であるということですね。難しくいうと「総合行政ができるのは市町村だけ」なんですよ。都道府県というのは国と市町村の間体ですから中2階的行政ですね。

でも、これは、その時に思ったことではなく正直職員になってから考えたことです。振り返ってみるとそうだったと言うことですね。その時は公務に就きたいということと、だったら自分が生まれ育った名古屋市だよな。それが正直なところですね。それで名古屋市に入りました。でも今振り返ってみてもベストの選択だったと思います。

●学生時代はどのように過ごしましたか？ 都市との出会いについてお聞かせください。

(平田清明先生のひと言で都市に興味)

先ほど述べましたように、大学4年間は混声合唱団に所属していました。それこそ4年間歌ばかり歌っていました。当時は「歌声運動」が盛んな時期で、歌と言っても政治性の強い歌でしたね。「祖国」とか「沖繩を返せ」とか言う歌ですね。ゼミは滝沢ゼミナールと言って中小企業論でした。でも正直興味があったのは、哲学とか社会思想史で、マルクス・レーニンなどよく読んでいました。特に初期マルクスに興味を持ちマルクスの「経済学・哲学草稿」などを自分で読んでいましたね。当時は、学問は自分でするものだという思いが強く、授業もほとんど出ませんでした。でも、好きな授業だけは出ました。その中のひとつに社会思想史の平田清明先生の授業がありました。

平田先生の授業は私にとっては、すごく面白くて、今でも鮮明に記憶しています。それが、後々私の人

生に大きな影響を与えることになります。それは、「ブルジョア」(仏: *Bourgeois*)という言葉の定義です。私はマルクスを一応読んでいましたから、ブルジョアというと、ブルジョアとプロレタリアートという対立構図・階級闘争がすぐ頭に浮かびました。当時ブルジョアと言えば、一般的には「資本家」と訳されていました。平田先生の説は、実はブルジョアというのはそうではないのだ、資本家という風に訳すのではないのだと言うものでした。あれはブルク(独: *Burg*)に住む人、つまりブルガーが語源だと。ブルクというのはドイツ語で城壁(都市)の意味です。(写真1)城壁の中にいる人をブルガーと言って、これは市民を意味する言葉だと言うのです。また、プロレタリアートとはローマの第7市民(最下層市民で、市民であるブルジョアが階層分化した結果、富裕層である資本家“ブルジョア”と労働者階級の“プロレタリアート”に階層分化したもの)だとも言うてみえました。これは私にとっては衝撃的でした。

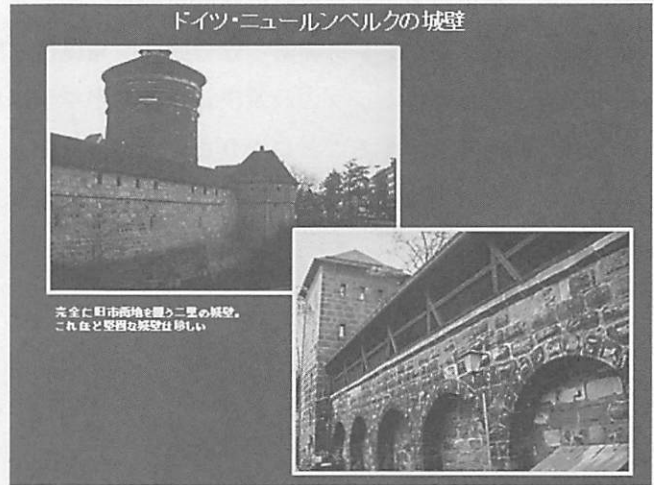
平田先生には「日常語と範疇」、「市民社会と社会主義」と言った著書がありました。確かに言葉は、その時代精神を反映しています。言葉の意味から時代を考えていく。このことを学び、大いに感銘を受けました。考えてみると今でもドイツの各都市は〇〇ブルク、〇〇ベルクという都市名が多いのに気がつきますね。

マルクスの描いた社会主義への道程は、封建制から社会主義への移行ではなく、「市民社会を経て社会主義に至る」というものだったと思います。これこそがマルクスがドイツ革命に期待した理由です。ところが現実にはロシアで革命が起こってしまい、封建制から一気に社会主義国になってしまいました。ドイツでは「国家より先に都市ありき」という言葉があります。都市の中に住む人々(市民)が作る社会が「市民社会」ですね。こういうことを言われて、なるほどそういうことかと目が覚めた思いでした。

(都市政策こそが公務員の本業～政策マンへの道)

市役所に入って、考えたことがあります。それは、辞令1本で福祉から土木まで幅広い仕事をこなしていかなければならない中で、何を勉強すれば一番いいかと言うことです。その結果、たどり着いた結論が「都市」でした。そうだ「市の仕事はすべて政策として実現される」。その政策の対象は「都市」なんだと。

写真1



都市こそが市役所の職員として生涯探究する目標なのだと、その時思ったのです。その後、私は都市に興味を持って、都市政策と都市経営の勉強を独自に始めました。

その後、国のシンクタンクである総合研究開発機構（NIRA）に出向し、政策研究に従事する機会を得、西尾市長誕生とともにトップの政策決定をまじかで学ぶ機会を得ることができました。その後、松原市長の長期総合計画を策定することになりました。自分でもラッキーだったと思います。これまで勉強し、考えていたことを現実に移せる機会を得たからです。振り返りますと、最初のきっかけは大学時代の平田先生の一言でした。そういった一言にひとりでも多くの学生が出会ってもらえれば嬉しいな、という想いで現在教壇に立っています。

●市役所生活はいかがでしたか？

（シンクタンク（政策研究）との出会い）

市役所には途中で入庁しました。試験の年次で言うと2年遅れで入ったわけです。最初は熱田区六番町の熱田福祉会館という福祉施設で、高齢者の世話をする事務長さんでした。1年10ヶ月勤務しました。それから本庁の行政課調査係というところに異動になりました。そこで大都市制度問題を担当しました。今流に言えば、地方分権論や道州制、尾張名古屋共和国など大都市制度の調査研究が主な仕事でした。面白かったというか珍しかったのは、都市問題研究所の調査を命じられたことでした。今でいうシンクタンクですね。昔は「都市問題研究所」と言っていました。そういった都市問題を研究する組織を持つ自治体が現れ始めていたのです。当時、革新自治体の波が押し寄せ、「総合的・科学的行政論」が盛んに提唱されていたことが背景にあったと思います。大都市にも革新市長が次々に現れ、名古屋市も本山革新市政になっていました。確か仙台の島野市長の時だったと思いますが、仙台市は都市問題研究所を設置しました。そんな中で、名古屋も検討しろという指示が上からあって、それを受けて、調査係で都市問題研究所の調査を始めました。実はこれが後ほど、名古屋都市センターとして実現していくことになるのです。私はその後、政府が設立した総合研究開発機構（NIRA）という日本のシンクタンクの元締めのようなところの主任研究員になることになりました。（名古屋市で初めて）シンクタンクとはそこで縁ができました。総合研究開発機構は、法律に基づいて設立された特殊法人で、国と民間企業、それに地方自治体の出資で設立され、国の各省や都道府県、政令指定都市、民間大手企業などから研究員が出向ってきて、様々な分野の政策を研究し、政策提言を行う機関でした。その後、名古屋では本山市長が退任し西尾市長が誕生します。私は、新市長の秘書になるように言われNIRAから帰名しました。

（左遷されて肝に銘じた、座右の銘「人間万事塞翁が馬」）

若い頃の私は非常に生意気でした。NIRAに赴任する前はよく上司に刃向って、左遷をされたことが始終ありました。先に触れた調査係では上司と対立して、課長が困って「しばらく頭を冷やせ」ということで、文書係というところに配置転換になったことがありました。

文書係の仕事は、外部から郵送されてくる郵便物に収受印を押したり、市長印の管理をするのが主な仕事でした。時間的には余裕がありましたが、地味な仕事でした。「あいつもかわいそうに」と皆には思われていた様な気がします。ところが、私の性格かもしれませんが、どこ行っても関係ないのです。どこに行っ

でも、行ったところで面白くやる主義ですから、暇な部署に行けば時間を十分使って自分の好きなことをやることができます。前の調査係というところは制度問題が仕事ですから機関委任事務とか大都市特例、事務配分と言ったいわば公法学の牙城のようなところでした。周りは法学部出身の専門家ばかり。だから自分の中で劣等感がすごくありましたね。

(文書の川下から川上へ)

そこで、文書係というのはどういうところなのかと、よくよく考えました。考えてみると色んなことに気づかされました。役所は「文書主義」ですから、「意思決定は稟議書^{りんぎしょ}」というもので行います。決裁文書といいますが、この決裁文書をまず担当者が起案し、それに対して順番に上司が印鑑を押印することで承認の意思を示します。最終決裁権者が押印して意思決定がなされます。ところが対外的にその効果を発現するには、最後に名古屋市の代表者である名古屋市長が市長印(公印)を押印することが必要になります。その管理を文書係が市長に代わって行っているのです。公印を押して初めて文書は最終的な生産物になります。だから文書係は、公印を押させていいかどうかを最後にチェックするところなのです。そう考えると、チェックする文書はいわば、川下ですから、チェックの際に川上に流れを辿っていけば文書の全容がわかるはずですが、それを質問すればいい勉強になるのではないか、と思ったのです。これまでの担当者は、たいていは、「はい、よろしい」ということでほとんど質問することはありませんでした。それは実質審査ではなく形式審査だったからでしょう。しかし、ちょっと待てよと。こんないいチャンスはないと、色々公印を取りに来る担当者に質問しました。各局では、今度の文書の担当者はうるさくてしょうがないと悪評が立ったと思いますが、私としては、大変勉強になりました。

ある時ふと文書の形式が決定的に異なることに気が付きました。例えば、普通の文章は左上に宛先として何々殿(今は様)と表記します。ところがある文書は宛先が発信者のすぐ上(右ですね)に書いてあって、しかも敬称のない呼び捨てなんです。どうしてだろうと疑問に思いました。そこで調べてみると、これが「行政処分」だったのです。公権力とはこういうことだと妙に感心しました。つまり公権力としての意思を最終的に相手に伝える際の形式は通常形式と異なるということですね。下命の時は下命文書であり、許可をする時は指令という文書の形式をとるのです。それは行政処分ですから公権力は何々様なんてことは言わないわけです。だから呼び捨てなのです。ということが初めてわかって、じゃあ公権力とはなんだろうか、行政行為とは何だろうかという疑問が湧いてきて、勉強し始めました。幸いなことに、自席の後ろには法令全書が全部並んでいました。わからないところは係長に聞いたりしました。そうして勉強しているうちに随分リーガルマインドがついてきました。ちょうどその頃、係長試験(市役所の昇任試験でこれをパスしないと係長以上にはなれない試験)を受ける時期になっていました。一応経済学部出身ですから、経済は勉強していないと言ってもなんとなくわかります。法律については、劣等感がありましたが、リーガルマインドがついたことから、一気に行政マンとしての自信がつかしました。当時職員数は35,000人位だったと思いますが、法律については自分が一番詳しいという自信を持ちました。そうこうしているうちに、「捨てる神あれば拾う神有り」と誰かが言ったように、使ってみようと思ってくれた上司がいて、企画課というところに配置転換になりました。

(暇な時間を利用して職員機関誌へ投稿)

文書係時代は、時間に余裕があったので、「シャチ」という職員機関誌に投稿したりしていました。当時土曜日は午後から休みでしたので、土曜日の昼からアメリカンセンター（アメリカ政府の広報機関）へ行って、マイクロフィルムでアメリカの法律をみていたら、アメリカには情報公開法（FOIA）というものがあるのを知りました。情報公開法には「anyone（何人も）」公開請求ができると書いてあるのです。別にアメリカ人と書いてないではないか、俺でもできるのかと思って試しに手紙を書きました。各州のオンブズマン制度を調べようと思って、各州のオンブズマンに資料請求したら返事が来ました。

それを元に論文を書いてシャチに載せたのです。2本書きました。1本は「オンブズマン制度の導入を」、もう1本は「情報へのアクセス」と言う論文です。後者は、民主主義を希求する限り情報公開が名古屋市にも不可欠であるという趣旨でした。前者のオンブズマン制度は多分草分けだと思いますが、もう30年近く前ですから、オンブズマンなんて当時は誰も知らなかったと思います。オンブズマンはスウェーデンの概念で、19世紀末にスウェーデン憲法で定められました。アメリカでは、エグゼクティブ・オンブズマンといいます。そこの違いと意味合いを解きおこし、このオンブズマン制度を行政に何らかの形で入れないと、権力というものは市民を包摂していくと言う主張を展開しました。だから権力の暴走をチェックするにはこの3者の関係が必要ではないかという論旨で書きました。これらは、今でも十分通用すると自分では自負しています。実際、今ではオンブズマンが大活躍していますし、情報公開については、条例や法律が制定されています。

「情報へのアクセス」を書いた際には課長が昼休みに来て、「君の言っている話はパンツまで全部脱げということだ。行政というのはパンツくらいはいてないといけないのだ」と怒られました。その人が20年位後に退職された時に、送別会で酒を注ぎにいったら、「あの時は悪かった。君には先見の明があった」と誉められました。そんな事があつたりして好きなようにやっていましたが、どんな境遇でも腐らず、明るく楽しく、一所懸命やっていれば必ず日があたるのだな、とその時思いました。

次の企画課でも相変わらず、我がままでした。所属長に了解も取らず、勝手に国連地域開発センター（UNCRD）の地域開発研修に志願して、国連の研修に参加し（名古屋市で初めて）3ヶ月役所を留守にしまいました。研修の最後は、中国のフィールドスタディでした。現地中国で解散になりましたが、その後、調査と称して有給休暇を取って香港から東南アジアを回って帰って来ました。戻ってきたら席がないのですよ。いわゆる左遷ですね。課長から「君は今日からあそこに行ってくれ」ということで調整担当というところにお預かりになりました。いわば蟄居謹慎の身ですね。今考えると組織を無視したためちゃくちゃな振る舞いでした。私が上司でも怒るでしょうね。近い部署に異動させられただけでも温情的な扱いと感謝しなければなりませんね。ところが運がいいことに、いい人に預けられました。「こいつは鍛えなくてはいかん。このままでは役所では使えない」と思ってくれたのでしょね。目付というか指導員に鬼軍曹のような怖い係長をつけてくれました。担当課長からは「とにかく係長だけは泣かすなよ」と強く言われました。これにはさすがに私もまいりました。しばらくは言うことを聞いて、おとなしくしていようと。

そこへちょうど本山市長が横浜のアーバンデザインチーム（Urban Design Team）に感銘を受けて、名古屋市でも都市景観（アーバンデザイン）を検討しろということになりました。当時、横浜では飛鳥田革新市長のもとで田村明さんが企画調整局長として名声を博していました。田村さんは、岩崎俊介さんを中

心にアーバンデザイン室をつくり都市景観に力を入れていました。当時は、まだ名古屋では知られていなく「アーバンデザイン？ それってなに」という世界でしたね。建築家の黒川記章さんを部会長にして、「都市景観懇談会」というものをつくって、政策提言を1年で出せという上司の命で、私が担当になりました。

この政策提言が現在、名古屋市の都市景観行政の元になっています。現在の都市景観条例、都市景観室（組織）、景観地区、マスタープランなどすべてがここから派生しています。

この都市景観懇談会の政策提言が結構評判がよく、私も少し殊勝に組織人として振る舞ったこともあり私に対する見方が変わったと思います。

（昇任して総合研究開発機構 NIRA へ出向する）

こういうことがあって、そのうちに昇任の時期になり、東京の NIRA に出向させると言う話があり、2年間東京で暮らすことになりました。何よりの成果は、人脈と視野が格段に広がったことでした。名古屋から離れたことのなかった私にとっては異次元の体験の連続でした。政策研究はまだ当時の日本では十分認識されていませんでした。元はアメリカのランド研究所だと思います。アメリカでは政策研究が盛んでシンクタンクが国の政策を左右するほど重要な政策提言を行っています。NIRA はもともと田中内閣の幹事長であった二階堂進さんが日本でも必要だということで設立に尽力されたと聞いています。

都市問題を解決するのに各分野の専門家を集めプロジェクトチームを作り学際的な研究を行うことは新鮮な体験でした。常に「問題解決型で未来志向型」というのも面白かったですね。それぞれの研究員が色々な分野の研究をしていますので様々な情報が入ってきますし、ヒアリングを行うときは誰が聞いても自由でしたので幅広い分野に興味を持ちそれぞれの分野の第一人者の話が聞くことができたことはハッピーでした。また、NIRA は国が 100 億、都道府県と政令指定都市で 50 億、民間大手企業で 100 億という基本財産で成り立ちソフト系のシンクタンクでは当時世界一のものでした。研究員もプロパーの外に大蔵、通産、運輸、建設など各省と、都道府県、政令指定都市、大手民間企業からの出向者で構成されていましたから多彩な人材と交流する機会を得て多くの人脈ができました。ちなみに一昨年末に NIRA の同期の連中が中心になって東京で「NPO フォーラム自治研究」という組織を立ち上げました。研究員は全国に散らばり、私も東海地区を担当しています。

私の役所人生は大きく分けると二つに分かれます。東京へ行く前と行った後です。行く前は上司とトラブルばかりで左遷に次ぐ左遷で浮き沈みの多い人生でした。しかし、それゆえに多くのことを学びました。一言で言えば、私の座右の銘のひとつである「人間万事塞翁が馬」を経験しました。結局どこへ行っても「その場で全力を尽くす」一所懸命という言葉がありますね。ひとつのところで命を懸ける。時間軸で見れば「今という瞬間を全力で生き抜く」まあ、カッコよく言えば「今に生きる」ですかね。後は天命に任ずということですね。そういったことを、身を持って学びました。次は、後半の時代です。

●市長秘書時代はどうでしたか？

NIRA から帰名する段になり、ちょうど4月に選挙があり今度市長が交代すると言うことで、新しい市長の随行秘書を拝命しました。結局、西尾市長に9年連続で仕えることになりました。ある特定の人に

ずっと連続で9年仕えたのは恐らく私だけでしょうね。特異な例だと思います。公務員らしくない人生ですね。普通は、4年間随行秘書をやりと次は秘書係長などのライン係長に異動になるのですが、私はそのまま残ってくれということで主査（秘書担当）と言う新設ポストに就くことになりました。そのまま主幹（秘書担当）というこれも新設ポストをつくってもらい昇任しましたから、結局9年連続で秘書課にいたということになりますね。直属の上司から「お前はばかだ。西尾さんがいつまでも市長やっているわけではないぞ」と言われました。しかし、私にしてみると自分で画策したり頼んだりしたわけではないので、これも天命として受け取るしかありませんでした。役人としてはイレギュラーでしょうし、通常のルートから全く外れていましたからね。でも役所人生は、正直どうでもよかったのです。とにかく面白くやりがいがありましたから。

（秘書の仕事とは）

その時、すごく勉強になったのが「政治力学」です。市長は、政治家です。市長というのは3万何千人いる職員のうち、唯一の政治家なのです。同時に行政のトップでもあるという、摩訶不思議な存在です。市長を支えているのは皆官僚です。名古屋市の場合、政務秘書と言って政務を担当する秘書はいません。私は不思議な立場になるわけですよ。当然公務員ですから政務はできないのです。だけどそれを避けているのは、市長を補佐することになりません。

秘書として、一番重要なのは、「市長の意思決定の負担をいかにして軽減をすることができるか」ということなのです。そのためには情報を各局から収集し、それを市長にあげていかないと市長が意思決定できません。正しい情報をきっちりと吸い上げ、それをタイミングよく市長にあげることが重要です。その場合には、情報のソース（マスコミか、単なる伝聞か、幹部かなど）を市長に伝えなくてははいけません。一方、市長の意向を組織（局）に伝え、動かしていかないとはいけません。その仲介をしなくてははいけません。秘書というのはそういう役割ですね。ところが、局の方では、市長にあげたくないとか、これは報せたくないとか、都合の悪い情報は伏せようとしています。それを私が、市長に伝えると局としては、2度と情報をあげてこなくなります。だからあまり秘書が、市長の側にべったりとついてしまうと、局から情報があがってこなくなります。そうすると市長も正しい意思決定ができなくなります。ところが今度は、自分が局の側についてしまうと、市長にしてみれば、そんな秘書は要らないという話になります。まさに「忠ならんと欲すれば孝ならず、孝ならんと欲すれば忠ならず」の板挟みの心境ですね。その匙加減というのが、実は秘書の一番難しいところなのです。

秘書という立場は、実はそういう立場だという様に、私は考えています。市長日程の管理はラインとして秘書係長がいて、その下に秘書係というのがあります。経費やその他のことでは庶務係長がいて、庶務係があります。ちゃんとそれは組織として秘書課という組織があって、秘書課長がいます。だから私はスタッフなのです。主査（秘書担当）という職名ですけど、実態は特命担当、つまり何でも屋ですね。そのまま課長職の主幹に上がってしまいました。全くこれまでなかったポストですね。随行秘書はこれまでもありましたが、今までの随行秘書というのとは、ちょっと違っていましたね。とNIRAから帰ってきて、挨拶にいったら、当時の人事担当課長にこう言われました。実はこの人は、私がかつて蟄居謹慎をくらい、お預かりの身になった時の上司だった人です。この人がさらに偉くなって人事担当になっていたのです。

その人がこう考えたのだと私は思っています。「あいつも2年間東京に行き少しは人間修行をしてきただろう。あいつを今度使ってみよう」と。それは市長が革新から保守に替わることによって、違うスタイルの秘書を、彼は求めていたと私は思っています。現にその人に呼ばれて、こう言われました。「抱持ちとか、ドアボーイとか、茶坊主とかは、お前に期待していない」政策をサポートしろという意味ですね。それから長きにわたる私と西尾市長の関係が始まったのです。

今振り返っても自分の人生の中で特異な位置を占め、最も印象的で充実した時期でした。まさに自分の中の「シュトルム・ウント・ドランク (疾風怒涛)」の時期でした。

●秘書時代が長かったのです。西尾市長はどんな方でしたか？

(人間としての魅力にあふれた西尾市長～市長から帝王学を学ぶ)

西尾市長はすごい人で実に魅力的な人物でした。通常政治家の秘書は、自分の付く人のことを親父と呼びます。私の場合は、本当に親父だと思いましたが、心からそう呼びたかったですね。子供の時から母子家庭で育った身としては父親を知りませんでしたから余計親父に憧れていました。女房と一緒にいる時間より長いのですよ。1日のうちで、ほとんど市長と一緒に、休みがないのです。日曜日はもちろんありませんし、休日もなかったですね。一切ないのです。市長はよくテレビに出演しますから、しばしば床屋へ行きました。そうすると土曜日とか日曜日になります。その間秘書は待機していますから、自分が床屋へ行く時間がないのです。こっちはどんどん髪が伸びてくる。夜は2時くらいの帰宅が多かったですね。とにかく家に帰っても、風呂にはいると女房が起きるので、そっとそのまま床に就いて風呂にも入れない状態が続いたことがよくありましたね。私生活はほとんどありませんでした。でも不満もなくやれたのはとにかく面白くてしょうがなかったからです。トップと終始一緒にいて、その考え方に接したり、立ち居振る舞いを見たり、一緒に話をするってことは本当に面白いし、大変勉強になりました。普通の公務員では体験できないことですね。情報といえば、最高機密情報が入ってくるわけですよ。それはもちろん本人と自分との信頼関係がないといけません。もともと市長と秘書の関係は「強い信頼関係」がないと成り立ちません。馬が合ったときは大きな力を発揮しますが、馬が合わないと何もできません。酒をこよなく愛した人でしたから、酒を飲みながら色んなことを教えて貰いました。

西尾さんはすごい人だと思ったことは何度もありましたが、そのひとつに「重心が低く、軸がぶれない」ということがあります。2期目の選挙の時でした。消費税が初めて日本に導入された平成元年の4月でした。消費税が導入された直後の初めての大都市選挙で消費税選挙と言われました。与党の自民党にしてみると今後を占う試金石となる選挙でした。市民は、消費税というものを体験したことがありませんから、理屈では分かっているつもりでも、実際にスーパーなんかのレジで3%余分にとられると「なんだこれはけしからん」と頭にくるのですね。そんな税をこれまで経験したことがなかったのです。選挙は確か4月21日だったと記憶していますが、選挙中に西尾市長は、「スーパーの前で演説しても誰も足を止めて聞いてくれない」と嘆いていました。実際に3%とられるといい気がしないものです。当然、政府は法律事項ですから転嫁するように指導してきました。名古屋市としても転嫁止む無し、と考えていましたが、さすがに現実の市民の反応を目の当たりにして、市長としても考え直さなければと思ったのでしょう。最終的には「市民の理解が得られない限り、転嫁はしません」ということになりました。こうなると政治力学で

すね。この時、市民のニーズというか考え方、反応を十二分に把握する必要をつくづく感じました。しかし、そんなに簡単なことではありません。その場合には柔軟に状況の変化に対応することが必要であることも学びました。とにかくそういうことがものすごく勉強になりましたね。西尾さんはその時にかなりの危機感を持っていました。元愛知県知事の桑原幹根さんや民社党の春日一幸さんにも協力要請に行きました。春日一幸さんは当時入院されていました。それでも病室から応援していただいたと聞いています。ともに「西尾は重心が低い」と言って高く買っていたっていました。重心が低いということは、軸がぶれないのですよ。

西尾さんはどちらかというと寡黙な人でした。それに実に辛抱強い人なのです。寒いとか、美味いとか。痛いとか一切言いません。だから西尾さんが「お腹が痛い」と言った時は相当痛い時なのです。とにかく忍耐強い人でした。それに実に人の話を聞くのが上手い人でした。人の話をじっと聞いているのですよ。年齢とか、身分、地位は全く関係なくフェアに聞いていました。若僧のくせにといったことは全くありませんでした。判断基準は、言っていることがいいかどうかだけです。

(辛抱強く人の話に耳を傾ける西尾市長)

こんなことがありました。あることで私が色々自分の考えを話しました。3ヶ月くらいして、西尾さんが「吉井君こうするぞ」と言うのです。私は忘れてしまっていたのですが、良く考えてみると私が言った意見なのです。どういうことかよく考えてみると、「お前の意見はワン・オブ・ゼムとして俺も聞いた。俺も色々考えた。その結果、これがいいと思ってこうすることに決めた」と言うことなのです。だから、責任は自分にあるということを彼は言っているわけですよ。どんな意見でも吸収し、それを自分の価値観とフィルターを通し、最終的には自分で決断する。一旦決断したら責任は自分が取る。彼はそう言っているのです。ところが一般的には人の意見を聴いて、いいと思うとすぐに実行に移す人がいます。上手くいったときは「俺が考えた」と言い、もしもうまくいかない「あいつが悪い」と言います。西尾さんはこれと真逆でした。人の意見を聴く時は集中的にきちんと聞いて、それを自分の中でゆっくり、ゆっくり醸成して自分が腹に落ちたものを外に出す。その時はもう自分の意見ですね。これはやっぱりすごいと思いました。

もうひとつ紹介しますと、NHKがハイビジョンを開発して、名古屋市でもハイビジョンに関わるかどうか議論していた時期でした。私もそれなりに勉強しました。市長と一緒に上京することになり新幹線に乗るとすぐに私はその案件について持論を話し出しました。西尾市長はずっと黙って聞いていました。私は、市長はこの件については、あまり知らないと思い図に乗って話続けました。ちょうど小田原駅に着いた頃だったと思います。ぽつっと市長があることを言いました。それはかなり深く内容を知っていないと語れない話だったのです。つまり市長はすべて知っていて黙って人の話を辛抱強く聞いていたのです。私は愕然としました。それから東京駅までは冷や汗もので恥ずかしくて一言も口がきけませんでした。そんなことがよくありました。後に市長を退任されてからどうして市長さんはあんなに辛抱強く人の話を聞いてられるのか伺ったことがあります。答えは「だって話したいのだから聞いてあげないと失礼だろう」ということでした。

(人事の要諦とは)

よく帝王学を酒を飲んだ時に教えてもらいました。例えば、人事の要諦について言えば、できる職員ばかり早く昇任させてはいけない。大半の職員には、年功序列も必要で「自分でもそこそこいける」という希望の芽を摘んではいけない。早く上げるものは、衆目がみて「あいつならしかたない」と納得できる者を上げることだ、と言うことです。あるいは、「竹には節がある。局の将来を考えれば、10年後は誰で局を支えるか、節になる人材を考えておかなければならない」「次の局長はこいつにして、10年後はこいつで支える」ということを頭に描いてなきやいかんと。そうすると、年齢や序列を考えれば、こいつを局長にすれば同期のこいつはバッティングする。(そうすると争いの元ですね。まるで跡目争いですね。)そこで早くから優秀な同期を間引くために、総務局(市全体の人事をつかさどるところ)と話をしておちらで処遇してもらおう。結局、間引かれた者も元々優秀な人物ですから違う局で局長になるわけです。

その話を聞いて人事を振り返ってみるとなんとその通りになっていました。例えば、西尾さんが市長になった時、出身母体の水道局は選挙の時に応援したこともあって、水道出身者が優遇されるものと期待していたと思います。一般的にもそのような人事になると予想されていました。西尾さんはそういったことを逆手にとって、市の職員が一体になるよう、わざと水道出身者を目立って処遇しませんでした。例えば、市長の行動を支えるいわば内閣官房にあたる秘書室に秘書課長というポストがあります。普通で考えると水道局の子飼いの優秀な職員を当てます。皆そう予想していました。それを直接あてずに近くの違うポストに就かせ、ほとぼりが冷めた頃、秘書課長にしました。肝心なのは最初で、そこをはずしたのです。そうすると職員の中に「西尾さんは必ずしも水道を優遇するのではなく公平な人事をする」という空気ができます。ところが短期ではなく中長期で見ると、結構水道出身者は処遇されているのです。ここが西尾さんの深慮遠謀で感心するところなのです。業者の対応もそうでした。市長になると一挙に親戚が増えるといわれます。これまで見向きもしなかった遠縁のものでも近づいてきます。まして建設業者などで親戚筋はすぐに飛んできます。西尾さんはあえて近いものを遠ざけていました。世間がこう見るという見方の裏をかいていましたね。

(トップの要件は3断2性)

それからよく「3断2性」ということを言っていました。これがトップの要件だそうです。トップというのはまず三つの断があると。まず判断力。判断ができて、次にこれをやるぞという決断力。決断しても実行しなければ意味がありません。そこで断行力。この三つが備わっていなければトップの資格はないと。でもそれだけでは十分ではありません。それ以外に二つの性があると。知性と品性ですね。この知性と品性がそれに付け加わってこそトップだと。この3断2性についてはよく話をしてくれました。

(何からでも学ぶことはできる～天地をもって経文となす)

それから始終一緒に車で移動していましたから、車の中で色々な話をしました。例えば統一地方選挙の時期になると、共産党以外はオール与党ですから市長のところに与党議員から選挙応援の要請がきます。そうすると日曜日に演説会場に応援に行き、応援演説をするのですが、必ず終わった後、車の中で感想を話します。お前は思うと。いけるか難しいか。初めのうちは私もよくわかりませんでしたが、段々

と見方がわかってくるのです。とにかく与党全員ですから70人近くになります。そうすると比較が可能になってきます。聴衆はどのような層が多いか、年寄りが多いか若者が多いか。女性はどれくらいか。熱気はどうか。来賓は誰が来ているのか。挨拶はどうだったのか。ということが比較できるようになります。特に来賓なんかを見ているとその人の人脈が見えてきます。もちろん党派によって異なりその特徴もよくわかります。そういったものを参考に過去のデータや本人の評判、マスコミの意見などを総合的に判断すると、意外と当落が見えてくるものなのです。

それからけっこう冠婚葬祭にもよく行きましたので、そこからも色々なことが見えてきます。特に葬式ですね。まず供花を見ます。誰からきているかみることによって、その人の人脈、交友関係がわかります。誰が弔辞を読むかも重要です。次に弔電に注目ですね。もちろん弔問客の数、職業なども要注意です。こういったことから、活きた情報の取り方を学びました。書物では得られない、生きた現場から「感性で情報を読み取る」ことを勉強させてもらいました。まさに二宮尊徳が言っている「我が学問は經典に非ず。天地をもって經文となす」を地でいっていました。その気になれば何からでも学べることを学びました。こういった情報を総合的に勘案するとそれぞれの議員の力関係の一端がみえてきます。どれくらい、その地域に力を持っているのか。これは、ある政策を地域で実施しようとする際に参考になりますね。これが政治力学ですね。西尾さんは政治の話が好きで、車の中でよく聞きましたし、酒を飲んだ時よくしてくれました。私はこれまでそういったドロドロした泥臭い話とは縁遠かったので、かえって新鮮で、大変勉強になりました。私はむしろNIRAで学んだ高邁な理念・哲学の話が得意でしたので、生意気にもそのような話を市長にしていました。逆に西尾さんにとっては新鮮だったのでは、と勝手に思っています。そういった点でも馬が合っていたと思いますね。

(仕事は、目先にとらわれず、10年先を見て行え)

西尾市長は「常に10年先をみて仕事をせよ」とよく言っていました。こんなことがありました。ある局が局長以下部長、課長で市長レクに来ました。局長が「是非こういうことをやりたい」と力説しました。じっと聴いていた市長が、こう言いました。「局長さんは後何年で定年だね。もし局長の案を実施すると10年後に後ろに控えている課長さんが困ることになるよ。今は憎まれても10年後に、あの局長が頑張ったお蔭で今がある。そう言ってもらえる仕事をしなさい」と。なるほどと思いましたね。

それから市長は、メモ魔でした。情報には、敏感で、よくメモを取る人でした。朝は必ず新聞を読みます。新聞はかなり重視していましたね。そのために私の秘書としての1日の仕事の始まりは、新聞の要点をいかに時間内に市長に伝えるかでした。これは実は私の特技でもあるのですが、読むのが早いのです。普通の本なら1冊30分位で読みます。毎朝市長より1時間以上は早く出勤します。新聞は通常主要5紙ですが、それ以外の日経流通とか、工業新聞までとって、それらを一気に読んで、市長が読む必要があると、私が判断した個所にマーカーで一瞥すればわかるようにしていました。それを重要度の高い記事から上に積んでいく。市長が椅子に座った瞬間、目に飛び込んでくるようにしたのです。時間が5分ある時はここまで、10分の時はここまでという具合にですね。毎週月曜日の9時から幹部会なのですが、市長は20分もあればほとんど土日、月曜日の主要なニュースは把握することができました。それから幹部会へ出席するのです。幹部会でそれを話題にすると局長はまだ読んでいないから、知らないのです。市長は、さら

に自分のメモも見て指示をします。そうすると、局長は所管事項が答えられなくて恥をかいたと思うのでしょうか、局長が局に戻り、総務課長に文句を言う場合もあるのです。「どうして事前に教えてくれなかった。調査不足だぞ」と。今度は、怒られた総務課長が私のところに「どうして教えてくれなかった」と文句を言うのです。私もそんなことは聞いていません。情報や材料は私が提供している部分も多いのは確かですが、すべてではありませんし、どれをどのように言うかは本人が判断して言っているわけですから、それは全くの誤解ですね。

本を読むのが早かったので市長に情報を入れるために関係図書をかなり購入し、それを読んで重要なところに赤で線を入れ、さらに折って市長の机の前に並べました。食後の時間のある時などに目を通してもらえばいいというつもりでした。ところが市長決裁を取りに来る職員がそれを見て噂になりました。そんなことから私が情報操作しているように思われたのかもしれませんが。しかし、西尾さんは独自の情報源を持っていました。それは週刊誌と市内の移動です。ポストや現代などの週刊誌は新幹線に乗る時、必ず買いました。読んでいて、なにか、ふと気になる情報があるとすぐにメモを取るのです。ある時、新幹線が到着する寸前に突然メモ帳を取り出して書き始めたことがありました。こちらは早く乗車しないとまずいと焦るのですがわれ関せずでしたね。

また市長職の大きな特徴のひとつに、始終車で市内を走っているということがあります。このことはあまり意識されていませんが大変重要なことです。普通幹部が現場を見たり、名古屋の状況を見るときには、目的意識的に車で出かけますね。ところが市長は毎日それをやっているのです。会合に出席し、挨拶するために始終どこかに出かけます。毎日の移動距離は相当のものになりますね。本人が「意識的に街を見る気にさえなればいろんな情報を街そのものから得ることができます」。例えば、街路樹の状況とか交通量、工事の進捗状況などなど。まさに「街は情報の宝庫」なのです。従って市長がその気になれば街に関する情報に関しては、職員はかなうはずがありません。しかも、そこにもってきて選挙の時は、狭い路地まで入って街宣しますから、名古屋の隅々まで見ることができます。そのようにして、車中で感じたことを一生懸命メモしていました。市長は職員の誰よりも忙しく、誰よりも情報が入ってきます。従って、このような市長に対抗するには相当の覚悟をもって常に情報を収集し、現場を見て勉強しなければとてもついていけないし、市長を支えることはできないと思いましたね。

(情報の重要性を深く認識。メディア、マスコミ対応を重視)

西尾市長は、とにかく情報の重要性を深く認識していましたね。だからマスコミを大事にしていました。記者連中もよく市長宅に出入りしていました。私が受け持った大きな仕事のひとつはマスコミとの関係です。職員の大半は慣れていないこともあり、マスコミというと煙たがりますが、マスコミとの良い関係を構築することは大変重要です。よくマスコミは「事業より事件に興味がある」と言われます。確かに不祥事などの事件になると大きな扱いになります。一方、事業は余程でないと大きな扱いはしてもらえません。それでもまだ名古屋の場合は恵まれている方です。この地域では名古屋市が断然大きいからです。名古屋市で発信すれば大きく取り上げてもらえます。関西では大阪、神戸、京都がありますから神戸などは苦勞しています。もっと気の毒なのは北九州市ですね。隣に福岡市がありますから相当話題性の高い事業でないと取り上げてもらえません。私の場合は市長と長きにわたり不即不離の関係でしたから市長の考えも十

分理解していました。それで報道官的な役割を担いました。秘書時代に経験したマスコミ対策が交通局の財政再建の時に大いに役立ちました。色んな事業を考え、それをメディアに取り上げてもらい、それで職員はじめOBや市民に局の考えを知ってもらい理解を求めるといった戦略です。もちろん赤字企業ですから高い宣伝費用は出せません。それより効果があるのが通常の記事です。これは無料です。しかも目につくところに書いてくれます。1年間広報課に効果を測定してもらったことがあります。1年間の新聞、テレビなどで取り上げられた交通局の記事を、宣伝広告という形で、有料で購入するといくらになるか算出したのです。平成19年度でなんと7億8千万円にのぼりました。そのためにも取り上げてもらえるような新規事業を連続的に打っていくことが必要なのです。米国や中国などでは広報の位置づけは、日本に比べ高いですね。日本でも広報の位置づけをきちっとしている企業は伸びると思います。その点名古屋市はまだだだと思えますね。

(引き際の美学と「^{りげん}綸言は汗のごとし」)

酒に酔った西尾市長がある時、ポツツと言ったことがあります。「吉井君、綸言は汗のごとしと言う言葉を知っているかね」と。私は知りませんでした。意味は、「天皇など高貴な人が一度口にした言葉は汗と同じで元に戻らない」と言うことだそうです。そう言えば「綸旨」の綸ですね。市長になって毎週幹部会などで発言する言葉は、組織の末端まで伝わりますが、ある時「伝言ゲーム」みたいなもので、自分が言った趣旨と全く逆に伝わっていたのを知って、愕然としたそうです。

それ以降「口数が減った」と言っていました。また、「引き際の美学」はよく言って見えました。「男は普段は、昼行燈でいい。ここぞという時に力を発揮すればいい。難しいのは、市長になる時ではなく、辞める時だ。人は、絶頂期に惜しまれて辞めるのが一番。それが男の美学だ」と。事実、平成8年11月、翌年の4月に4選を控え、全与党が西尾4選支持を合意した直後、突然引退を表明しました。誰にも言わず、孤独な決断でした。相談すれば必ず引き止められることを重々承知していたからです。常日頃、語ってくれた「惜しまれて辞める」と言う引き際の美学を見事に実践されました。

その後は、西尾さんが3期当選してから、私も普通の公務員に戻って、ラインの企画課長になりました。しばらくして、西尾市長が退任し、松原市長になりました。松原市長の時に企画部長を拝命しました。松原市長の長期総合計画を策定するためです。

●名古屋市の総合計画についてお話しください。

(名古屋市の総合計画の歴史)

河村市長が最初に策定した中期戦略ビジョンが2012年に切れ、次の長期総合計画づくりが現在進行中です。昨年の末から今年にかけて各区をまわってタウンミーティングを開催していますね。ちょうどいいタイミングなのでこれまでの名古屋市の長期総合計画がどういう考え方で策定されてきたのかを振り返っておきましょう。まず、総合計画と言うのは「政策の集大成」なのです。図1をご覧ください。一般的に計画の構成は3段階になっています。計画期間の長いものから、基本構想、長期総合計画、短期計画（実施計画、推進計画）です。

図2を見て頂くとわかりますように、名古屋市の最初の計画にあたる「**将来計画要綱**」が昭和32年に策

図1

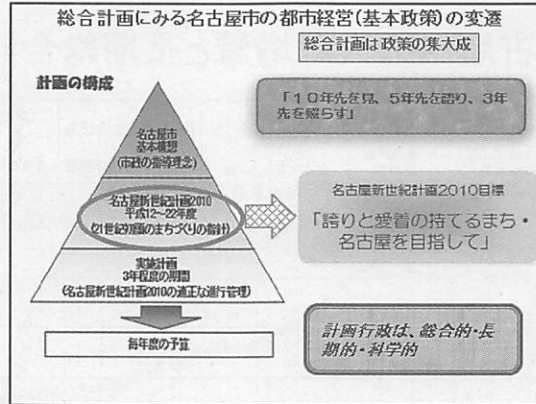
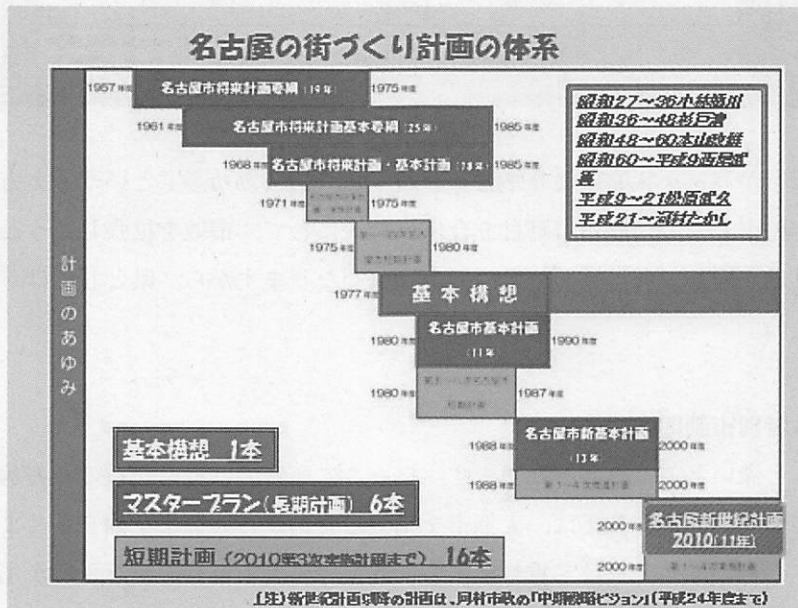


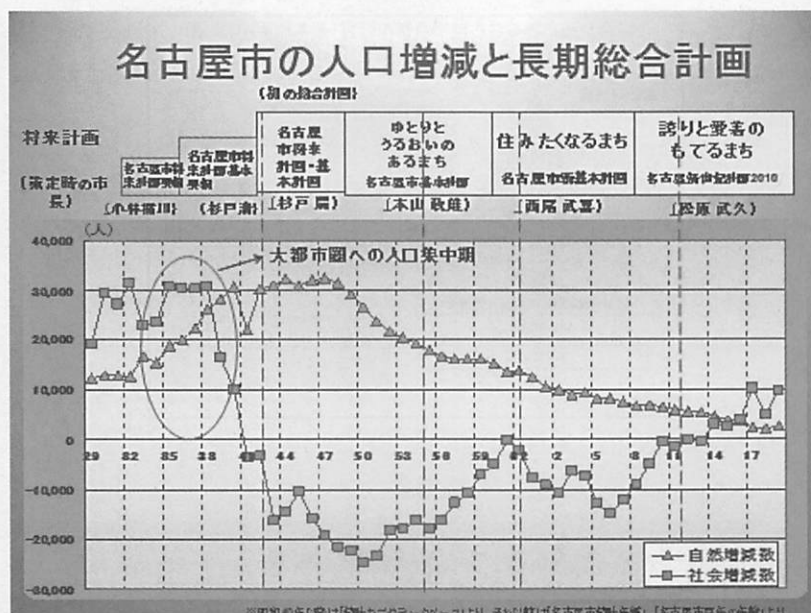
図2



定されています。どういう経緯で策定に至ったかと言いますと、一言で言えば「名古屋市の計画づくりは喧嘩から始まった」と言えると思います。何がきっかけだったかと言うと、合併問題なのです。もっともその遠因は「特別市制問題」なのですが、名古屋市が周辺の隣接市町村を合併（編入）すると、どうしても県のエリア（支配区域）が少なくなるということで県が反対し、喧嘩になります。その喧嘩から計画が生まれたのです。どういうことかという、図3のグラフをご覧ください。

この一番左側のところを見てください。だいたい昭和38、9年あたりまで社会増減で見ると、社会増がものすごいですね。特に丸で囲ってあるところは、全国的に大都市圏に人口が集中した時期です。それから自然増もすごい伸びですね。名古屋市でも九州などから職を求めて、どんどんやってきました。昭和31年に「もはや戦後ではない」という有名は都留重人さんの経済白書が出て、日本の人口も経済も戦前のピークの水準を回復しました。その後は高度成長期に入り、労働力不足からどんどん人口が都市部に集中しました。人口が増えてくるとどういうことになるかという、都市には「都市容量」というのがありますか

図3



ら容量を超えると都市がパンク状態になります。いわゆる「過大都市論」という考え方ですね。これを解消するために、名古屋市としては周辺市町村を合併（編入）して、市域を拡張しようとしたのです。当然市域が広がれば、県域が同じである以上、県の領土は狭くなりますから、県としては「いいですよ」とは簡単には言えませんね。

(対立の根底にある特別市制問題)

しかし、根はもっと深いところにあったのです。根っこにあるのは戦前からの「特別市制問題という大都市制度問題」なのです。簡単に言えば、大都市を抱える府県から大都市を独立させようという運動なのです。どうして独立かという、実は二重行政。ちょうど今の大阪市長の橋下さんが主張しているような話なのです。ところがこれに対して都道府県側から猛烈な反対運動が起きるのです。一番激しかったのが大阪です。大阪の場合は、大阪府と大阪市はほとんど行政区域が重なっていましたから、もし大阪市が独立すると大阪府域というのは、薄っぺらの皮一枚になってしまいます。それでは府として存立できませんから、猛烈に抵抗しました。

大阪だけでなく大都市を抱える府県と大都市はすべて反目していました。もちろん愛知県と名古屋市も例外ではありません。この大都市制度問題を語ると長くなるので、簡単にしますが、結局、どういうことになったかという、戦後昭和22年に地方自治法が施行された際に、法律で特別市制度が明記されたのです。その施行期日は政令で定めることとされました。そこで名古屋市は、早速実現に向け市役所に「特別市政問題対策本部」を設置し、区にも支部を設置しました。昭和24年9月にはシャープ勧告が、またそれを受けて国において地方行政調査委員会が設置されました。それを契機に昭和26年頃から特市実現の運動が活発化していきます。昭和27年には庄内川改修期成同盟会が親睦団体「名^{めいりんかい}麟会」となりました。国も町村の合併を促進する方針で昭和28年には町村合併促進法が制定されました。

(県市の激しい対立)

こういった気運の中、名古屋市は周辺 11 カ町村の合併（編入）を県に申請しました。県は昭和 30 年 3 月に県議会に付議しました。この結果、天白村・猪高村の合併は認め、山田村・楠村の合併は保留。他の 7 町村は合併不相当とされました。名古屋市はこれを不服として内閣総理大臣に対し審査請求を行いました。時の愛知県知事桑原幹根氏の考えは「名古屋市には特別市制をしく底意があるから、必ずこれを否決する」という強硬なもので、名古屋市との合併に賛同する町村に対しては補助金をカットするという「大都市周辺整備促進条例」という条例を制定して、合併を阻止しようとした。

当時の県の主張は「名古屋市が過大都市になる」というものでした。一方名古屋市の主張は「このままでは名古屋市が過大都市になるので、それを回避するためにも合併を」というものでした。この争いはさらに過熱化し、昭和 38、39 年の鳴海・大高・有松の合併を巡って、傷害事件にまで発展しました。国会でも当事者を招聘した意見聴取がなされ、地元出身の衆議院議員赤松勇、横山利秋、春日一幸の 3 氏が激しく質問しました。その一端を衆議院地方行政委員会議事録から一部紹介しておきましょう。当時の状況が手に取るようにわかります。

「名古屋市の合併を決議したためどうでありましょう。至る所に県は権力を持って、圧力を持って、金を持って、みな町村を腐敗させております。そうして大手をふって暴行をやっています。その一例が鳴海町の流血障害事件であります。ここにおいで鈴木総務部長はその謀議にあずかって……」（解説：意見聴取のため知事が招聘されたが鈴木総務部長が知事代理で出席）「知事は再び当選して、約束は固く守っていました。その結果はどうであったのか。……私は憤慨しております。……反対がないのに反対を作り上げたのは県と県の出張所の諸君であります。……しかも暴力を振るい、権力を振るい」（解説：桑原知事は任期途中で県民に信を問うために辞職。選挙で再選）「全く、百鬼夜行とも称すべきものであって、まさに人殺し、火付けと強姦が行われていないだけで、一切の犯罪がこの名古屋を巡る 11 カ町村の内部に恐るべき勢いでおこなわれているのであります。」「県職員が先頭に立って酒に酔った連中を引率して、賛成派村議の会合場所に殴り込みをかけた……」「あらゆる悪質の限りを尽くして阻止工作をした。噂によれば県の職員を通じて交際費が 70 万円、地方事務所長を通じて村長に合併特別委員長ほか 2、3 にばらまかれた工作費が 30 万円といわれる」（春日一幸）

少し長くなりましたが、当時の状況がまざまざと蘇ってきます。凄かったですね、当時は。

(政治的妥協の産物としての現行政令指定都市制度)

元に戻りますが、結局この政令は定められず、この制度は実現されなかったのです。これでは大都市側はおさまりません。そこで国は妥協の産物として昭和 31 年の地方自治法の改正で、現在の指定都市制度というものをつくりました。都道府県の権限であった 16 項目に限って政令指定都市に移譲するというものです。従ってこの限りでは指定都市は県と相談することなく、独自に判断し、政策を実現することができるようになりました。この政令指定都市というのは名前の通り政令で指定します。要件は人口 100 万人以上ということですね。現在では 50 万人まで緩和され、当初の京都、横浜、名古屋、大阪、神戸のいわゆる 5 大都市から現在では 20 都市にまで増えています。さらに 30 万人だと中核市、20 万だと特例市というようなあらたな制度が現在ではできています。ただし、法律では「当分の間」と書かれているのです。し

かし、当分の間が今でも続いています。あくまで現在の大都市制度は「政治的な妥協の産物」で、根本的な問題は残存したままなのです。橋下大阪市長の問題提起は実はこの問題と深く関わっているのです。

このように喧嘩の根本原因は特市問題なのです。愛知県からすると名古屋市は周辺市町村を合併(編入)して、愛知県から独立するということを考えているのではないか。名古屋市が大きくなって独立されたら、県はそれこそ薄皮一枚になってしまうということで、対立していたわけですね。

(地域の運営を計画的に行う)

結局、収拾の目途が立ちませんでした。こんなことをやっているとダメだということで、もっと本質的なところを考えようと言うことになり、「地域全体をどうするかその在り方を考えよう」ということで、愛知県が地域計画をつくらせると言い出したのです。つまりこの地域の将来はどうあるべきで、どのくらいのエリアで、それぞれの地域をどう運営していくか、それを計画で示そうということになったのです。

策定に当たっては関係者全員で協議会をつくり、そこで策定しようということになりました。これが「愛知県地方協議会」です。愛知県が地方計画づくりに取り掛かると、愛知県の中心は名古屋市ですから、名古屋市については「お前のところの考え方を示せ」と言うことになるのです。そうすると名古屋市も愛知県の好き勝手にやられてはたまりませんから、名古屋市としても今後どうするか自分のところの計画を作ろうということになったのです。これが名古屋市の計画づくりの始まりです。愛知県は昭和31年に愛知県地方協議会をつくりました。そこへ名古屋市としての考え方を反映するために策定したのが最初の計画である「名古屋市将来計画要綱」です。社会党支持で当選した小林橋川さんが市長の時ですね。

(市域拡大にこだわった杉戸市長)

その後、名古屋市水道局出身の杉戸清さんが市長になって、昭和37年に「名古屋市将来計画基本要綱」という計画を出しました。杉戸さんの考え方は、一言で言えば「大名古屋市の実現」だと思います。当時の時代背景から已むおえない面もありますが、杉戸市長は103歳で亡くなる前まで大名古屋市を夢見ていたように思います。計画にその特徴がよく表れています。市域合理化が理想都市(大名古屋市)実現の大前提であり、そのために根幹となる「市域適正化」の目標人口を356万人と想定しています。今から考えるとものすごい人口ですね。杉戸市長のもう一つの特徴は「産業基盤の整備」でした。名古屋市の都市高速道路も2013年11月に高速4号東海線が開通し、高速道路公社設立以来43年に亘る事業が完成し、ネットワークができました。実はこの時の計画においてすでに、名古屋都市高や第2環状線の原型が示されていたのです。

杉戸市長の3期目に当たる昭和43年に「名古屋市将来計画・基本計画」という最初の長期総合計画が策定されます。この計画の柱も引き続き「市域拡張論」でした。計画期間18年(昭和43~60年度)という本格的な長期総合計画で、経済成長率8%、名古屋市の実質都市圏を都市依存率30%を超える地域として、金山を中心とした半径15kmを適正市域圏と想定し、そこに356万人を収容するという壮大な計画でした。(図4参照)市域の対象区域は約430km²で市域合理化(つまり周辺町村の編入)目標区域は、周辺10町村に及びました。対象になった町村は十四山、飛鳥、弥富、上野、横須賀、大治、甚目寺、西枇杷島、新川、清洲でした。計画書の中でわざわざ1章をさいて「市域の合理化」と記述するほどの力の入れよう

図4

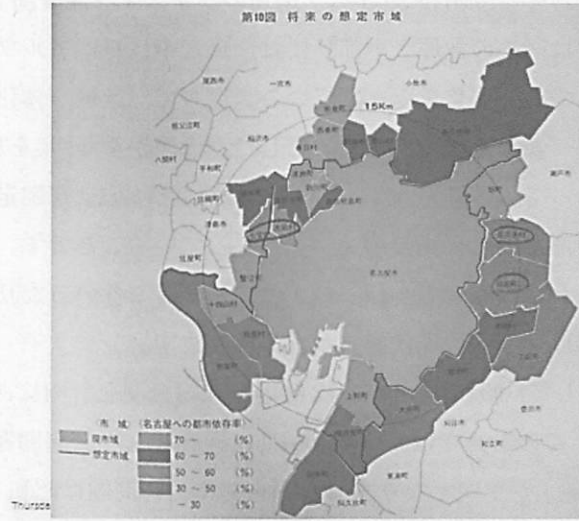


図5



でした。

市制施行以来の名古屋市の人口の推移をみますと確かに周辺市町村の編入を繰り返して名古屋市は人口を拡大してきました。しかし、それも昭和38年の守山市、鳴海町の編入、昭和39年の有松、大高町の編入が最後でした。(図5参照)

(広域行政の発想)

当時の社会状況は、高度成長期に3大都市圏に人口が集中したことにより大都市圏といった「リージョン(圏域)」の考え方が登場してきていました。広い圏域で考えていこうとする思想ですね。まず首都圏において総合的に開発していこうと言うことで昭和31年に首都圏整備法が制定され、ついで昭和38年には

近畿圏整備法が制定されました。そうなると同圏域に挟まれたこの地域も、バスに乗り遅れないようにと圏域設定の気運が高まりました。そこで昭和39年に「国連のワイズマン調査団」に現地調査を依頼し、提言をもらいました。提言の主旨は、この地域（中部）には、真ん中に日本アルプスがありそれがバリアーとなり、北陸と東海の地域としての一体化を阻害している。従って、地域一体化のためには南北の交通網が必要とのことでした。それが「東海北陸自動車道」でした。構想から44年を経て2008年に全線開通しました。そして地域の要望もあって、昭和41年には「中部圏開発整備法」が制定されました。興味深いのは、首都圏や近畿圏と異なり中部だけは「開発の文字」が入っていることです。これは、中部はまだまだ未開発の地域が多く残っているという意味ですね。いずれにしてもこういったリージョンの考え方が登場すると、その核となる大都市には「中枢管理機能」が求められます。

また、政府は地域開発計画として、昭和44年に第2次の全国総合開発計画にあたる「新全国総合開発計画」（新全総）を策定しました。この計画では、高度成長期に顕在化した公害問題のうねりを受け「経済と環境」の調和を図る「社会開発論」が主題となりました。すでに公害問題は昭和30年代から水俣病や四日市ぜんそくなどが問題となり、それぞれの自治体が公害対策に力を入れざるを得ない状況になっていました。

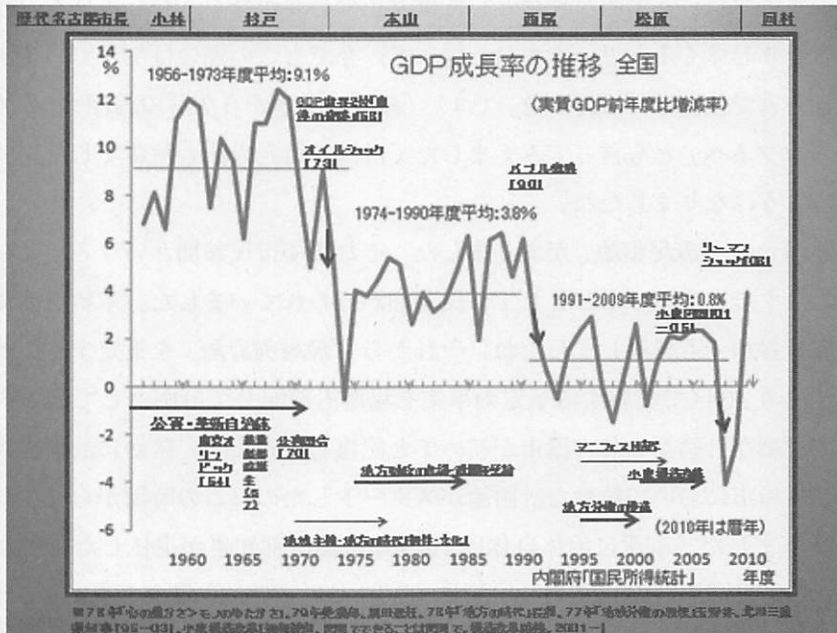
そのうねりが革新自治体の登場となり、国の施策が遅れをとる中で革新自治体が積極的に「条例制定権を活用」し、公害防止条例などを制定しました。昭和42年にはそのシンボリック意味を持つ美濃部革新都政が東京都において実現しました。国も革新自治体に押される形で昭和45年には、公害対策基本法はじめ水質汚濁防止法、大気汚染防止法など典型7公害の立法化を実現し「公害国会」と呼ばれました。

そういった背景を考えると、名古屋市の昭和43年の基本計画は時代の潮流を十分読み切った計画とは言えないのではないかと思います。計画を策定する際には、まず最初に、人口フレームというものをとります。人口が将来どうなるかが計画の大前提になるからです。なぜなら公共施設の整備など物的計画はすべて人口をベースに考えるからです。従って、将来人口をどう予測するかが計画にとって極めて重要な鍵になるのです。しかも経済フレーム（これも予測しますが）と違って人口の予測はコーホートを使えば比較的予測しやすいからです。この43年の総合計画では356万人の将来人口を考えています。そうなる道路から交通網から公共施設まですべての物的計画は356万人を想定して整備することになります。一方時代状況は公害問題への対応など環境問題が主流になりかかっていました。図6を見て頂くとわかりますように、GDPの成長率の推移というのは3段階に分かれていますね。

そうすると昭和45年というのは、オイルショックでGDPが下落する直前ですね。結局急激な時代変化により現状との乖離が顕著になり「部分修正計画」として昭和46年に「名古屋市・将来計画・実施計画」が策定されました。この43年の総合計画は、計画期間も超長期18年と長いですね。結局2年で修正を余儀なくされ、その2年後に杉戸市長3期目の任期が切れ、市長選に突入することになります。この昭和48年という時期はどういう時期かという日本にとっても重要な時期です。

昭和48年には中東の石油危機に端を発した「オイルショック」が日本を襲い、一挙に経済成長率が低下します。と同時に石油依存のエネルギー政策を転換し、原子力発電のウエイトを上げる方向にエネルギー政策を転換した年でもありました。先ほど述べましたように、このころは、革新自治体が力を持っていた時期で、1979年に美濃部東京都知事、大阪の黒田知事が相次いで退任して衰退していきませんが、この昭和

図6



48年は革新自治体にとっては最も輝ける最盛期でした。

(杉戸市長の敗北と本山革新市政の誕生)

そこで選挙になりました。現職で4期を目指した杉戸市長が敗北し、革新の本山市長になりました。ここで計画論がガラッと変わります。今までの地域拡張論とか、産業基盤優先論から、福祉や教育といったいわゆる「ソフト施策」にシフトします。本山市長自身が名古屋大学で教育学を教授されていた方ですから、公約は「福祉と教育」の充実でした。201頁の図2をご覧ください。興味深いことがあります。それは本山市長が最初に策定したのは、「短期計画」であるということです。次に名古屋市の憲法にあたる、長期ビジョンである「名古屋市基本構想」を昭和52年に策定します。長期総合計画にあたる「名古屋市基本計画」は昭和55年に公表しています。当時政府も地方公共団体の運営を計画的にやらせようということで確か昭和53年の地方自治法の改正だったと記憶していますが法律で「市町村は議会の議決を得て基本構想を定めなければならない」と制定が義務付けられたのです。

「10年先を見、5年先を語り、3年先を照らす」というのが計画だ、というのが私の持論ですが、それを通常の計画論にすると、長期計画、中期計画、短期計画（実施計画、推進計画ともいう）となります。本来なら計画期間の長い計画を先に策定しますが、本山市長は、まず一番短い短期計画を先行して作りました。

基本構想というのは期間を定めない長期ビジョンです。この本山市長の時の基本構想のコンセプトが「ゆとりと潤いのある街づくり」です。これが名古屋市の唯一の基本構想でその後も改正されていません。基本計画策定の際、常に基本構想の改定が話題になりますが、多少の齟齬はあるにせよ（例えば「太平洋ベルト地帯の代表的都市」という表現が見られますが、これは池田内閣の所得倍增計画を実現させる

ために重化学工業を中心とした石油コンビナートを太平洋岸に集めた太平洋ベルト地帯構想の残照で、今日では使われない表現ですね) 基本的な理念としては改正の必要がなく、むしろ日本の社会が成熟するにつれてかえってぴったりしてくると思いますね。従って、今でもこの理念は生きています。

本山市長の理念は一言で言えば「市民本位」です。「経済の論理から生活の論理へ」とか「生活優先、弱者優先。ハードからソフトへ」とも言ってみえました。計画の策定方法も斬新でした。計画の進行管理もこの時から行われるようになりましたね。

革新自治体の共通理念に「市民参加」がありました。それまで市民参加という考えはなかったですね。しかし、アメリカではすでに当然のこととして市民参加が行われていました。革新自治体はそれを主張しました。併せて「職員参加」も提唱しましたね。それから「地域別計画」を策定することになったのもこの時からですね。つまり16区で実施する予定の事業を場所も明記して計画として公表するのです。私の記憶では、ここまで詳細な計画論は名古屋市が初めてと記憶しています。確かに計画論は時代背景もあり実に新鮮でした。名古屋市において精緻な計画論がスタートしたのはこの時期からですね。

反面色々問題もありました。革新自治体自体は1979年に美濃部知事が退任したあたりから衰退してきますが、私は二つの要因があったと思っています。ひとつは、昭和48年のオイルショック以降、日本の経済成長率が落ち、各地方自治体が財政難に見舞われたことです。この時期、国は「減量経営論」を言い出しました。当時の自治省が中心になって革新自治体への攻撃が始まりました。昭和51年には全国市長会が「低成長下における都市政策のありかたについての提言」を公表しますが、それを肉付けし、具体化するということで財団法人日本都市センターに都市行財政研究委員会が設立されます。委員長は、後に東京都知事に就任する鈴木俊一氏です。この中で「コスト意識を持て。まず、ぜい肉を落とせ」といういわゆる「減量経営」が提唱されました。財政難によって目玉の福祉に予算が回らなくなったのは打撃ですね。今ひとつは、革新自治体の支持母体の分裂ですね。一般的には社会党と共産党が支持母体でしたが路線の対立などでしっくりいかなかったのが大きいですね。本山市長の登場は全国的な流れからすると遅ればせながらという感じですね。1期目は少数与党でしたから大変でした。当初予算が否決されるという大都市では初めてのケースにも直面しました。当時、私は行政課調査係の係員でしたが、ある時山田昭夫行政課長が慌てて席に戻ってきて「当初予算が否決された。大変だ、急遽自治省に相談に行ってくる」と言ってすぐ上京されたことを思い出しますね。

本山市長は特に道路行政には消極的でしたね。「道路はいらない」と発言し当時の建設省が怒ってもめたことがありました。確かにハード系の整備いわゆるインフラ整備には消極的でした。それが、「活気と活力に欠ける」と批判されました。特に象徴的だったのが都市高速道路の地下化でした。新川中橋あたりで建設途中の橋げたがそのまま凍結され、雨ざらしになったまま放置されていました。そのまま残して記念碑にしたらどうかというようなことも言われましたね。国の官僚に頭を下げて補助金をもらおうということは嫌いでしたね。

(革新市長の退任と西尾市政)

次に市長になったのが名古屋市水道局出身の西尾市長でした。西尾市長は元々政治家の一家でした。祖父が中津川の阿木の村長。父親が中津川市長。3代目ですね。郷里は岐阜2区ですから衆議院議員や中津

川市長という声もあったようです。しかし、本山市長の後に是非ということで共産党以外すべての党の推薦で市長に推挙されました。本人は固辞したのですが「お前しかいない」ということで押し切られたようです。そこで出馬するについて条件を出しました。それが「逆提案」というもので、これをやりたいのでこれを承認するなら出てもいいと言うものです。その時のキャッチが「住みたくなる街づくり」です。そして、一番力を入れたのが「高速道路の高架化」です。本山さんが地下化を言いだし、凍結されていた高速道路を高架に都市計画変更をして、推進しようというものです。西尾市長は京大の土木出身で、もともと名古屋の都市計画に憧れて、街づくりがやりたくて、合格していた建設省を袖にして名古屋市に入りました。西尾市長の京大土木の先輩で谷重幸という助役が当時見えました。この人が高速道路の推進者でしたが現職でなくなりました。その先輩の想いを実現したいと考えていたようです。西尾市長にしてみると全国で高速道路の建設が進む中で名古屋だけ作らないというのはネットワークとして機能しなくなり名古屋が取り残されるという思いがあったと思います。

また、西尾市長には、名古屋の市域にとらわれず広域で考えるという発想がありました。その象徴が「近隣市町村懇談会(近隣サミット)」です。これはそれぞれの自治体が市域にとらわれているので住民が苦勞しているという認識です。例えば道路ですが、名古屋市内は舗装されて広幅員なのですが一歩市域を出ると途端にがたがた。こういった問題は近隣の首長同士が不断に交流していれば解決できるということでサミットを提唱し、今でも続いています。

西尾市政の一番の根幹の考え方は、「住みたくなる街づくり」です。その思いは何かというと、今住んでいる人は、そこに住み続けたい。外の人は一歩行ってみたい。そして住みたくなる。そんな街づくりをしていこうというものです。ある意味で都市の魅力づくりみたいなものなのですが、そのためにどうするか。ここが一番のポイントなのですが、こういう風に考えたのです。

「20世紀のうちは貯蓄率が高い。21世紀に入ると、超高齢社会になる。当然、貯蓄率が落ちる。そうなれば新規に投資ができなくなる。だから20世紀のうちに必要なインフラは全部やっておく必要がある。21世紀はそれをオペレート(維持管理)したり、あるいは財源をソフト施策(特に福祉、社会保障)にまわさざるを得なくなるだろう」と。だから「20世紀の内に必要なインフラは全部やっておく」と、これが一番基本です。このことを明確に宣言したのが、ちょうど市制百周年にあたる昭和64年ですね。新年の年頭所感で明言しています。インフラの重要性についてはもともと土木技術者であり長年水道行政に携わっていた経験から痛いほど認識していました。ちょうど就任5年後に市制施行100周年を迎えるということでこれを千載一遇のチャンスと捉え、必要なインフラを一気に整備しました。もちろん100周年の記念イベントを行うわけですからその際に魅力のある施設や景観を整備し、名古屋を「魅力のある都市に変貌させたい」という思いがありました。博覧会のテーマについては色々な案がありましたが、最終的には「世界インダストリアルデザイン会議」を名古屋に誘致することが決まり、「デザイン」をテーマにすることになりました。(図7)これについては、デザインのような抽象的なテーマで人が呼べるのかとか、「グサイ名古屋」に最もふさわしくないテーマだとか批判が多くありました。しかし、グサイ名古屋といわれるからこそ思い切ってデザインでやろうということで踏み切ったのです。「お茶碗から、スペース・シャトルまで」が合言葉でした。朝出勤する時に、ネクタイを選ぶところから始まり、生活のあらゆる局面でデザインは私たちの日常生活に関わっているということをわかり易くキャッチにしたのです。

図7



●先生は、若い時にアーバンデザインを担当され、西尾市長の時にデザイン博を身近にご覧になっていますが、デザインと行政とはどのように関係するのか、先生のデザイン観を教えてくださいませんか？

少し、長くなりますがお許しいただきたいと思います。(興味のない方は、スキップしてください)もう20年以上前になりますから現在のデザイン状況は当時とは変わっていますからそのつもりで聞いてください。当時どういうデザイン状況の中で、デザインをどうとらえていたかお話ししましょう。あくまで当時の状況であることをご理解いただきたいと思います。

名古屋の街は「ニュータウン」でした。従って、東京や京都と異なり比較的白地にプランナーが自由に絵を書くことが可能でした。つまり、プランナーの意思が比較的明瞭に街づくりに反映されやすかったということですね。そのことが逆に、モダニズムの代表都市とも言われる名古屋を生み出し、モダニズムが批判されると同時に、その代表としての名古屋が批判され出したと言えると思います。その様な名古屋が自己変革をとげようとしたきっかけが、市制施行百周年を記念して構想された「世界デザイン博覧会を中核としたデザインをキーワードとした都市戦略」でした。

名古屋がデザインをどの様にとらえ、それを都市戦略としてどの様に位置付けたのか以下、私の見解を少し詳しく述べてみたいと思います。

(デザインを核とした街づくり)

デザインが我が国で一般に広く認められる様になりましたのは、1960年に東京で開催された「世界デザイン会議」からだと言われています。従って、当時としては、まだほんの30年位の間ということでもまだ新しいものでした。当時は、デザインというとせいぜいファッションデザイン位しか思いつかない市民も多いのが実状でした。

デザインは、日本語で「意匠」と訳されます。意は心、匠はたくみ、つまり技術を意味するため、デザインとは、「心と技の融合」とも言えますね。民芸運動の始祖、柳宗悦の表現を借りれば、「用（機能的）と美（美しさ）」ということになります。また、それは「De+sign」ということでもあり、私達の様々な欲求・願望・夢といった Sign を具体的な形に表していく行為を意味するとも言えますね。その行為に注目して、デザイン（デザインする）という言葉を使う人もいます、デザインという言葉がいかにも既にデザインされた形（もの）を一般にイメージし易いという点を考慮すれば、私達の欲求などを具体的に形に表していく行為そのものに着目したデザインという表現は正鵠を射ているのかもしれませんが。特に、若い人達の間で流行っている何事もすべて動詞化してしまう、つまり〇〇する、例えば「元気してる」などと同じコンテキストで使えば「デザインする」ということになりますが、デザインを一般に親しみやすいものにするのを考えれば一定の効果がある様にも思われますね。

（存在が意識を規定する）

このように、人々の欲求などを形に表したものがデザインであるとし、私達の生活はすべてなんらかの形でデザインに取り囲まれている、と言っても過言ではありません。朝起きて周りを見渡せば、時計、歯ブラシ、テーブル、食器すべてがデザインされており、しかも、それぞれがその時代性を反映したデザインになっています。その意味でデザインは「お茶碗からスペースシャトルまで」なのです。デザインを考える時、私達が見落としてならないのは、「人々の欲求が物の形として表れると同時に物の形もまた人々の欲求を同時にかきたてる」という点です。

その様な相互作用を通して、人々の生活様式が形作られていきます。例えば、私達は日本酒を飲む時おちょこを使い、ワインを飲む時はワイングラスを使いますね。容器の機能としては同じで、どちらで飲んでも味に差異はないはずですが、ところが、何かしらワイングラスで日本酒（熱燗）を飲もうという気分にはなりません。これは「道具の差異が行為の差異を規定する」ひとつの例ですが、私達の意識は常に私達によって作り出され、デザインされた道具によって規定されています。常滑出身の女優中野良子さんは、次の様な話をしています。彼女が利休の養女のお吟の役を演じた時のこと、利休の茶碗を使ったそうですが、すると茶碗の形のおおりに心が動いたそうです。形のおかしさが心を動かす例として、楽焼きの茶碗（手作りの木目の荒い陶器。素焼きの陶器に客に絵を書かせ、店先で短時間で焼かせるもの）があります。この茶碗でお茶を飲むと、陽気な気分で飲めると言われています。

このように、私達の考え方が合理的で効率的であればそれが形に表われ、デザイン自体もシンプルで機能的なものになります。また、逆に機能的なデザインは、私達の意識に作用して、人間そのものを合理的な人間に変えていく働きをします。まさに、マルクスが指摘した様に「存在が意識を規定する」のです。そういう観点から近代の特徴をみれば、人間と道具との関係が極めて機能的で合理的な関係にあったと言えるのではないのでしょうか。

当時のデザイン状況を大胆に一言で言えば、モダニズム（無駄を省いた必要最小限の要素で構成される形態が最も機能的で美しいとする、いわゆる機能主義の考え方）のデザインが主力であった様に思われます。その特徴は、徹底的な機能性の追求にありますね。余分な装飾を一切排除し、シンプルさを追求します。それは、後述する、コルビジェに代表されるように「機能的であるものが一番美しくもある」という

認識で、シンプルである程美しいということになりますね。

モダニズムのデザインが登場する 20 世紀初頭においては、それもまた新しい時代を象徴するデザインでありました。しかし、機能一辺倒のあり方に対する批判が強まり、合理的なものからむしろ非合理的なもの、機能性よりも装飾性といった様に、言わば「無駄の効用」が評価され、人々の間に受け入れられるようになっていきました。

(ものに心あり、道具に作法あり)

モダニズムのデザインに対する批判からいわゆるポストモダン（モダニズム建築の機能本位の合理性を否定し、感性の自由な表現や遊びを取り入れる動きで 1979 年イギリスの建築家チャールズ・ジェンクスにより提案）と言われて久しかったのですが、当時は、これこそがポストモダンであるという統一的な見解もなかったし、また、モダニズムに変わる新たな様式も登場してはいませんでした。まさに、当時のデザインはモダニズムから脱却しようとしてしきれず、過渡的状況で迷走している様に私には思えました。デザインが人々の生活を変革し、新しい生活様式を造り出すことが可能であるとするなら、新しい時代を先取りしたデザインを新たに提示することにより、新しい時代を切り開くことも可能になると考えました。

当時、確かに時代は大きく変わりつつありました。特に、バブル経済が崩壊し、従来の様な右肩上がりの時代が終焉し、本格的な成熟社会に入りつつある中で、人々の価値観は大きく転換することを余儀なくされていました。それは、一言で言えば足元をしっかりと見つめるということでした。空間的に言えば、それは、私達が実際に居住し、生活している地域であり、生活の場である家庭ですね。時代は大きなものから小さなもの、画一から多様、中央から地方へと軸の中心がシフトし始めていました。言わば、「生活者の視点」が重視される時代が到来しようとしていました。

近代というのはある意味では「分析の時代」でもあると思います。分析できなかつたり、理論化できない領域は、非科学的という名の下に、科学の対象外とされ無視されてきました。しかし、この傾向は少しずつ変わりつつありました。機能美にあきたらない人々が、装飾性を求め、理論化できない感性の部分に注目が集まってきていたのです。近代の特徴は、機能性・効率性にあつたため、製品の企画を統一し、画一化し、それをオートメーションで大量生産するという方式が当然のこととして受け入れられていました。従って、できた「製品は皆同じ顔」をしています。確かに我が国でも、高度成長期で欲しい物がまだある時代には、それも必要であつたでしょう。しかし、世界でも有数の所得を誇る状況では、人々はそれでは満足できなくなっていました。「人々の欲求は個性化の方向」に向かい、むしろ人とは違うものを求めるようになっていました。

かつて、若者が物ごとに素直に感動できた時代がありました。感動は理屈ではありません。人間にごく自然に内在する感性からくるものです。近代文明は、人間のこの様な感性を抑圧してきた様に私には思えます。今日、それが見直されなければならないと感じました。もっと素直に感動し感性をぶつける。人間の創造性はその中から生まれます。子供は全く素直に理屈無しに遊びに没頭していますね。また、どんな環境の中でも遊びを創造します。この精神こそが大切にされねばならないと。こういった感性を磨くことが大切な時代になってきたと感じていました。

デザインとは究極的には、その様な「感性の問題」なのです。決して見た目人目をひく華やかさを持

つとか、美しいとかいうことだけではないのです。大切なことは「物に心があり、それが見る人、使う人の心を打つ」ということなのです。

国際インダストリアルデザイン協会の会長も経験した柴久庵憲治氏は「道具の思想」の中で、「ものに心あり、道具に作法あり」と語っています。

かつての農耕社会においては、人々は風神、雷神の存在を信じ、自然を畏怖していました。工業社会に生きる私達は人工そのものの秩序に心を認めることはありません。それではだめで「産業が生み出すものは人に新しい世界を与えるものでなくてはならない」と柴久庵氏は説いています。特に、楽器を文字どおり、「**楽しみの器**」としてとらえ、道具の名称の中で一番美しい言葉であると述べているのは印象的でした。確かに楽器はそれ自体としてはただのハードにすぎず、そこに楽譜というソフトと演奏者の技量というものが加わることによって、素晴らしい音楽をかなでることが出来ますね。まさに、デザインとは、「人の心を形に表し、人の世界を作っていくもの」ですね。

その様なデザインを作り出すには、デザインする人の心、感性こそを磨かなくてはならないのです。しかし、「想い」がいくら強くても、それを的確に人々に伝える「技」がなくてはデザインにはなりません。だから、デザインとは「**作り手の心を確実に使い手に伝える優れた技術である**」とも言えるのではないのでしょうか。

●なるほど。デザインと言うものが少しわかってきました。ではどの様に街づくりの活かしたのですか？

(デザインを街づくりにどのように活かすか)

デザインをキーワードにすえるきっかけは、市制百周年記念事業の検討からでした。我が国における地方制度は、プロシヤの制度を模範として、明治21年に創設されました。市制は府県知事の具申により内務大臣の指定する地に、町村制は内務大臣の指揮により施行ということで、町村制は香川県を例外として明治22年に全国で施行されました。市制は人口25000人以上の市街地において施行されました。明治22年の内務省告示では全国で32市、次いで東京・岡山・甲府・岐阜・名古屋・鳥取・徳島・松山が追加され40市が指定されました。うち、高松が施行されず、結局、明治22年中には当時の東京市を含めて39市が誕生したのです。名古屋市は、明治22年10月1日に市制を施行ということで、当時の市域は面積13.5km²、人口約15万人でスタートしました。

従って、1989年10月1日に市制施行百周年を迎えるということで、その7年程前からすでに市内でどのような記念事業を実施するか、内々の検討が開始されていました。そういった検討の中から、「世界インダストリアルデザイン会議」誘致の話が持ち上がり、それならその会議を中核として、デザインをテーマにした博覧会を中心イベントとして開催し、併せてデザインをキーワードに街づくりを進めてはどうかということでデザインに取り組むこととなったのです。

それまでデザインというと、国の所管庁としては通産省（当時）であり、しかも、もともと輸出振興が目的でできた組織でもあり、「貿易局所管」ということで、どうしても産業振興策という色合いが濃かったですね。しかし、実際デザインは前述のごとく、もっと幅広く人間のすべての行為に関係するものであり、自分の欲求や夢を形に表す行為すべてを含むものですね。素材によって、衣服であればファッションデザイン、工業製品であればインダストリアルデザインに、都市であればアーバンデザインと様々です。

(デザインの二つの面～産業デザインと都市デザイン)

そこで、名古屋市は、都市戦略という観点から大まかに、デザインを二つの側面から取り上げました。ひとつは「産業振興の面」であり、今ひとつは「都市のデザイン（アーバンデザイン）という側面」です。

まず、産業振興の面からですが、これは基本的にはこれまでの考え方とそれほど相違はありません。しかし、特にこの地域にとっては意味合いが異なると思います。それはこれまで名古屋は、日本の生産基地として、我が国の経済発展をものづくりの面で支えてきた地域であるからです。愛知県は全国で製造品出荷額等が長きにわたり、連続第1位の地位を占め、付加価値額においても全国1位を続けています。名古屋港も自動車・工作機械を中心とした輸送用機器を中心に世界でも有数の貿易港ですね。しかし、価格競争では高価格構造の我が国は人件費の安いアジア諸国に対抗することはできなくなってきています。従って、非価格競争で勝負せざるを得ないのですが、エレクトロニクスの分野では、全国シェア10%そこそくと極めて弱いこの地域としては、デザインで付加価値をつけるということがひとつの産業政策として考えられるわけです。幸い歴史からみてもこの地域は決してデザインに縁がないわけではなく、自動車・陶磁器・アパレルどれをとってもこの地域の基幹産業はデザインを重要な部門として抱えているのです。

そこで、この地域のデザイン力を強化し、国際競争力をつけるために、各企業のデザイン振興を援助したり、各企業のデザイナー研修に力を貸すなどしてこの地域のデザイン力を総合的に高めることによって国際競争力を付け、地域の経済力を高めていくことが重要な鍵になると考えたのです。

トヨタ自動車などの大企業の場合は自前でデザイナーを雇うことができますが企業のほとんどを占める中小企業にとってはデザイナーを雇うだけの余裕のない企業も多いのが現状です。しかもデザイナーは大学でデザインを専攻したからといって、即戦力として企業で役に立つものではなく、一人前になるのに相当の歳月を必要とします。しかも、デザイン力は様々な異業種間の交流を通じて伸びるとも言われており、そういった中企・零細企業のニーズに応える必要があったのです。そのためのリカレント教育の場として国際デザインセンターを設置し、位置付けることができますと思います。

また、今後は企業の経営スタッフもデザインマインドを持つことが必要になります。これからのデザインは、クリストファー・ロレンツが指摘している様に単なるマーケティングや企業戦略の付随的部分ではなく、その核心とならなくてはなりません。(クリストファー・ロレンツ「デザインマインド・カンパニー」)

名古屋市は、官民の第3セクターで、そのための中核施設として国際デザインセンターを設立しました。当初は実は、国の認可による財団法人を考えていました。ところが東京と大阪に既に存在し、関西のサントリーの佐治さんの賛同が得られず、やむなく第3セクターの株式会社にせざるを得なかったようです。国際デザインセンターが当初の目論見どおり十分その機能を発揮しているかという点も疑問の点もないではありませんが、いずれにしても本市におけるデザイン戦略の中核施設でありますので、一層の活躍に期待したいですね。

今ひとつは、都市のデザイン（アーバンデザイン）という面です。アーバンデザインは我が国では1970年代に「都市景観行政」という名で全国の地方自治体に広がったものです。先鞭をつけたのは、京都・神戸といった町並みを保全する必要のある地区を持った都市ですが、横浜市のようにアーバンデザインチームという組織を作り、総合行政を実現する手段として取り組んだ例もみられます。

名古屋市でも取り組みは早い方で（これについては、前述しました）、現在では都市景観条例、都市景観

基本計画を柱として都市景観整備地区を具体的に指定して、整備を実施しています。その思想を一言で言えば、「ふれあいと調和」という基本的考え方のもとに都市景観を市民の共有財産として認識している」ということです。

私達は自分達が住んでいる環境から大きな影響を受けています。既に述べましたが、マルクス流に言えば「存在が意識を規定する」ということですが、逆に意識のあり様もまた存在のあり方を規定します。現在の我が国、特に大都市にみられる都市の無秩序は我々日本人の乱雑な心情をそのまま反映しているものと言えますね。

アーバンデザインを考える際の留意点を3点述べてみたいと思います。

(アーバンデザインを考える際の留意点)

① 機能と美

世界デザイン博以後、「名古屋の街がきれいになった」「名古屋の街が変わった」と言う声をよく耳にします。確かにその通りで名古屋の街は、その面目を一新し、大変美しい街になりました。しかし、それが十分かと言えば、まだまだ不満は大いにあります。まず、「街を化粧して美しくすることがデザインではない」という点です。(なにも、名古屋市が一生懸命に努力してきたことを単なる街の化粧と批判しているのではありません。)

デザインは「人の心を写す鏡」であると私は考えています。それは人々が営々と培ってきたその国の文化・伝統を表しています。民俗学者の柳宗悦(民芸運動、観賞を目的としない実用的な工芸の美しさ、つまり“用に即した美”に着目した運動の創始者、1889~1961年)は、デザインとは「用と美」と言っていますが、機能と美しさが見事に融合していなくては優れたデザインとは言えないという意味ですね。見た目の美しさを重視するあまり、機能をおろそかにすることは厳に慎まなくてはなりません。例えばイタリア車と日本車を比較してみるとイタリア車はデザインでは優れていますがメカニズムになると日本車にかないません。それに比べ日本車は、デザインはイタリア車に比べ陳腐ですがメカニズムは完璧ですね。これはイタリアの場合、作る人とデザイナーがそれぞれ別個に仕事をしているからで、それに対し日本では内部で十分調整を取りながら仕事を進めていっているからです。世界デザイン博でも指摘されましたが、トイレのピクトグラムが分かりにくく、どこがトイレなのか分からないとか、デザインを意識しすぎて必要な表示まで省略したため、十分機能しなかったとか機能をおろそかにすると、色々問題が生じます。

この様に美しさだけでなく機能も十分考慮し、そのバランスをとることが大切になります。もうひとつの観点は、機能といっても「誰にとっての機能性か」という点です。機能を考える場合、使い手の身体機能にあわせた機能を考慮しなければ意味がありません。これまで一般に追求されてきた機能は、どちらかといえば若者や男性といった強者にとっての機能が中心でした。

アメリカの工業デザイナー、パトリシア・ムーア女史は26才の時、3年間80代の老人に変装して街を歩いた経験を「変装」という本で紹介しています。(この本に基づいて高齢化対策事業基金を創設し、それで交通機関のバリアフリーを実現しました。後述で補足します)そこで彼女は、現代のデザインを適者生存の名にふさわしい「ダーウィンのデザイン」と名付け、デザインが強者中心であることを批判しています。例えば、公衆便所の汚さは、特に女性に生理的不快感を与えますし、都市装置も一般的に女性や高齢

者、あるいは障害者と言った人達に優しいものになっていません。4人に1人が高齢者という超高齢社会を迎えつつある今日、また、女性の社会進出も著しく、本格的な男女共同参画社会を前に、今後は「高齢者にとってよりよく機能するなら、それは誰にとってもよりよく機能する」という基本的考え方を踏まえたデザインを組み立てることが必要になりますね。少し機能性を強調し過ぎたきらいがありますが、逆に機能的であればいいと言うものでもありません。私は、この「機能(用)と美しさ(美)との関係こそが、デザインの本質」であると考えていますので、以下この点を少し詳細に述べてみたいと思います。(興味のない方はスキップしてください)

デザインは、おおまかに分類すると①工業デザイン(ID)②建築デザイン③グラフィックデザインの三つに分けることができます。

(ブルーノ・タウトに見る美の意味)

その中で、歴史的にみてやはり建築デザインがその中核になると思います。従って、建築における機能と美について考える中でデザインの本質について考えてみたいと思います。

ブルーノ・タウトは「建築芸術論」の中で、建築を一個の芸術とみても、「技術・構造・機能の三つの「釣合」が建築芸術の本質を決定する唯一の性格であると述べています。この三者の釣合がとれ、その調和が真に美しい時、はじめて建築が芸術になる、とタウトは考えました。そして、よく知られている様に、建築芸術の白眉として桂離宮をあげています。彼は、「日光東照宮を専制者の命令によって作られた極めて薄弱な建築物で、過度の装飾と浮華の美のみでおよそ建築を意味するものは何もない」と酷評する一方で、桂離宮こそは「およそ文化を有する世界に冠絶した唯一の奇蹟である」と絶賛しています。そして、桂離宮をすぐれて機能的であるが故に外観もまた優れていると述べているのです。

タウトの芸術論については、現在では様々な批判があります。例えば、桂離宮の簡素さを賞賛するタウトに対して、黒川紀章は「共生の思想」の中で「桂離宮がしたたかな装飾性をもつ」ことを指摘し、「日本建築の美意識を装飾的美意識と簡素・素朴な美意識との緊張感を持ったバランス」ととらえています。そして「^{はなすま}花数寄」という概念を提案し、「素朴と豊穡、沈黙と饒舌の共生、共存の美意識」こそが日本建築の美意識であるという見解を述べています。

タウト自身、桂離宮はその一部にキッチュの要素を含んだ総体とみているようですが、いずれにせよ、タウトの桂離宮評価の真髓は、桂離宮がヨーロッパの宮殿に見られる様な民衆から隔絶した権力の建物ではなく、市民的な建物であり、日本という風土に根差した建築であるとしている点であると私は考えています。

日本建築の美を構成する最も重要な要素のひとつは、「建築物が大地と直接結合している点」にあると思います。風土にあった建築物こそが永遠性を持ち、現代にも十分生きる建築物であると彼は考えていたと思いますね。タウトは言っています。「単に機能的であるだけでなく、その機能の優れた点が、おかれた風土に根差し、総合的にバランスのとれた優美さを持つことが大切である」と。そこには、和辻哲郎の風土論の影響をみることができると同時に、民芸運動の創始者である柳宗悦の影響も強く受けている様に私には思われます。

私の見解では、和辻が主張するように「人間は単に一般的過去を背負うのではなく、特殊な「風土過去」

を背負う」以上、風土性は時間軸である歴史性との合一において考えねばならず、それに更に多くの人々の営々たる汗の結晶というものが加わり、その国、その地方独特の建築物というものが現れる、と考えるのが妥当であると思います。そして、それは広い意味での「文化」と言い換えてもいいものです。従って、優れて芸術性の高い建築物とは、「その国、その地方の文化性を最も的確に形に表したもの」とも言えるのです。タウトは、その表し方として、桂離宮の場合は天才建築家小堀遠州の才能が桂離宮を生んだと考えています。(この点で現在では桂離宮が小堀の作というのは伝説とされているため、タウトの評価を下げているようですが)

柳宗悦の「用と美」

これに対し、「一人の天才の力ではない無名の人々の歴史的蓄積(縦の協力)である伝統こそが優れた芸術(工芸)を生んだ」と考えたのが柳宗悦でした。柳の思想の特徴は、レオナルド・ダヴィンチやミケランジェロの様な、一人の天才のみが優れた芸術を生むと考えるのではなく、名もない職人による、時間的蓄積である伝統の中からも、研ぎ澄まされた芸術が誕生し得ると考えるところにあります。彼はまず、文化を「生活文化」と考え、美の方向を生活レベルに引き寄せます。そして、日々の生活の中で私達が一番「身近に使用する道具にこそ美(生活美)が存在する」という姿勢を貫いたのです。

柳の発想は、特別なことに意味を見出そうとするのではなく、むしろ「平凡で一般的なものの中にこそ真理が宿る」とするもので、その意味では大悟している普通の人という意味での「^{みょうこうじん}妙好人」にこそ、彼の思想の原点を見出すことができると思います。

ウィリアム・ブレイクを熱心に研究した柳は、その影響を強く受け、「直感とはその真義において神を味う心である」とブレイクが言うように、知性ではなく直感こそが実在を把握するものであり、実在の直接的経験であると考えていました。この考えは禅宗の「不立文字」に近い考え方で、近代合理主義の祖、デカルトの二元論の「分別くささ」(分別とはあるものを二つに分けること)のいわば対極に位置する考えなのです。

デカルトの“疑いの概念”から出発した近代は、同時に分析・分化の時代でもありました。芸術家が誕生したのはルネッサンス以降で、それ以前は、芸術家は職人の中に包含され、独立した概念ではありませんでした。絵画・彫刻は、教会などの建築物の一部にすぎず、建築こそが唯一の総合芸術でした。しかし、近代の出発とともに専門分化がおり、絵画・彫刻はそれぞれ独自のジャンルとして独立していきました。柳が、「赤子の無心には無量の知恵がある」という時、分別くさい理屈を超えて、直感的に物事の総体としてとらえることができる本質をそこに見ていますね。それは、同時に、仏教の他力の道である「自力→天才道→美術」に対して、「他力→庶民道→工芸」という考え方を提示しているのです。

これまで、天才の陰に隠れ、長い間下手物(げてももの)と呼ばれ、さげすまれてきた「民衆の雑器」に光りを当て、民衆の芸術(民芸)として世に出した柳の功績は、極めて大きいと思います

特に、今日的に高く評価できる点は、時代が大きく変わり、「生活者の視点」こそが最も大切なコンセプトになりつつある中で、一貫して、生活の中から発想し、生活の美しさ、尊さを評価すると同時に「地方の豊かさ」をも評価したことです。柳の思想は、現代においてこそ再評価される価値がある思想だと思いますね。また、柳は機械文明の中で見失われつつある「手仕事」の重要性に光を当て、「手こそ最も神秘的な

機械」(柳宗悦「手仕事の日本」)と呼び、手の役割を強調しています。

柳は言っています。「機械生産は喜びと責任をもちえない」と、そして同時に機械生産は大量生産を可能にするが故に、画一的であり普遍的であると。従って、地方性を持たない故に文化を持たない。柳の考える文化とは、生活文化でなければならないのです。「工芸は生活から遊離したことから誤謬が始まった。工芸は工芸の本性に立つことによってのみ正しい工芸となるのであって、美術性が工芸を高揚せしめるのではない」と柳は述べています。工芸の本性とは、用であると柳は説いています。従って、工芸的なものの美は「用」を離れては、ありえないのです。

柳は工芸文化の中で次の様に述べています。少し長いのですが、核心部分ですので引用しておきます。「もしも用という字がつかずきやすいなら生活という字に変えたらいい。生活に交って現れる美、それを工芸美と呼んでいい。生活を豊かにするもの、温めるもの、潤すもの、健やかにするもの、そこに工芸の美が宿る。かかるものは生活を離れた美よりもっと深い意義がありはしないか。工芸は生活工芸なのである。その美は生活に即することからくるのである。ここにかえて工芸美の強靱な基礎がみえる」この様に述べ、生活に根ざしたものが最も強靱であると主張しているのです。

柳の視点は常に「生活への回帰であり生活の場への回帰」です。そして、それは同時に地方への回帰でもあります。と同時に、天才という一個人の力に依存した芸術美と異なり、数多くの無名の職人の伝統という時代の力に支えられた結晶としての美が工芸美なのであるという思想です。「伝統こそは秩序であり、組織であり、依るべき法則であり、無数の名もなき職人の汗の結晶なのである」ということなのです。

(ウィリアム・モリスとレッサール・アート)

同様の運動はヨーロッパにおいてもみられました。デカルトに始まる近代合理主義の精神をベースにイギリスに端を発した産業革命による工業化の嵐は全世界に浸透し、機械による画一的な大量生産時代の到来は、人々の生活を潤いのない無機質なものに変えていきました。そうした工業化社会に対する反動として19世紀末にはアール・ヌーボーやレッサール・アートといった装飾の復活とも言える運動が起こってきました。アール・ヌーボーは貴族的趣味を持ち、かなり手が込んでいたため、大量生産には向かず、広く大衆化されることなく、すたっていきしましたが、我が国の民芸運動と似かよっていたのはモリスを中心とした1880年代の「アーツ・アンド・クラフト運動によるレッサール・アート」でした。

芥川龍之助が卒論で取り上げたウィリアム・モリスはジョン・ラスキンの影響を受け、歴史を権力者の歴史としてとらえるのではなく、多くの民衆がものを作り出していく歴史としてとらえ直しました。それは、柳が歴史を天才の歴史ではなく名もなき多くの職人が物を作り出していく歴史ととらえたのと規を一にしています。しかし、柳が機械に対して手仕事に重きをおくのに対して、小野二郎氏はモリスの哲学のエッセンスは、「手か機械かよりもただ一人の職人によって統合されているかどうかにある」と述べ、労働の分業こそがモリスにとっての真の敵であるとしています。

一方、モリスは、「反復は技術を完了の域に誘う」と述べ、反復の重要性を指摘したり、生活の質の向上に力点をおき、日常生活の身の回りの物を美しくするレッサール・アート運動を展開するなど柳との共通点が多くあります。ただモリスはレッサール・アートにも純粹芸術と同等の位置を与えてはいますが、芸術の中心は、あくまで建築であると考えていました。

(バウハウスとインターナショナルスタイル)

モリスの思想はグロピウスによってバウハウスに引き継がれます。中世時代に教会などを建築する際、建築現場に小屋（ヒュッテ）を建て、そこにまだ専門分化する以前の様々な職人が労働共同体として生活したバウヒュッテという言葉に由来するバウハウスは、専門分化した各種造形を、建築を主体に、その翼の下に再統合化しようとする意図で設立されたものです。1919年にドイツでワイマール共和国が成立した際、その国立工芸デザイン学校として開校されました。それは、学校というよりは労働共同体であり、教師と学生というより、親方、職人、徒弟といった関係に近いものであったのです。

ヒットラーによって閉校されますが、その思想はアメリカに渡り、モホリ・ナギによるシカゴのニュー・バウハウスの設立、シカゴデザイン学校などを経て、1949年イリノイ工科大学に併合、MITのメディア・ラボ、イリノイ工科大学の二つの大学により受け継がれ今日にいたっています。バウハウスはあくまで大量生産を前提とした機械工業生産を是として「芸術と技術の統一」を目指しており、初期にはモリスの影響を受け、手工業への回帰をうたっていましたが、基本的には装飾を否定しつつ、機能中心の製品開発を進めていきました。初期のバウハウスはともかく、デッサウ時代にはすでに幾何学を中心とした機能主義的傾向が強く、この流れがインターナショナルスタイルとして全世界に広がっていくこととなります。その意味ではバウハウスこそモダニズムの代表であったと言っても過言ではありません。

さて以上、かなりスペースをさいて「建築における美」について述べてきましたが、最後に少し総括をしておきたいと思います。

(建築における美の「総括」)

ここでは、ブルーノ・タウトにおける建築の美について論じ、タウトに影響を与えて柳宗悦の「用」と「美」についてみてきました。多くの建築家が美について論じている中で、なぜタウトをあえて取り上げかと言いますと、それは単に柳と親交があったからということにすぎません。むしろ焦点は柳にあり、柳こそデザインの本質を考察する際、不可欠の人物と私が考えている人物であるからです。なぜなら、すでに述べたように柳の思想の原点である「生活・地域」こそが今日の私達が都市政策を考える際、最も求められている視点であるからなのです。

タウトにおける技術・構造・機能の「釣合」は柳の「用」と「美」とのバランスであります。柳と同様、生活に視点をおいた芸術運動としてヨーロッパにおけるモリスのレッサールアート、そしてその影響を受けたグロピウスのバウハウスとみてきましたが、それら議論の中で重要なキーワードは、「釣合・バランス・調和、それに風土・歴史、そして生活・地域、最後に総合性」ということとなります。

それらのキーワードはいずれもデザインを考える際のキーワードです。

私達がデザインを考える際、忘れてはならないのは、「誰のためのデザインか」という点であり、同時に「機能と美との見事な調和」であります。デザインは、それぞれの風土に根差し、地域の特性に合ったものでなくてはなりません。言い換えれば、まさに文化性を持ったものでなくてはならないのです。

市内においても例えば、都市部で適用されるデザインを住宅地で使うことは避けねばなりません。また、「部分と全体との調和のとれたトータルなデザイン」である必要があり、まさに統合化されたデザインでなくてはならないのです。

「市民が起点と言う視点」こそがモリス、柳に共通する視点でした。そして、ブルーノ・タウトは直観的にそれを理解し得た人物でした。

バウハウスはモリスの影響を受け、レッサー・アートにも建築同様の価値を見出しつつ、建築の翼の下に統合化を図ろうとする意図でしたが、結果的には工業化という時代の大きな流れの中で機械化による大量生活を許容し、画一的インターナショナルスタイルを作り出していくことになりました。インターナショナルスタイルは、工業化社会において、一定のシビルミニマムを達成するのに大きな役割を果たしましたが、シビルミニマムが達成され、量の時代から生活の質が求められつつある時代においては、生活・地域を起点とした文化性豊かなデザインのあり様が検討されねばならないと思いますね。

① 個と全体

- ① では機能と美との調和の問題を取り上げましたが、ここでは個と全体との関係について述べてみたいと思います。アーバンデザインで重要なのは、全体としての調和です。いくら個々のデザインが優れていても全体として調和がとれていなければアーバンデザインとしては失格です。問題はどの様にして調和をとるのかです。パリの都市計画の様にプランナーの強い意思が明確に街づくりの中に投影され、強い権限をもって強引に作られた街は確かに統一美というものを持っており美しいと思います。しかし、ヨーロッパの街と異なり、モザイク的にできてきた日本の都市の場合には、強権を行使して統一美を実現することは、日本の風土に馴染まないと思います。むしろ、そうすべきではないという意見の方が強いように思われます。

名古屋市においても、アーバンデザインのマスタープランである都市景観基本計画において、そういった基本的な考え方を採用しています。即ち、名古屋という街の統一的な都市イメージを最初に想定し、それを実現するためにどうしたらいいかを考えるのではなく、市内の各地域ごとの個性・特色・伝統といったものを考慮しつつ景観面からみて、ひとつの自立した地域としてまとめることのできる地域を「景観自立地区」として拾い出し、それをベースにして、全体のイメージを考えていこうという発想にたっています。

それは、これまでの全体像から個別地区へという演繹的なアプローチではなく、逆に個から全体へアプローチする帰納的な方法を採用した点で画期的な基本計画だと言えらると思います。美しいデザインと言っても名古屋市全体でこれが美しいということはありません。それぞれの地域の持つ特色を十分考慮しつつ、個々のデザインをそれが置かれた周囲のデザインとの関係において考えていかなくてはなりません。行政と市民が十分話し合い、作り出していく、いわば「行政と市民との共同作業の結果」として真に素晴らしいデザインを持つ都市が誕生するのです。

② デザインマインドの育成

デザインが我が国に始めて紹介された時、ファッションデザインとして入ってきたせいも、どうしても我が国でデザインと言うとファッションを想起する人が多いのも事実です。名古屋市でもデザインをテーマにした博覧会を開催するという事を公表した際、ずいぶん各方面から「一体何をやるのだ」とか「抽象的で博覧会になじまない」あるいは「グサイ名古屋には合わないテーマだ」といった意見が寄せられました。確かにデザインというものは分かりやすいものではないし、善し悪しが主観的でもあります。そういったデザインというものをどの様に市民に理解して

もらうのか。答えは、「市民に見せる」ということです。人間は食欲で、その欲望は果てしがありません。「すばらしい音楽を聴けば耳が肥え、いい絵を観れば目が肥え、美味しいものを食べれば舌が肥える」と言います。「人間の感性は優れたものとの接触を通して向上していく」ものなのです。舗道が美しくなれば、それに面して建つ民間の建物も舗道に合わせて綺麗にしようという動きが自然に出てきます。周りにちりひとつ落ちていない場所では人間は物を捨てにくいもので、逆に、ごみが散乱していれば安心してごみを捨てようという心理になります。しかも市制施行百周年の記念のイベントということで市役所が中心となり市民全体で祝おうということで職員、市民の間にデザインに対する関心が高まっていました。言い換えれば人々の間に「デザインマインド」が高まったということですね。

特に名古屋人は現実的で実利的とも言われている様に、実際に実施してみていると一気に盛り上がる土地柄です。デザインというものは感性の領域に属することがらで、「百の言葉より現実に見せること」が最も有効な分野です。実際出来てみて、見ることによっていいとなれば評価が高まるし、理解も深まります。そういったものが街中に溢れ、街が徐々に変わっていくことが実感できると、市民の間にデザインに対する認識が深まります。そして、市民のデザインに対する理解はさらに進み、今度はより優れたものを求め、要求することになります。それは「市民のデザインマインドが向上したしるし」で、今度はさらに優れたデザインを供給していこうとします。つまり、「いいデザインと触れ合うことによって、目が肥えた」のです。そういったサイクルを通じて市民のデザインマインドが向上し、街が真のデザイン都市に変化していくのです。これがデザインを使った都市戦略なのです。

(デザイン戦略の理念は実現できたか)

以上、アーバンデザインについての留意点を3点長々と述べてきましたが、では実際、名古屋市の場合、デザイン博を通じてその様な理念がどこまで実現できたのでしょうか。デザイン博覧会そのものの効果については色々指摘できますが、ここではデザインに注目してお話ししましょう。

最大の効果は、「市民の間でデザインという言葉が市民権を得た」ということだと思っています。つまり、デザインがこの地域では日常語として認知され、日常会話の中でごく普通に違和感なく使われるようになったということです。そして実際に「街が変わり、美しくなった」という事実です。デザイン博後、名古屋市はこの地域のデザインの中核施設として、(株)国際デザインセンターを県・市・民間の出資で設立し、デザイン振興に力を入れるとともに、都市景観整備地区を指定し、アーバンデザインの整備に努力をしてきました。一定の効果はありましたが、十分とは言えないでしょう。デザインについて重要な視点を少し整理する中で名古屋市のアーバンデザイン行政の課題についてふれてみたいと思います。

名古屋市のアーバンデザインの基本的考え方は「ふれあいと調和」というコンセプトに端的に表れています。ふれあいとは、簡単に言えばすでに指摘しました様に、いいものを見せていく、そのことによって目が肥え、デザインマインドが高まる。そういった優れたものとの触れ合う機会をより多く作っていくということです。また、調和とは何度も繰り返していますように、機能と美、個と全体との調和を意味しています。そういったコンセプトからみるとアーバンデザイン施策としてまずやらねばならないのは、

- ①市が供給する公共施設のデザイン性を向上させるとともに、民間にも指導を行うこと。
- ②単体としてのデザイン向上とともに周囲の空間とのトータルデザインが形成されていること。
- ③デザインは「人の心を写す鏡」。自らの心のあり方をデザインすること。デザイン教育は心の修行、その様な観点からの教育を行うこと。
- ④地域の特性を十分ふまえ、地域にあったデザインとすること。全市画一的デザインはありえない。

以上4点を指摘しておきますが、特に「デザインの地域性とトータルデザインの必要性」については痛感します。例えば、久屋公園あたりをあるいても無機質な近代デザインの統合柱やバスストップ（これは、単体では交通局のBストップの導入により、随分良くなりました。もっと増やしてもらいたいですね）が目につく一方、すぐ隣には有機的な黄瀬戸風のごみ箱が置いてあったり、コンテンポラリーの彫刻が設置されていると思えば具象彫刻があったり、とにかく、空間全体として、どの様なコンセプトでデザインされているのか理解に苦しむ状況がみられます。以上で、デザイン都市戦略については終わります。

●デザインについてかなり詳細にお聞かせいただきましたが、西尾市長は街づくりにも力を入れて見えますが、その辺りのことをお聞かせください。

（西尾市長のお気に入り「金山総合駅」）

ちょっと思い起こしていただければわかるように、名古屋の施設でこれはというものは、ほとんどこの時に作られています。例えばナディア・パーク、オアシス21、それからNHKの移転（新社屋建設）、能楽堂、国際展示場、国際会議場、東山スカイタワー、演劇練習館、桜通線の開通、金山総合駅などほとんど全部ですね。

西尾市長に一番印象に残っている事業はなんですかとお伺いしたことがありました。答えは「金山総合駅」でした。金山総合駅というのは、30年以上前から構想があったのですが遅々として進まなかったのです。長年の懸案事項でした。なぜ進まなかったかと言うと、JR、名鉄、地下鉄この3社の調整がつかなかったのですね。いつまでたってもできない。市民からするとそれぞれが近いのに雨の日なんかは乗り換えるのに濡れてしまう。不便極まりなかったのです。市制百周年がいい機会でした。世界デザイン博覧会という一大イベントを行い名古屋に世界中から多くの人に来ていただくのに交通の結節点である金山駅がバラバラでは恥ずかしいのでは、ということで調整が進み現在の総合駅化が実現しました。そういったインフラ整備は、本当によくやりましたね。ただ誤解があるといけません、インフラに力を入れましたが決して福祉などを怠ったということではありません。ただ、来るべき超高齢化社会を考えると単なる「ばらまき」は財政の硬直化を招き、将来禍根を残す懸念があります。従ってかなり慎重でした。よく言ってみたのが「ただはよくない」ということで100円でもいいからとったほうがいいと言っていましたね。

（歩いて楽しい街づくり～ナディア・パークとオアシス21）

もうひとつ私が印象深い事業は、ナディア・パークですね。（図8）現在ナディア・パークのある栄三丁目付近は、かつては定時制高校があり、都心でありながら、暗くて、人気のない、寂しい場所でした。そこで、都心を歩いて楽しい街にするために、賑わいをもたらす商業施設に変えた事業です。「歩いて楽しい街」にするには、日本庭園と同じで、回遊性を持たせることが必要です。そのためには「魅力スポットの

図8

● **ナディアパーク**
人の流れをどうつくるか（「歩いて楽しい街」にするには、日本庭園と同じ、**回遊性**を持たせる）
←そのためには「**魅力スポットの分散配置と連携**」が必要
人が出れば店が出る⇒店が出れば人が出る

人が人を呼ぶ



● **ナディアパーク**
中心部のひと気のまま
らな場所をナディア
パークを造ることで、
活性化し、**その効果を
周辺に及ぼした。**



ナディアパーク
(平成8年オープン)



現在の栄周辺
(平成元年以降にオープンした大規模商業施設等)

セントラルパーク アネックス (H.5リニューアル)
NHK名古屋放送センタービル (H.13)
オアシス21 (H.14)
栄パークサイドプレイス (H.15)
サンシャイン栄 (H.17)
ラシック (H.17)
松坂屋南館 (H.3)
バルコ南館 (H.10)
ランの館 (H.10)

分散配置と連携」が必要になります。「人が出れば店が出る、店が出れば人が出る」この循環を作り出すことが大切です。行政がすることは、「全体のランドデザインの構想」です。そして、ポイントごとに魅力施設を誘導立地させます。そうすれば、人の流れが自然にできます。行政は、歩道の整備やストリート・ファニーチャーなどの修景をすればいいのです。例えば、久屋大通りに東急ハンズが出店しました。そこでナディ・パークにロフトを誘致します。そうすると両方を比較して見たいと言う人達が歩きます。この流れができれば、地上を歩く人も増えますから、歩道に商店が立地します。人の流れができれば、商売になりますからね。

ナディア・パークは、教育委員会所管の行政財産を普通財産に変更し、土地信託の手法で公共棟と商業棟の2棟とし、それをアトリウムでつないでいます。当時、アトリウムが全国的にもブームで是非名古屋にもということでアトリウムにしています。公共棟には、世界デザイン博覧会の遺産として「**国際デザインセンター**」が設置されました。また、かつては、暗くて夕方になる誰も寄り付かなかった、矢場公園と

図9



連携しました。今では、イベントもしばしば開催されています。また、オアシス21も全体の関連で、イベントのできる空間にしています。実は、名古屋まつりの3日間（宵祭りを含め）で久屋大通り公園には、約100万人の人出があります。人口200万人を超える世界の大都市でその都心に100万人が集える都市はそうはありません。名古屋は都心と言う「ハレの場」に特異な空間を持った都市と言えるでしょう。ヨーロッパの都市には中心に広場があり、人々が自由に集うことができます。それこそ空間的にみた「市民の都市」を造形化したものですね。都市の一番大切な空間は、一部の民間人が占拠するのではなく、市民に広く開放されなければいけません。名古屋は先人の努力の結果、都心に久屋大通公園と言う公共広場を持っています。この広場をもっと、面白く、市民が集える空間にしていくことが重要です。オアシス21（図9）やナディア・パークはその一翼を担っていると言えると思います。一方、地下街では日本一と言われる「地下都市」でもあり、地上との連携が常に課題とされてきました。サンクン・ガーデンという形で、「地上と地下の連携」が図られれば、地下にも光が入り、明るく開放感が出ます。そこで、オアシス21は、地上から光が入り、同時に都心で常時イベントが開催できる空間として設置されました。

（インフラだけでなく福祉、文化にも力を）

一方、将来必ず必要になる施策については積極的でした。例えば交通機関のバリアフリーは必ず必要になるとの考えから、当時はまだ財政調整基金（いわゆる市の貯金）にゆとりがありましたから、そこから財源を調達して「高齢化対策事業基金」を設け、順次地下鉄のエスカレーター、エレベーターを設置していきました。この考え方は「高齢者にやさしい都市は誰にでも優しい」というものでした。（デザインの項参照）

そのほか文化やアメニティにも力を入れましたね。当時の文化行政は伝統的なプロシャ、ドイツ型の芸術文化論に基づき、どこでも教育委員会が所管していました。（ただ東京都のみは知事部局でした）ところが能楽堂の所管は候補地が名古屋城の敷地でしたから観光を所管する現市民経済局、ボストン美術館は金

山南ビルに開設が予定されていたので現住宅都市局、演劇練習館（アクテノン）は稲葉地公園の中にあつたので現緑政土木局とすべて文化なのに所管はばらばらで市民からは分かりにくいと言うご意見も頂いていました。そこで総務局に「文化懇談会」という懇談会を設け、当時の三浦朱門文化庁長官（西尾市長の高知高校の同級生）を座長に懇談会を設置しました。その考え方は、文化をもっと幅広くとらえ、狭い芸術文化から生活文化に代えていこうとするものでした。戦後アメリカから入ってきた文化人類学の系統ですね。そう考えれば産業も「文化産業」、緑も文化、といったように幅広くとらえることができます。その結果、文化担当の組織を教育委員会から、現市民経済局に移しました。

●なるほど。当時は「文化の時代」とも言われていましたね。先生は文化をどの様に捉えて見えますかお聞かせください。

（文化の捉え方）

経済がある程度満足いく段階になると文化が浮上してきます。いわゆる「モノの豊かさから心の豊かさ」への国民、市民の選好の変化ですね。しかし、文化に公共がどこまで介入するかは慎重に考えなければなりません。市長の考えは「文化の主体はあくまで市民、行政はその環境や条件の整備に徹すべき」というものでした。

少し、文化をどう理解していたか、お話ししましょう。

（文化と文明の違い）

まず、文化と文明の違いを理解する必要があります。文化（Culture）とは、耕す（Cultivate）が語源です。つまり、土地（地域性）と密接不可分な関係にあるものです。従って、特殊性、地域性を特色にしています。一方、文明（Civilization）とは、既に述べたように、市民化（都市化）を意味します。よって普遍性をもつものですね。私は、いつもこの問題を考える時、植物と動物の違いを思い出します。植物は自分では移動できません。その場で一所懸命生きるしかすべはありません。動物は移動性ですね。まとめると、次のようになります。

文化→地域性・特殊性・ナショナリズム（例）襖

文明→普遍性・一般性・グローバリズム（例）信号

文化とは、その土地に根ざし風土とともにその土地の人々によって歴史的に育まれたものを言います。（土地柄・市民気質）ちなみに、文化の定義は、161あるということです。（フィリップ・バグビー「文化と歴史」）

（狭い文化と広い文化）

行政ベースで文化を考える場合、二つの意味で文化を把握することができます。ひとつは、狭い意味での文化です。これは、いわゆる「芸術・文化」を言います。この考えは、歴史的にはプロシャから明治時代に移入されたもので、ドイツ観念論哲学の影響を受け、日本に伝わった際には文部科学省が所管し、従って文科省の支配下にある自治体の教育委員会に伝わりました。これがほとんどの自治体で、文化行政といえば、教育委員会が所管している理由です。従って、教育委員会の文化行政は対象範囲が狭いのです。一

方、広い意味での文化は、いわゆる「生活文化」と言われるもので、戦後アメリカの文化人類学の流れをくむものです。何が問題になるかと言うと、一番わかり易い例が東京都の「江戸東京博物館」です。この博物館構想が持ち上がり関係者で議論した時に、これまでの教育委員会所管の博物館ですと、「博物館法」と言う法律の適用を受けます。色々な制約が厳しいのですね。例えば東京の歴史を展示しようとする、いわゆる「通史」にしなければいけませんから、どの時代も同じウエイトの展示になります。ところが「江戸東京博物館」は名前の通り、江戸時代から明治にかけての時代にスポットをあてた博物館を目指していました。確かに、東京都いえば、将軍家のおひざ元で、その後日本の首都ですから、江戸、東京こそが多くの人々の興味の対象ですね。名古屋市の博物館と比較して見るとよく理解できます。名古屋と言えはやはり城下町ですから、「清州越し」からの歴史にスポットが当たってもいいですね。ところが行ってみると、古代も、中世も、江戸も同じウエイトです。そこで、東京都は所管を教育委員会ではなく知事部局に変えました。もちろん博物館法の適用を受けないものです。従って、その展示は江戸、明治の東京に力点を置いた興味深い博物館になっています。

良く考えてみると、教育というのは、取り入れる方ですから「charge」ですね。一方文化は蕩尽するものですから「discharge」です。全く逆です。それを教育委員会が所管するのはおかしいのではということですね。これが「文化ディスチャージ論」と言うものです。文化は、「心の満足、心の足し、心に潤いをあたえるもの」ですね。一言でいえば“遊び”“感性力の強化”と言ってもいいでしょう。

文化の創造は民の役割で「官は必要な文化施設を整備するのに留める」のが基本的に望ましい政策です。西尾市長の考えもそうで、地域の文化活動を支援するのが市の役割と言う認識で、環境整備として演劇練習館や文化小劇場を整備しました。一方、オペラができる様な大型の文化施設である「愛知県芸術文化センター」は広域的文化施設と言うことで、愛知県が担うものという明確な「棲み分け」を西尾市長は考えていました。残念なのは、当初考えていた文化小劇場が出来上がってみると構想をはるかに超えて豪華になったことです。最初の1館目が豪華だと、地域のバランス論が働き、以下同文になります。結果、どれも想定以上に立派な施設になってしまいました。

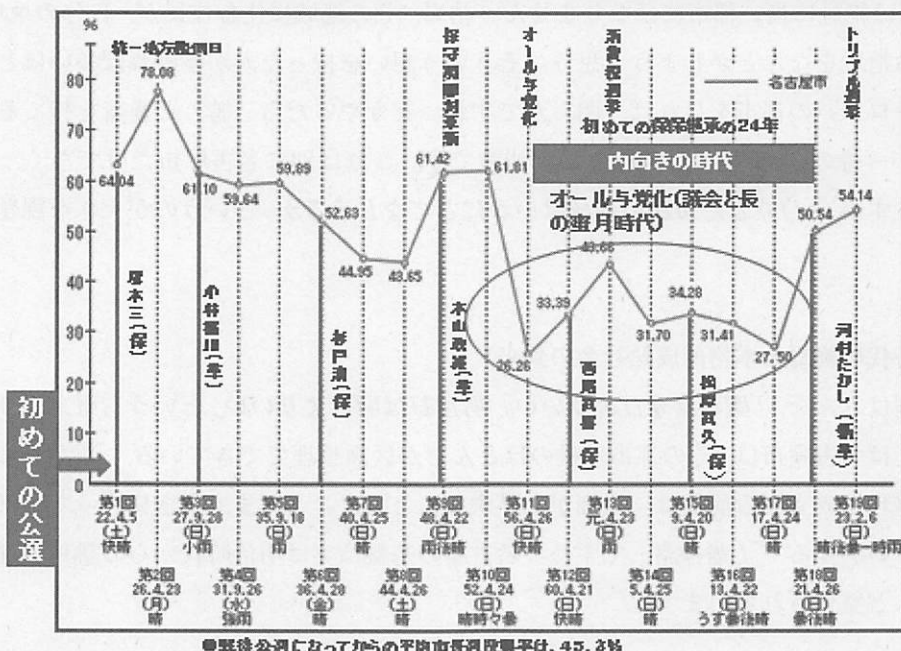
西尾市政の後半あたりから財政状況が厳しくなってきました。西尾市長の3期目は私も企画課長として基本計画を推進するための「推進計画」の策定にあたっていました。一番頭が痛かったのは「財政フレーム」が取れなくなっていたことです。人件費と、扶助費（社会保障など）が増加し、一方税収は伸び悩み、新規投資に充てる財源が確保できなくなってきたのです。今後の人口構成を考えるとこれまでの「右肩上がりの発想」を転換しない限り計画はできないと思いました。これは従来の計画論からの転換ですね。

（西尾市長の退任と松原市政の誕生）

次に、松原市長が誕生しました。この意味は戦後の流れからすると実は画期的だったのです。図10を見ていただくとわかりますが、名古屋市政は戦後保守と革新がだいたい3期12年で交代しています。つまり12年で政策が大きく変わるのです。象徴的なのが高速道路です。上になったり下になったり。インフラ整備のように懐妊期間の長いプロジェクトはこれでは困ります。従って、西尾市長の後継は、どうしても保守でなくてははいけなかったのです。結果、「戦後初めて保守政権が24年続く」ことになりました。

図 10

地方政治に対する市民の意識～(例)名古屋市長選投票率の推移



だいたいどの市長さんも自分が就任すると自分は名古屋を将来このようにしたいという自分の街づくりに関する哲学・理念を長期総合計画という形で公表することを考えます。

私はその時企画部長として松原市政の長期総合計画を策定するよう言われました。それが2010年までを計画期間とした「新世紀計画2010」です。一番困ったのが、フレームがなかなかとれなかったことです。計画を策定する場合にまず計画のフレームというものをとります。それには二つあります。「人口フレームと経済フレーム」です。将来の経済成長率をどれくらい見込んで、人口予測をどれくらいに想定するかという問題です。人口は経済に比べるとまだ予測しやすいのですが、それでも我々がまずベースに置く、一番おおもとの厚生省の人口問題研究所の推計値（上位、中位、下位の3種類）がこれまで全部外れていましたから、予測は難しかったですね。通常予測はある程度強気で出すのが常道です。実際、正直に出したら、議会で上方修正されたこともありました。これまで過去2回の計画では社会動態のトレンドが上昇傾向にあったため、この先も上がると予測して結果は反転しませんでした。そこで今回は、上昇傾向にあっても、同じように反転すると予測しました。少子高齢社会の到来を考えると人口の伸びはこれまで以上には期待できないということが背景にありました。名古屋市の人口は自然動態で見れば早晩マイナスになり、社会動態は220万人くらいで反転して下がるかと予測しました。自然動態はあたりでしたが、社会動態は予想に反してそのまま伸び、結果は226万人という過去最高の人口になりました。見事にはずれました。

ただこの計画で一番重要なのは時代認識でした。「右肩上がりの時代の終焉と本格的成熟社会の到来」を迎えその中で名古屋市はどうしていくかということです。計画のキャッチに「誇りと愛着のもてる街、名古屋」と付けてあります。これは後ほど詳しくお話しますが、私は今でも十分通用するコンセプトだと

思っています。つまり、都市というのはどういう場合に一番輝くかという問題意識ですね。それは、「そこに住む人が自分の地域に誇りと愛着を持っている」ということなのです。権力者が上から「こうやるぞ」といっても、都市は絶対に良い都市にはなりません。結局、その地域に住む住民が、自分の地域を知って、好きになり、この地域をなんとかしようと思う。そういう想いを持った人が多ければ多いほど都市は輝きます。それはヨーロッパの都市を見れば、明らかですね。どうやったら「誇りと愛着を持てる市民」ができるのか。これが一番の21世紀の課題だという認識です。これは別に名古屋市だけでなく、日本全体でもそうだと思いますが、「自立した市民の形成はいかにしてなするか」というのが大きな課題だと考えています。

(右肩上がりの時代の終焉と本格的成熟社会の到来)

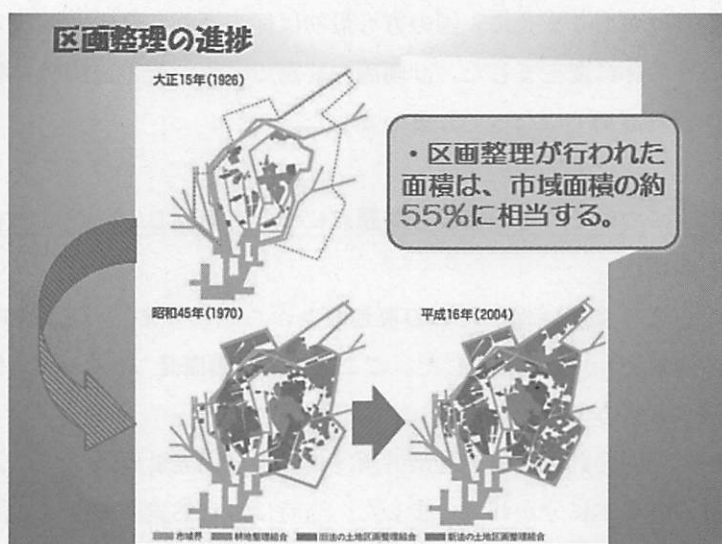
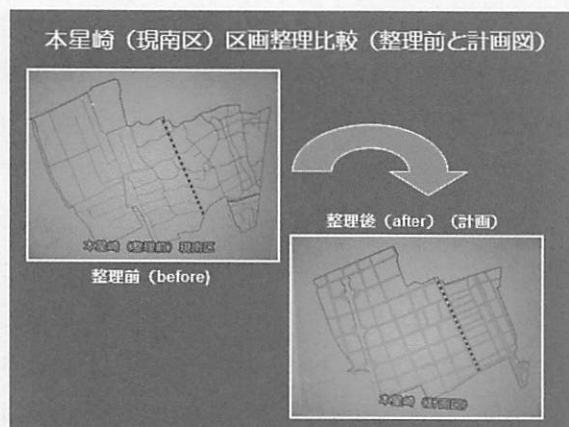
これまでの計画はみんな、「明日は今日よりいい。明後日は明日よりいい」という右肩上がりを前提にしています。例えば名古屋市は、その都市基盤のほとんどが区画整理でできている、「世界一の区画整理都市」です。区画整理が成立する前提は、地価が上昇することです。これまで長きに渡って地価はずっと上昇してきました。いわゆる「土地神話」ですね。名古屋の基盤は実は明治時代からの耕地整理にはじまる区画整理でほとんど整備されています。

もともと区画整理は19世紀にドイツのフランクフルトのアジケス市長が導入した手法です。彼は、あるプロジェクトを行うために土地を買収しようとしたのですが地価が高騰して不可能になりました。そこで測量局長のグスタフ・リューベという人が考えた手法が「土地の権利を変遷する手法」です。(図11)

その場合に土地の所有者は土地の一部を「減歩」といって公共側に供出します。公共はその供出された土地で公園、道路、学校といった公共施設を整備します。問題は土地の面積が減少するわけですから当然所有者は納得しません。それを納得させる唯一のポイントが地価の上昇です。つまり従前のままでは道路も狭く消防車も入れない。公共施設もなく利便性も低い。従って、地価も安い。それを区画整理によって利便性が格段に良くなることにより地価が上がり所有者の総資産は減少しないどころか増加するというのがこの手法です。つまり地価の上昇がすべてなのです。区画整理手法を、最初に大々的に都市部に適用したのは、関東大震災後の帝都復興計画においてです。復興予算を削減され、窮した内務大臣後藤新平が区画整理を東京に導入しました。帝都復興事業の結果、震災の焼失地域の約90%に相当する3119haの区域で区画整理が実行されました。これは、世界でも類例のない大規模な既成市街地の改造でした。世界で初めて既成市街地に大々的に区画整理を導入したのは後藤新平が最初だと思います。東京の都心、下町の道路は、この時つくられたものです。この時に、近代街路の設計思想が日本で確立し、歩車道の分離、街路樹の植栽、本格的な舗装などが実現しました。それ以降、都市の道路には街路樹と歩道があり、舗装されているのが当たり前になったのです。

大阪では関一市長がこの手法を積極的に活用しました。もちろん名古屋も石川栄耀氏が中心になってこの手法で都市基盤を整備してきました。戦後の復興にいち早くこの手法をしかも大規模に導入したのが名古屋市の田淵寿郎氏でした。長きに渡り「土地神話が区画整理を街づくりのバイブル」にしてきたのです。

図 11



ところが土地神話が崩壊し、地価が下落し続けると途端に行き詰まりました。区画整理というのは地価が上がることを前提にした手法ですから、下がることを法律も前提にしていません。前述したように、もともと、地価が上昇して買収方式では不可能と言うことでそれに代わる手法として登場したものです。地価の上昇、それも実現していないうちから「将来必ず資産価値は上がる」前提で組み立てられています。帝都復興の際も、憲法の番人と言われた伊藤巳代治氏などは「財産権の侵害に当たり、憲法違反」と主張し反対していました。

(計画論の破綻)

もうひとつは高齢化の問題。日本の高齢化のスピードは世界一です。急速に高齢化率が高くなっていきます。そうするといわゆる社会保障費が増える。役人は扶助費と言っていますが、要するに社会保障関係で、法律で決まっています、出さざるを得ない費用というものがあるのです。これがどんどん右肩上がりに上昇して行く。財源はというと、経済成長率が低くなっていますから、当然、税収も落ちますね。賄えるわけがありません。という状況の中で、計画をどうするかということが非常に大きな問題になります。これは国のほうも同じで、国土開発のおおもとの全国総合開発計画というのがあります。これがちょうど第5次の改定(第5次全国総合開発計画)の時に、やはり今までの計画論はできないのではという議論を東大の伊藤滋先生なんかしていました。今までの国の国土計画論はと言うと、最初の全国総合開発計画から始まって、新全総、3全総、4全総と4回策定(第5回は計画ではなくランドデザイン)されたのですが、基本的には各地域の意見を聴いてそれをまとめるという形式をとっています。各地域では知事が中心に地域の主要なプロジェクトを全部掲載するように働きかけます。もちろん知事も全部が実現するなどとは考えていないのですが、載せておかないと国の予算がつかない恐れがありますし、それぞれの地域にしてみるとそれが一番重要ですから是非載せてほしいという強い要望がでてきます。結局ほとんどが掲載されることになります。いわゆる「ばら撒き」に近いですね。もちろん将来を見据えた基本的な考え方(コンセプト)はありますが実際の地域プロジェクトとどう整合しているのか疑問ですね。国全体の財源がないのにそんなことできるわけがありません。国の方も最初は従来通り5全総と言っていましたが最終的にはランドデザインという名称に変えました。計画論の終焉ですね。その後法律もなくなり、所管官庁の国土庁もなくなり「国土管理計画」になってしまいました。

●前提になる国の国土計画について、その概要と問題点についてお話しいただけますか？

(戦後の国土計画とその問題点)

戦後の開発のはしりは、まず食糧確保のための農地改革から始まりました。昭和25年に地域開発の憲法とも言える「国土総合開発法」が成立しました。ここでは、水源開発、石炭、ダム開発等、とにかく「ある資源を全部使う」と言う考え方でした。

計画の体系は、①全国総合開発計画②都道府県計画③地方総合開発計画(二つ以上の都府県にまたがる場合)④特定地域開発計画の4本に分かれていました。当時は、自然資源の開発は待ったなしで、まずは河川を中心とする「特定地域開発計画」から先行的に実施されました。これは、1929年の世界恐慌から立ち上がるために、アメリカのルーズベルト大統領がとった政策、TVAを模範としたものです。多目的

ダム建設を中心に電源開発等の河川総合開発を目的とするもので、国土保全（治山、治水）と資源開発の二本立てで木曾地域・天竜東三河地域等 22 地域で計画が策定されました。指定面積は、全国土の 3 分の 1 に及びほとんどの主要河川が地域に指定されました。ここが日本的で結局各地域の要望を聴き、バランスを取って採択した結果、指定地域が増えてしまうのです。

これについては、次のような意見があります。①全国土の 3 分の 1 の指定では特定地域とは言えず経済効果があがらない。②朝鮮戦争特需により資本主義の復興テンポが速まり、すでに 1957 年の「新長期経済計画」では重点が道路などの産業基盤重視に移り、公共投資は先進工業地域にまわるようになった。③国土保全の達成というより電力会社の地域独占の完成。④緊急物資の絶対量を増大しようとするもので経済計画的視点が弱く、物動計画的視点が顕著。などです。

その後、昭和 25 年には、朝鮮戦争が勃発し、特需に対応するため、特に先進地域における工業化が促進されました。「もはや戦後ではない」と言う名文句で知られる経済白書「いわゆる都留白書」が公表された昭和 31 年に、首都圏整備法（東京の首都の位置付けは、京都との関係で長きにわたり明文化されてきませんでした。それが、昭和 25 年の「首都建設法」において、初めて明文化され、事実上首都の地位が確定しました。これが首都圏整備法に発展的解消したのです。）昭和 34、35 頃には、九州など各ブロックの地域開発計画が策定されていきました。一方、昭和 32 年には「新長期経済計画」が策定され、昭和 35 年に池田内閣の「国民所得倍増計画」が策定されました。所得倍増計画は、10 年間で国民の所得を倍にすると言う計画で、経済学者の下村治氏の発想と言われていますが、結果は 3 倍になりました。

（所得倍増計画と全総）

池田内閣は、経済成長率の目標を一段と引き上げるために、既存工業地帯を含む太平洋ベルト地帯に重化学工業を中心とした臨海工業コンビナートを立地させ、これを結ぶ高速自動車道路、新幹線鉄道等を建設するという空間構造を想定していました。目的は、産業の強化なのですが、工業用地、道路、鉄道等、交通機関、工業用水が不足し、産業基盤は至って脆弱でした。そこがボトルネックになって経済の拡大が阻害されていたのです。そこで、鉄鋼（「鉄は国家」）生産を増強するため、臨海工業地帯に製鉄所を建設し、電力の強化のためにダムを開発し、輸送力増強には鉄道・高速道路を建設するという計画を立案しました。

政策の効率性を上げる観点から、既成の 4 大工業地帯である東京・大阪・名古屋・北九州を結ぶ、太平洋臨海地域を中心に集中投資を行うという考えでした。（「太平洋ベルト地帯構想」）

ところが、太平洋ベルト地帯のみに国家予算を集中投資することに、外の地域が猛反発したのです。そこで、所得倍増計画を閣議決定する際に、批判をかわす意味で「全国総合開発計画」（「全総」）を策定することが約束されたのです。その結果、昭和 37 年最初の「全総」が策定されました。法律が制定されたのが昭和 25 年ですから、何んと 12 年後に計画が策定されたのです。もうお分かりだと思いますが、「最初の国土開発計画は、社会計画や空間計画としてではなく、所得格差是正・地域間格差是正を目的とした経済計画」であったのです。

(プランナーの述懐～NIRAのオーラルヒストリー・プロジェクト)

これについては、実際に立案に携わったプランナーの証言がありますのでご紹介しましょう。これは、私が出向していたNIRAが、戦後国土計画の策定の経緯を残そうということで実施した「*Oral History Project*」における証言です。

「とにかく全総を早く作らないと所得倍増計画が駄目になるということで、何かでっち上げないと、ということで作った。効率と公平の真ん中で何か理屈をとということで、計画論的妥協で拠点開発がでてきた(いちかばちか)。下河辺さん(注：NIRAの理事長で「開発天皇」と言われた人物。初代国土庁事務次官で新全総のゴースト・ライターとも言われたが真相は定かではない。私のNIRA時代の上司)はなんで拠点なんて怪しげなものをみんなが出してくるんだと言っていた」下河辺氏「最初の全総の基本は産業立地論だった。当時の一大議論は臨海工業地帯における重化学工業の展開をどうみるかであった。石炭・鉄鉱石・銅山などが斜陽化。それと裏腹に輸入資源を臨海部で加工・処理する時代に。資源と結びついた立地論から輸入資源の加工・処理に便利な立地論へ」

経済学者の議論は、全総を拠点開発主義として位置づけ、この拠点の波及効果を議論するというものでした。拠点をつくれればその効果が周辺に波及するものと考えていました。

「拠点開発」の基本的な考え方は、「都市の過大化を防止し、地域格差を縮小するためには工業の分散を計ることが必要であるが、全面的に分散させるのは効率上よくない。そこで、拠点性の高いところから順次開発を進めよう」というものでした。

全総本文には「大規模な開発拠点には工業開発拠点と地方開発拠点がある。前者は主として大規模な工場等の集積を持たせることによって周辺の開発を促進する役割を持ち、後者は大規模な外部経済の集積を持たせることによって東京・大阪・名古屋の持つ外部経済の集積を利用しにくい地域の飛躍的發展を可能にする中枢指導的な役割を持つ」と記述されています。

つまり、大規模な工場、周辺の開発を担う「工業開発拠点」(重化学工業を中心とした臨海性の素材供給型産業)と地域の飛躍的發展を促進する中枢主導的な役割を担う「地域開発拠点」に分類されるというものです。具体的には「新産業都市建設促進法」と「工業整備特別地域整備促進法」によって、それぞれ規定されています。(通称「しんさん、こうとく」と呼ばれています。)

新産都市は、当初全国で10か所指定の予定でしたが44か所が立候補。結果、15か所が認定されました。(工特は6か所指定)ここで、「拠点開発の論理と実際の乖離」を整理しておきましょう。

(論理) 産業基盤の集中的公共投資→重化学工業の発展→関連産業の発展→都市化・食生活の変化(肉・乳製品等食生活の多様化)→周辺農村の農業改善(米作→多角経営)→地域全体の所得水準の上昇→財政収入の増大→生活基盤への公共投資・社会政策による住民福祉の向上

(実際) 産業基盤への集中的公共投資→工業誘致失敗→財政危機。誘致成功の場合。→富の中央集中→大都市化→公害の増大→地場産業の崩壊→財政のゆがみ→地方自治の危機

結果は、狭い計画地域内にその容量を越える工業が立地した結果、公害が噴出しました。

本来の国土計画とは、経済開発だけではなく生活、文化、健康等をいかに豊かにするか、その点に重点をおいた国土デザインでなくてはならないと思いますが、我が国の国土計画は、当初から経済計画としてスタートしたのです。

私は、なによりも問題なのは、「デスクプラン」にすぎなかったことであると考えています。これが、日本における計画論の脆弱さだと思います。翻って考えてみると、そもそも日本に計画はなじむのか疑問に思えることがあります。「明治の東京計画」でもそうでしたが、常に弥縫策（びほうさく）で、全体像や完成系を持っていません。仮に持たせた計画を作っても社会的に容認されません。実際に下河辺さんが考えた理念が、末端に行くと論理ではない、情緒的なものに包摂されてしまったように思えます。合理性を超えた判断基準で物事が動く「日本文明の特質」を感じますね。

あるプランナーは次のように言っています。「当時、読み切れなかったのは公害・環境問題に対する国民の意識と産業構造上の問題」水俣病の原因が「有機水銀」と判明したのが昭和34年ですから、読み切れるかどうか、微妙ですね。

次に、「全総」策定後7年を経て、昭和44年に「新全国総合開発計画」^{しんぜんそう}（新全総）が策定されました。「全総」の施行期間中に景気が急激に上昇（いざなぎ景気）したことにより、人口・産業の大都市集中が止まらず地域間格差が拡大していきました。そういった状況を是正し、「国土の均衡ある発展」を達成するために新たな全総が策定されました。この「国土の均衡ある発展」は、まさに国土計画の決まり文句になりました。（余談ですが、河村市長がよく口にするこの言葉はこういう歴史的背景から出てきた言葉です）

しかし、実際は前年の昭和43年に自民党によって発表された「都市政策大綱」（選挙で都市部の票を減らした自民党が都市部の票をねらったもの）と同じ線上にあった計画でした。当時の田中角栄大蔵大臣が総裁選出馬にするため、この大綱を基にまとめられたのが「日本列島改造論」でした。

（計画論の黄金期～新全総）

新全総の考え方は、日本列島をひとつの都市に見立て国土を効率的に利用するため、地域的な分業をより徹底させようとするもので、太平洋ベルト地帯に中枢管理機能や都市型産業を集積させるとともに、その他の地域には巨大産業基地やリゾートを整備し、そういった分業体制を協業化するために、その手段として新幹線・高速自動車道などの交通・通信網を整備していくと言うものでした。

新全総では、国土利用の均衡をはかり、全国どこでも発展できるようにネットワークを形成することをねらっていました。景気がよかったこともあり大型プロジェクトが目白押しでした。

計画論的には、「最もわかり易い計画」で、マスコミもよく取り上げました。まさに「計画論」の絶頂期と言ってもよい時代でした。結果は、全国で地価を高騰させ、「土地神話を定着」させてしまいました。

（理念、哲学の3全総～田園都市構想）

次が、3全総の時代です。その後、昭和48年のオイルショックを期に「高度成長期は安定成長期へとシフト」し、生活圏の遅れを意識した3全総ではより居住環境を整備する色彩が強くなっていきました。まず、3全総は、新全総を否定するところから始まりました。その背景には大平正芳内閣の「田園都市構想」がありました。大平総理は、時代の潮流に見合う9つの研究グループを設置し、それぞれから政策提言をもらいました。そのひとつに、国立民族学博物館館長の梅棹忠雄氏を座長にした「田園都市研究グループ」がありそこからの提言でした。これはハワードの田園都市の理念である「都市と農村との幸福な結婚」をベースに都市と田園との調和をはかるため、心の触れ合う地域社会を全国につくり、その有機的結合によ

り国家社会を形成しようとするものでした。従って、文化を重視し、地方分権色の強いものでした。その哲学は、「多様化や個性を尊重し、特色ある個性的な生活文化圏を形成しよう」とするものでした。

この哲学に基づき生活圏構想の延長線上に提案させたのが定住圏という概念です。「定住圏構想」と言うのは、生産環境・生活環境・自然環境の三つの環境を各地域に見合う形で総合的に整備しようとするものです。

結果としては、理念・哲学のレベルとプロジェクトレベルが乖離しており、地域はなんらかの補助金を期待し、地域指定に奔走しました。また、産業政策が不在で産業構造ビジョンとしては「知識集約型産業への移行」が提唱されたのみでした。

私は、これまでの全総の中で、この3全総は全く哲学が異なると思っています。梅棹先生の文明史観をベースにした、優れた哲学・理念だと思っています。報告書の一部を引用しますと、

政策研究会（大平内閣）報告書「田園都市国家の構想」（昭和55年8月）

・「田園都市構想というのは地域の個性を生かしてみずみずしい住民生活を築いていこうとするものであり基礎自治体の自主性を極力尊重していこうとするものである。」（昭和54年1月の第一回会合における大平首相の発言）

・「大都市の過密の解消と生活環境の改善。そして、大都市もふるさとと感じられることが求められている」

・「田園都市国家構想」とは、都市に田園のゆとりを田園に都市の活力をもたらし、両者の活発で安定した交流を促す国づくりである。」

・「生活の安定を確保し」「生活に自然を取り戻す」ことが必要で、そのために、大都市の思い切った緑地化と高層化をはかる「緑の都市開発」を提案する。

・「大都市においては日照権など色々な私権についても制約を受けざるをえずそのために、土地の所有権と使用権との分離を検討する」

・「この田園都市国家は「文化の時代」の国づくりを目指すものである」

・「人々の生活に生き生きとした自然の息吹を与えるため都市に緑と水を再生させ、みずみずしい季節感を取り戻し、新しい歳時記をつくりださなければならない」

・「「わがまち」意識の涵養。ゆとりとふれあいをもたらし公共空間。城郭などの歴史遺産。住民が憩う市民の森。美しく活気に満ちた街並みなど「象徴的空間」を保全、形成していくことが必要」

長々と引用しましたが、田園都市のイメージは、わかっていただけだと思います。

恐らくこの3全総ほど異色で関係者の評判の悪い全総はないと思います。なぜなら利権を求め、群がる関係者にはまったく興味のない「絵に描いた餅」だったからです。彼らが求めていた計画は、「飯の種になるプロジェクトであって、高邁な哲学ではなかった」からです。

ちなみに、この大元に当たる「田園都市」とは、英国のE・ハワードの著書「明日の田園都市」で提唱され、実際に建設され、今日もなお、存続しているもので、日本でも東京の田園調布はそれに由来しています。渋沢栄一が中心になり田園都市株式会社を設立し、造成したのが田園調布です。残念なのは、やがて、そこまでの足を担った東急の五島慶太に買収され、単なる通勤場所になってしまったことです。このあたりが渋沢栄一と五島慶太の人物の違いですね。

私が尊敬する都市学者のL・マンフォードは次のように言っています。「20世紀のはじめに二つの偉大な発明が我々の目の前にあらわれた。飛行機と田園都市である」と。ともに、1903年と同じ年なのです。

●折角の機会ですので田園都市についてお話し頂けますか？

(ハワードの田園都市～都市と農村の幸せな結婚)

ハワードは、『都市は社会の象徴であり、科学・芸術・文化・宗教の象徴である。そして、農村は神の人間に対する愛と思いやりの象徴である。我々の生存と所有の全ては農村に由来する。従って、「都市と農村は結婚しなければならない』と考えました。そこで、考えただけでなく、実際に町を作ってしまったのです。ここがハワードの偉大なところですね。つまり、本家では「単なる夢想でなく、飯の種にもなる、プロジェクト」であったのです。大平総理もいずれこの理念を実現しようという想いはあったと思いますが、民間からの発想でなかったことと、総理が任期途中で急死したことから実現しませんでした。

まず、(株)田園都市を設立し、土地を買収し、ロンドン郊外のレッチワースに田園都市という町を作りました。初めは民間主導でスタートしましたが、土地が値上がりし始めました。そこで、政府は、土地の投機を抑えるため公社法を制定し、公社になり財団になったのです。(株)田園都市は、土地を所有し、それを貸し、住民は建物を購入し、地代を会社に支払うという仕組みです。

ロンドン都心から北へ約8km、ロンドン近郊の田園郊外にハムステッドと言う、建築家アンウィンが設計したものがあります。これは、20世紀の英国でコミュニティスケールの都市計画としては最も優れていると言われているものです。面積340ha。戸数5570戸で、16000人が居住している都市で、平均敷地面積は103㎡です。ちなみに、ハワードの頭にあった適正人口規模は3～5万で、これは中世都市の一般的規模に相当します。

アンウィンの設計思想は、中世の村落を評価したもので、「Informal Beauty, Irregularity」(近代の直線とは無縁)を重視したもので、「Pastoralism」と呼ばれています。イギリスでは経済成長の結果、大都市に人口が集中し、中流階級が郊外に移住しました。結果、郊外住宅地の計画的コントロールが必要になり、近代都市計画が誕生したのです。1902年には、ハワード「明日の田園都市」が発行され、1906年に、「ハムステッド田園郊外法」制定、そして、1909年に最初の都市計画法が制定されています。市の開発許可と公社の許可の二重許可で厳しく規制されているため、「Picturesque」(絵のような)な景観が担保されています。1967年の法改正で土地の購入が可能になり、80～90%の住民が土地を購入しています。公社は、その売却益で基金をつくり映画館など営利事業を手がけています。その利益で、コミュニティバスの運行、コミュニティ活動助成、デイケアセンターの運営など公的サービスを行なっています。利益を住民に還元

ハムステッドガーデンサバープ



ロンドン近郊の田園郊外ハムステッド(アンウィン設計)



するので課税はされません。まさにソーシャルビジネスの先駆けともいえる事業ですね。地価が高く金持ちの居住地になっているという批判はありますが、住民の評判はよく、100年にわたって続いているのはすごいことだと思いますね。ひとつの「Sustainable (持続可能な) な街づくり」のモデルだと私は高く評価しています。

●なるほど、3全総というのは、なかなか味のある計画ですね。で、次はどうなりましたか？

(定住と交流～4全総)

次の4全総(昭和62年)は、主題が「定住と交流」で、なんだか、3全総の定住と新全総の交流を加えたような主題ですね。この計画の目標は、「東京の一極集中の是正」が目玉でした。4全総策定時は、他の大都市圏への人口集中が横ばいで推移していたのに対し、東京圏への人口の一極集中が進展し、産業構造面では第3次産業の成長が著しく産業のサービス化が進んでいました。そうした中で地域活性化のために3全総の定住構想をさらに展開していくとともに国土計画上、本格的な国際化の進展を視野に入れた計画づくりが必要となっていました。そこで打ち出されたのが、「交流ネットワーク構想」でした。

時の中曽根総理は、定住圏を評価しつつ、といいながら本音では、東京を「国際金融情報都市」に位置付けようとしていたと、私は考えています。中曽根総理が一番、やりたかったことは「民活」だと思います。最初の民活は新宿「西戸山再開発事業」でした。昭和60年に、NTT株の売却によって政府に潤沢な資金が入りました。すると、昭和61年に「民活法」、昭和62年に「リゾート法」と矢継ぎ早に法律を制定しました。中曽根民活のシンボルが「^{ジャパニック}JAPIC」の誕生でした。「大型都市再開発プロジェクト」の誕生です。日経は「アーバンルネッサンス」とはやしたてました。これらによる事業には政府が無利子融資や補助金をだしました。その受け皿となったのが「第3セクター」でした。各地方公共団体でも第3セクターの設立が相次ぎました。日本の「第3セクター」は、後で述べる一般的(国際的)なセクターの定義である、「共」(コミュニティ)とは異なり、民間と公共がともに出資して作る組織です。そのメリットは、民間の活力、機動力と役所の権限など、お互いのメリットを生かし相乗効果を図るというものでしたが、結果は見事に「悪い面の相乗効果を発揮」してしまいました。結果は、宮崎の「シーガイア」に代表される、失敗事例のオンパレードで膨大な債務を抱え破綻する第3セクターが続出することになりました。地方公共団体の「隠れ負債」となり、また夕張市に見られるように、粉飾決算の舞台にもなり、結局それが引き金になり、国が一定の財政指標(比率)を目安に、毎年地方公共団体から報告をさせ、それによって、比率の悪い団体には、財政再建計画を作成させ、コントロールするという「財政健全化法」が制定されてしまいました。大阪市などは結構、積極的に第3セクター設立に邁進しましたが、名古屋市は、西尾市長が早くから警鐘を鳴らしており、比較的少ないと思います。

(全国総合開発計画の終焉～国土開発から国土管理の時代へ)

結局、1次～4次の全総は、一言で言えば、「公共事業を公式に認知するためのもの」であったと言えるのではないのでしょうか。計画に登載されているからと言って採択されるわけではありませんが、少なくとも登載されていなければ採択の可能性は極めて低いことは確実です。政策のプライオリティが低いと見なされ、財務省の予算がつかないからです。

これまでの計画論の行き詰まりから、5全総は、プロジェクト主体の計画から方向性のみを示す「国土のグランドデザイン」というガイドラインに変わり、急速にこれまでの意義を失っていきました。その後は、「国土計画のあり方自身」が問題となり、国土庁がなくなり、総合開発計画が消滅し、法律も管理計画に変わっていったのです。

少し長くなりましたが、我が国における国土計画を振り返ってきました。

結局、国土計画が最も輝いていたのは高度経済成長に支えられ、国民の意識が同じ方向に向き、それを実現できる経済力もあった新全総の頃だと思いますね。その後、経済の停滞と共に価値観も多様化し、ベクトルが合わなくなり衰退していきました。時代が変わり経済・社会環境が変わったことにより計画を変えています。真の総点検は、時代の変化ではなく、計画がどこまで達成でき、なぜできなかったのかを点検することではないでしょうか。

●国の動きはよく理解できました。そう言う中で名古屋市の計画はどうしたのですか？

(コンストラクションの時代からオペレーションの時代に)

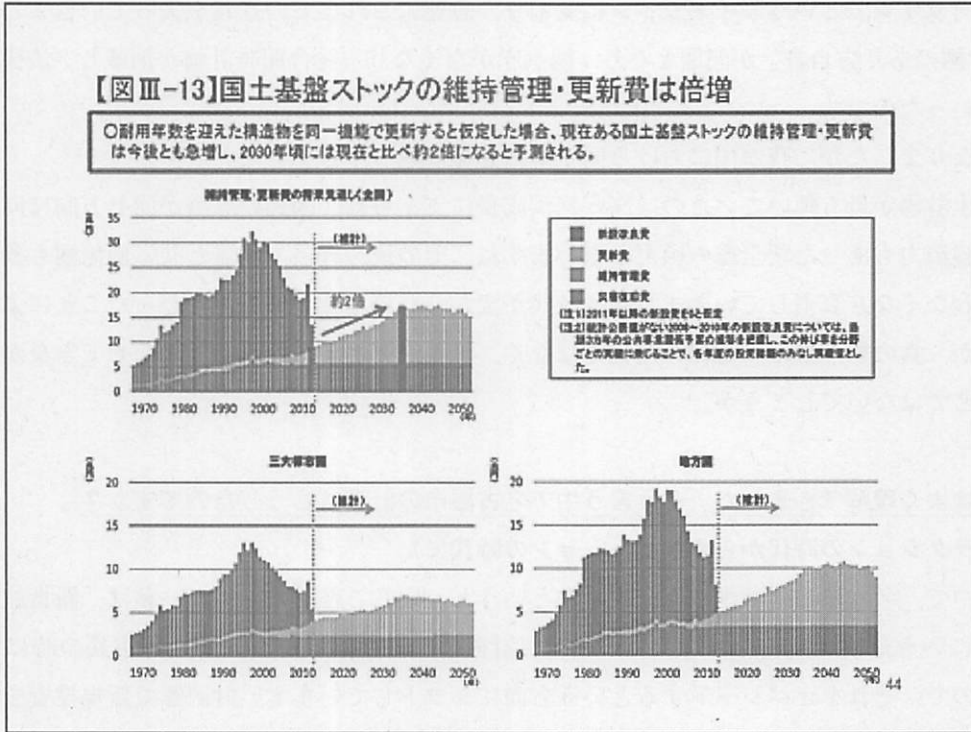
そういう中で、名古屋市の計画はどうするかというと、同じことなのですね。私は「新世紀計画 2010」が計画論的にいう最後の光芒だと思っています。計画の軸は、ハード系が西尾市長の時にある程度終わっていたので、それをオペレートするという方向にシフトしています。財源難で新規投資をする財源がないのです。しかし今後の維持管理を考えると相当の維持費、更新コストがかかることは容易に予測できます。最近でこそ笹子トンネルの崩落事故に見られるように「老朽インフラ」の問題がクローズアップされていますが、当時からそれは十分認識されていました。特に我が国は、高度成長期に戦後の荒廃から立ち上がるため相当の社会資本を一挙に整備してきました。ということは耐用年数が来ればそれらが同時に一挙に老朽化することを意味しています。ニュータウンの走り「多摩ニュータウン」が入居開始したのが昭和46年です。あれから43年。今やニュータウンがオールドタウンと化し、補修も追いつかず、若者離れが進み、高齢者のみを取り残され商店街も寂れオールドタウンとなっています。全国で通行規制の橋が1300ヶ所あるとも言われ、水道管・ガス管の破裂、道路の陥没が多数報告されています。維持更新のコストは毎年増加し、年間9兆円近くに達しています。2010年には、維持更新コストが新規投資費用を上回り、今後は維持更新コストがさらに増加すると考えられています。名古屋市でも例外ではなく、2012年に100周年を迎えた下水道では、下水道の破損が原因とみられる道路陥没が2010年度で337件、11年度も約300件を記録しています。これは、毎日、約1件の陥没が起きていることとなります。(図12)

現在下水道の総延長は、7700 km に及びま

図 12



図 13



すが、耐用年数は50年です。そうなりますと、高度成長期に敷設した管が一気に老朽化することになります。今後10年間で取り替えが必要な下水道は約1100kmに及びます。2012年度に名古屋市上下水道局は、下水管の補修管理費用として過去最高の63億を予算計上しましたが、すべてを取り替えるのは不可能です。そこで、「予防保全」に重点をおいて延命を図ろうとしています。カメラを入れ、痛んだ部分を修復しています。このように、インフラの老朽化の問題は、大きな都市問題として考えなければならない重要な課題です。それが「コンストラクションからオペレーションへ」ということを言った大きな理由です。現在はアセットマネジメントとして計画的行われています。(図13)

●(環境政策を柱に)

結局、本山市長が初めて「市民参加」という市民意見を政策に反映させることを提唱し、次の西尾市長が21世紀中に必要なインフラ整備を行うことに力を入れました。財源難の中で松原市政は市民参加をもっと進めて、「市民との協働(パートナーシップ)」で市政の課題を解決していく。だから公共施設にしても建設よりその維持管理を「市民との協働で行う」という発想になるのです。

●松原市長と言えば、ごみ問題など環境政策と言われていますが？

そうですね。松原市政の具体的な政策として目を見張るのは、やはり「ごみ非常事態宣言」に端を発した環境問題への取り組みですね。問題は、藤前干潟の埋め立てから始まりました。これはすでに西尾市長の時から懸案で、ごみの埋め立て処分場がないので藤前干潟を埋め立てて最終処分場にするという計画

です。松原市長に替わった時にはほぼ埋め立ての方向は決まっていたと思います。私も最善の策（ベスト）ではないが已むおえない「セカンドベスト」の策と位置付けていました。しかし、その後、反対運動が激しさを増し、ラムサール条約への登録など、インターネットを使った国際的な反対運動にまで広がり、結局、環境省も、「残せ」と言う話の中で、方向転換せざるを得なくなりました。ごみ処理は基本的に「**自区内処理の原則**」というのがあり自分のところから出たごみは基本的には自分のところで処理しなければいけなかったのです。ところが市内にはとても適地がなかったのです。すでに多治見市と協定を結び、愛岐処分場を使用させてもらっていましたがこれも早晚満杯になる状況でした。

そこで不退転の覚悟でごみ処理問題に取り組むために「**ゴミ非常事態宣言**」を出して、ゴミ量を年間20万トン減らすということで一挙に分別へ踏み切ったわけです。結果はゴミ先進都市になりました。その延長線上で「**環境首都**」を目指すことになりました。松原市政はごみを含めた環境問題はかなり成果を上げたと思います。2010年にはCOP10をやりました。実際に開催されたのは河村市長になってからですが、実際には松原市長のお手柄ですね。

また、松原市長は、名古屋城本丸御殿の再建と東山動植物園の魅力づくりにも意欲的でした。特に本丸御殿は、これまで長きに渡り民間サイドから再建の動きがあり、西尾市長の時にも検討がされました。費用が嵩む（当時の試算では150億～200億）ことと資材や職人の調達が困難でした。参考にしたのが、昭和3年に昭和天皇の即位記念事業として関一大阪市長が大阪城の再建に取り組んだことでした。総事業費の3分の1を市民からの寄付で調達しました。そこで、名古屋城の再建も、「**市民の熱意と盛り上がり**」が必要とのことで検討を続けることとされたのです。松原市長は、市民の盛り上がりを待っていてもだめなので、市側がまずヤル気を示し、気運を盛り上げる必要があるとして、色々な運動を展開しました。結果、寄付金も見事に集まり、2013年には第1期表玄関の公開となりました。これは、名古屋人が、自分の地域に「**誇りと愛着**」を持てる大きなきっかけになると私は高く評価しています。東山動植物園についても「**世界一の施設**」にすべく力を入れ、順次整備に取りかかっています。これについては後述します。

（松原市長の退任と河村市長の登場）

平成21年の選挙で河村市長が当選しました。河村市長は選挙にはめっぽう強い市長です。その背景には選挙のやり方自体の変化がありました。革新の場合は労働組合を主体にした選挙戦をしてきました。一方保守は、各種支持団体を中核とした組織選挙でした。しかし、時代とともに組織がうまく機能なくなっていました。投票率も長期低落傾向にあり、特に若者を中心に無関心層が増加する傾向にありました。

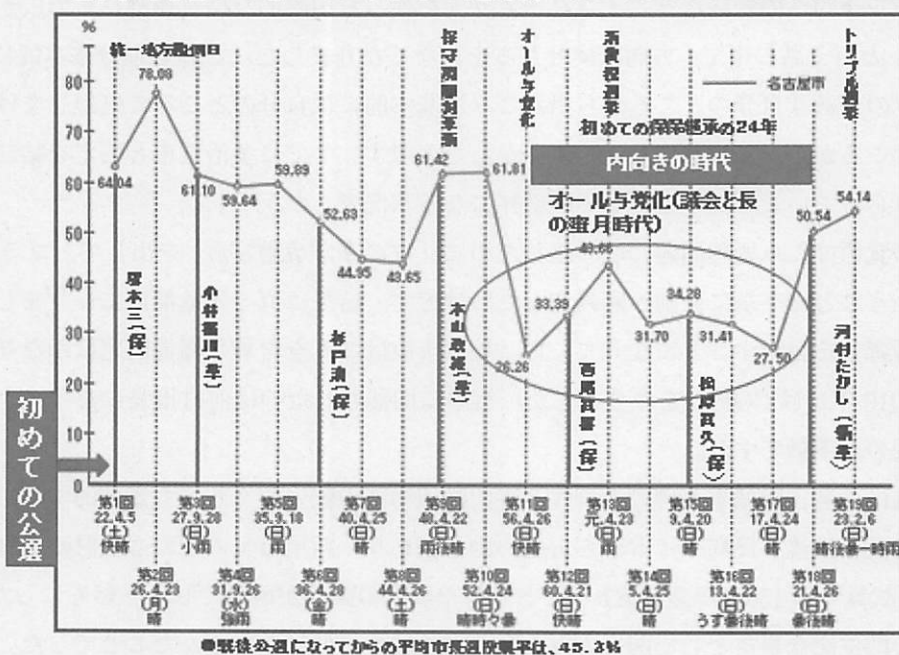
●なるほど。確かに河村市長は選挙に強いですね。これまではどうだったのですか？ 戦後の選挙の状況を教えてくださいませんか？

戦前の市長は官選でした。戦後法律で公選になって最初の第1回選挙は昭和22年4月に行われ、塚本三市長が当選しています。投票率の推移は図10の通りです。得票率を見てみると上位五つは次の通りです。

①昭和56年（本山3期目）77.42%（オール与党）この時投票率はこれまでの最低で26.26%でした。②昭和60年（西尾1期目）76.44%（候補者2人）③平成23年（河村出直し）69.81%（トリプル選挙。候

図 10

地方政治に対する市民の意識～(例)名古屋市長選投票率の推移



補者4人) ④平成17年(松原3期目)69.64%(候補者2人) ⑤平成5年(西尾3期目)68.80%(候補者3人)

得票率是对立候補にもより異なるため、数字だけで判断することは危険です。例えば接戦型だと得票率が低くても当選します。最接戦の選挙は昭和26年の塚本、小林の一騎打ちです。この時は塚本さんが勝利しましたが、小林さんはその後に市長になっていますから資質からすると両者遜色なしといえるところですね。結果は塚本(50.07%)小林(49.93%)その差588票の大接戦でした。次が、昭和48年の本山、杉戸の戦いですね。現職で4期を目指した杉戸市長が名大教授の本山さんに敗北しました。本山(50.09%)、杉戸(49.52%)その差4754票でした。これ以降、名古屋市長は3期までといった雰囲気が出てきました。各市長の平均得票数を見てみますと、一番多いのが河村氏59万(2回平均)、本山氏44万(3期目オール与党を除く2回平均)、西尾(35万)、松原(31万)、杉戸(30万)、小林(26万)。当然人口が時代により異なり、それに伴い有権者数が異なるので一概に評価はできませんが。ちなみに、有権者は昭和22年の415843人から平成23年の1776398人と4.3倍になっています。ところが図10でみると、投票率は有権者の増加とはほぼ負の相関関係にあり長期低落傾向にあります。人口急増期は編入がなくなった昭和39年までです。特徴的なのは、争点が明確だったり、有力な候補者が対立した場合に、投票率は上昇している点です。特に本山市長の3期目からオール与党化が進み、有権者の関心が薄れ、投票率も低落しました。当局と議会のハネムーン時代が28年続いたことにより職員の意識もかつてとは様変わりしました。これまで最高の得票は、平成23年のトリプル選挙で河村氏がとった662251票で、これまでの約2倍にあたる得票を記録しました。しかもこの時の候補者は4人で、4人を相手にこの得票数は驚異的であったといえるでしょう。

●良く理解できました。ところで河村市長の街づくりは如何ですか？

河村市長は、まずマニフェストを重視するというスタンスです。本人の言う、1丁目1番地の施策は、①10パーセント減税、②議員報酬の半減、③地域委員会の創設、この3点ですね。このマニフェストの進行管理を含んだ計画を「中期戦略ビジョン」という名前で公表しました。これはこれまでの計画論の限界を踏まえながら、市長の意図を組み2万人アンケートに基づいて方向性を示したものです。「歴史に残る町、名古屋」というのがテーゼになっています。現在この後の計画を策定中ですね。

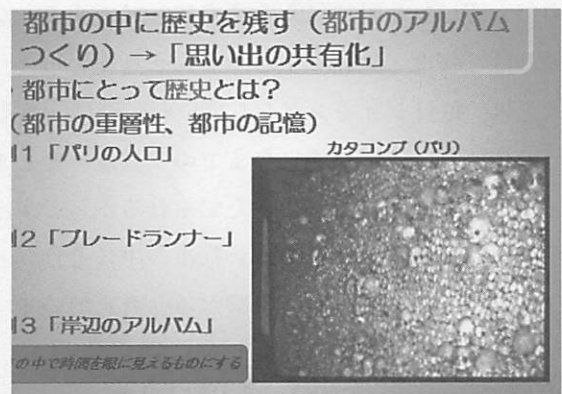
少しこの「歴史に残る」と言うことについて私の感想を言わせてください。恐らく市長は、「歴史に残るようなすばらしい名古屋にしましょか」と言う趣旨で言っていると思いますが、歴史に残ることを目的にするのはどうでしょうか。まず何をするのか。例えば、「住みたくなる街にする」「生活の質を日本一にする」そういったものがあって、その結果としてすばらしいという評価をもらって、歴史に残るということだと私は思います。ただ歴史に残るだけなら、夕張市でもりっぱに歴史に残りました。河村市長は歴史がこよなく好きですからつい言ってしまったと思いますが、歴史性を重視し、それを都市の中に残すことは極めて大切なことです。

(都市のアルバムづくり～メモリーの共有化)

少しわき道にそれますが、都市のなかに歴史を残す意義について少しお話しさせてください。私は、都市の中に歴史を残すことを、「都市のアルバムづくり」と呼んでいます。(図14)つまり、都市の中に歴史を「見える化」することによって「思いで(メモリー)を共有化」できるからです。「都市にとっての歴史の意味は、人にとっての生い立ちの記憶と同じです」人間と同じで都市にも記憶があります。それがすべて消滅された都市は、記憶喪失の人間と同じなのです。人間が誕生してから何年もかけてその体験を記憶として、体に脳に刻み付けてきたのです。都市も同じで、過去の記憶を重層的に積み上げて今日の姿になっています。同じ都市に生まれ、育つことは共通のメモリーを持つことです。

三つの例を挙げて説明しましょう。第1は、「パリの人口」のお話です。かつてNIRAに出向していた頃、当時のパリ市長シラク(後の大統領)氏が「パリの人口は億だ」と言ったという話を聞く機会がありました。いくらパリが大都市でも億ということはありませんね。よく聞いてみると、パリは、もともと海で、地下は石灰岩で掘りやすいそうです。中世のヨーロッパは土葬ですから、墓地が満杯になり地下水が汚染され、悪臭で環境が悪化しました。そこで、地下の石灰岩を掘りだし墓地にしました。それが「カタコンブ」です。パリの街は「スカイライン」がそろい、巴里の屋根の下と言われるくらい高層建築が少ないのですが、それにはこう言ったことも関係しているのです。いずれにせよ、シラク市長が言いたかったことは「人口を見るのに、今生きている人達だけでみてはいけない。都市はこれまで多くの人の努力の結晶として今日あるのだから、重層的に捉える必要がある」と言うこ

図14



●なるほど、都市のメモリーですか。人間も都市も同じなのですね。ところで計画を策定する時どういうことが大切ですか。お聞かせください。

(計画論で最も重要なこと)

今河村市長は次の計画に向けて「面白い街にしよう」ということでやってみえます。私の考え方を少しお話しさせていただきたいと思います。一番重要なのは、何のためにつくるかということです。その意義をきちんと理解するということですね。

計画論というのは、原点は前にも言いましたが「10年先を見て、5年先を語り、3年先を照らす」ということです。その「街の目指すべき方向を示して、認識の共有化を図る」ことが大切です。これを私は「ベクトル合わせ」と言っています。そのためのひとつのガイドラインであるべきなのです。一度、長期の総合計画を策定するとその政策を実現するために3年位の「実施計画や推進計画」というものを策定します。その政策を毎年予算化して実行していきます。そのために何がどれだけやれているのか進行状況を管理していきます。そこで一番根幹になるのは10年先が読めるかということです。右肩上がりの時代は容易に予測できました。しかし、3年先も見えない時代に10年先が読めるかということです。従来型の計画はもう限界でしょうね。そうなる確実に読める潮流を指定し、その中で基幹になるプロジェクトを動かしていく。いわゆる「プロジェクト方式」という方法が考えられます。かつて横浜で実施した方式ですね。現在の精緻な計画論が出てくる前ですね。哲学と理念だけ掲げ、後は主要なプロジェクトを組み立てることで政策誘導するやりかたです。大事なのはどういう町にしていくのかということです。「街づくりの理念・哲学」ですね。これをしっかり議論しなくてはなりません。

(名古屋の特性を踏まえて今後の方向を考える)

そこで、名古屋の特性を踏まえて目指すべき方向を整理しておきたいと思います。図14に沿って説明していきます。あくまで私の考えを整理した私案なのでそのようにご理解いただきたいと思います。

私の基本的な町づくりの考え方というのは、「近きもの喜ばば、遠くのものきたる」(孔子)です。まずそこに住んでいる人(市民)が、そこに住んでいることに満足をしていないといけません。外ばかり見るのではなく、そこに住んでいる人が「名古屋に住んでよかった」と言ってくれる、そういう町にしていくということが、基本だと思います。そこに住んでいる人が喜ばば、当然外からも、そんなにいいなら行ってみよう。住んでみよう、ということになります。行って見て良ければ、住みたいという気持ちになるわけです。そういう町を目指すことがまず大切ですね。一言でいえば「生活の質を高める」ということです。それは同時に「住みやすさ」とも言えます。もちろん「誇りと愛着」を持てることが、最終目標です。

「住みやすい」と言われている名古屋の住みやすさをもう一度再点検し、再構築してやる必要があります。それを踏まえ、「生活の質日本一の都市」を目指すのがいいと思います。市民は近いうちに確実に起きると言われている大地震に不安を持っています。従って、「安心・安全」は大きな柱として必須ですね。

まず、名古屋を語る時その「立地上の優位性」を確認しておく必要があります。本州のほぼ真ん中に位置し、交通の要衝であると同時に濃尾平野という大平野を抱えた「豊かな土地柄」です。基本的にはこの「豊かさ」が根底にあります。従って、「ハングリー精神」に欠けます。「金持ち喧嘩せず」ですね。これが「情報感度の鈍さ」に繋がります。ここからは、情報に対する感度を高めるという方向が導き出されま

す。

一方、豊かであることは、「アウトルキー（自給自足）」を可能にします。それは、他の地域にそれほど依存しなくても済みますから「モンロー主義的傾向」を生むことになります。逆に地域独占ですから、他者が進出するのを阻もうとします。他との交流をそれほど必要としませんから、情報がますます偏ってきます。ここから導かれる方向は「積極的な交流」です。

また、「豊かな土地柄」ですから、税率が低い。江戸時代の平均税率が5公5民と言われていますが、尾張藩では4公6民、あるいは3公7民とも言われています。従って、農民一揆も少なく、民力が強いので、「官民関係が比較的良好」になります。私有地を削減して公共用地にする「区画整理」がかくも大々的に実施できたのはこの「豊かさゆえの良好な官民関係」にあると私は考えています。逆に、それは、民が官に頼るという傾向を生みます。「官主導型」ですね。例えば祭りひとつとっても、祇園祭のように民間から発生した祭りではなく、名古屋まつりは「官製のまつり」ですね。やはり面白くありません。いくら工夫してみても限界があります。それは、官主導だからです。祭りは民衆のエネルギーの発散ですから、官主導には馴染みません。これが「魅力の欠如」に繋がります。

また、区画整理の成功により、名古屋は、より「機能的・効率的」な街になっていきました。区画整理のお蔭で、名古屋は「都市基盤のミニマム水準」を達成し、近代都市計画が成功した模範的な都市になりました。しかし、その遠因は、家康の「慶長年間の都市計画」に遡って考える必要があります。

名古屋は「区画整理世界の都市」と前に言いましたね。市域の約70%近くが何らかの影響を受けています。(図15)特に戦災復興が区画整理で行われた影響は大きいものがあります。

名古屋は一大軍需生産基地でしたので東京と並ぶ大空襲の被害を受けています。特に航空機産業の一大メッカで、発動機の生産では当時の全国の40%強を生産していました。

従って、空爆回数は、東京に次いで第2位と徹底的な空襲を受けました。結果、当時の市域面積160km²(現在の約半分)の4分の1が灰燼に帰しました。(図16)その復興を全国に先駆けて「区画整理」で実施したのが名古屋でした。約4000haという広大な計画でした。東京や大阪なども同じように計画は策定しましたが昭和25年朝鮮動乱が勃発し、ドッジラインなどで財政が苦しくなると、莫大な予算を必要とする大規模な区画整理はGHQの命令で中止に追い込まれました。しかし、名古屋だけは、早くスタートしたため既に仮換地も終了し、いまさら引き返せないという理由で認められ、その後40年近くかかって終了しました。

図15



なぜ、名古屋だけはそんなに早くスタートが切れたのでしょうか。それは、①明治からの耕地整理の実績②区画整理の理念が市民や市会議員に浸透していた③終戦直後から測量機器を収集した④過去に帝都復興を区画整理で実施した実績があった。こと等が主な理由だと私は考えています。

特に名古屋市は、復興は区画整理しかないとの信念のもとに、既に終戦の同月8月にも、爆撃を受けた三菱の工場跡などを中心に測量機器の収集を行ったと聞いてい

図 16



ます。前述しましたように、区画整理は権利変換の手法ですから、測量が基本になります。大正初期に石川栄耀氏が中心に大々的な区画整理を実施しましたが、耕地整理(名の通りもともと耕地に適応する手法)の時代から既に名古屋はそれを市街地に適応し(当時は禁じ手)着々と実績を積んできました。従って、市議員が区画整理協会の役員に多数就任していたりして、合意形成が容易で、スピーディな対応が可能であったことが大きな要因と思います。

当時の佐藤市長が、復興の指揮をとり、昭和20.10.10に技官ポストを新設し、田淵寿郎氏をあてます。余談ですが田淵さんは「名古屋市唯一の名誉市民」です。そして「名古屋市復興調査会」を立ち上げました。この復興調査会が発表した案が「大中京再建の構想」です。昭和21.3.14に予算市会で市長は「名古屋市復興計画の基本」をもとに、将来人口200万に対応した施設整備と予算について提案理由説明をしています。(天白川と庄内川に囲まれた地域に200万人を収容)(図17)

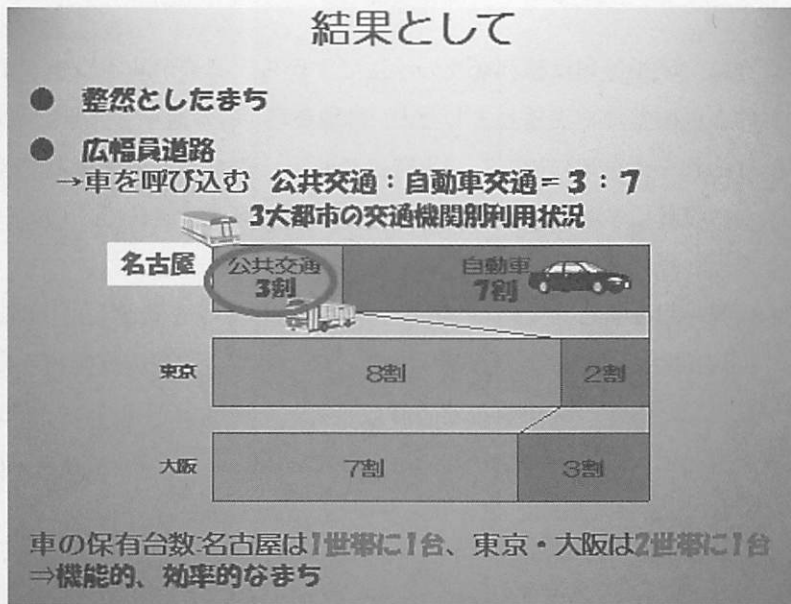
市の戦災復興区画整理事業のエリアは4407haで、国で補助が認められるのは当初は、1983haでしたが、後に認められました。計画のポイントは、広幅員道路計画でした。100m道路2本、50m道路9本で、東西、南北の100m道路と新堀川や堀川の両側の15m以上の道路は防災のための避難所にする計画でした。都心部の道路率が40%という計画でした。私には、ベースは慶長年間の都市計画であるように思えます。

江戸時代から整然として機能的な街が区画整理によってさらに促進され、その最後のダメ押しが戦災復興都市計画だったと思います。結果は、道路率が極めて高く、機能的・効率的な街になり、車中心の街が形成されていきました。交通モードをみると、名古屋では公共交通30対自動車70。東京は全く逆ですね。大阪は中間。また、トヨタ自動車が近くに立地していることもあり、自家用車の保有台数が名古屋は、1

図 17



図 18



世帯に1台と東京、大阪の約2倍になっています。(図 18)

(名古屋城は近世のシンボル)

まず確認しておきたいのは、「名古屋はニュータウン」だったという点です。何もない土地に、当時は全国で4位の金沢に匹敵する大都市であった清州から那古野台地に城下町を移転します。俗にいう「清州越

し」ですね。そして、那古野台地の西北角に家康が名古屋城を築城し、その南に格子状（グリッドパターン状）の整然とした城下町をつくりました。（図 19）当時の城下町は、防御最優先ですから、道路は曲がりくねったりして、決して名古屋のように整然とはしていません。家康が名古屋の町割りにかかる頃には、豊臣方との戦いに勝利する公算が高く、今後長期に渡り「パックス・トクガワーナ（徳川の平和）」が続くことを考え、軍事上の機能より、経済性・効率性を重視した町割りにしたと考えられます。そのシンボルが「名古屋城」であるというのが私の考えです。なぜなら、名古屋城は当時の城郭には珍しい「直角直行の城」なのです。（図 20）

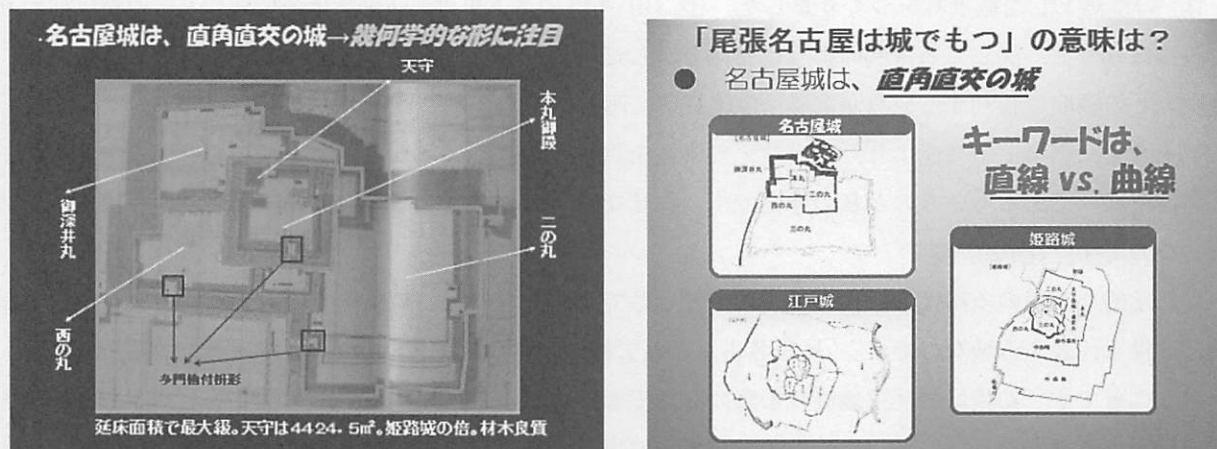
幾何学的な直線の多用は、近代合理主義が形として現れたものだと私は考えています。つまり、名古屋城は近世を代表する城なのです。「尾張名古屋は城で持つ」の現代的意味は、「名古屋城が近世のはしり」ということです。初代尾張藩主義直は家康の9男で家康晩年の子供ですから、大変可愛がりました。戦国時代は家康自身もそうですが、自分の子供を人質に出します。ところが、この頃は徳川政権が全国統一を成し遂げた時期にあたり、義直は駿府の家康の下で育てられました。常に一緒にいますから、ますます可愛がりますね。第二人は、紀伊徳川家、水戸徳川家の藩主となりここに、本家に一朝ことある時にはいつでも將軍家を継ぐ「御三家の体制」が成立しました。尾張徳川家は、その御三家筆頭です。家康は恐らく「武家の正当性（オーソドクシー）」を義直に伝えたのではないかと推測されます。どうもこの流れが、名古屋の「質実剛健さ」の気風に繋がり、ひいては「モノづくり」に継承されたのではないかと考えています。

また、慶長年間の機能性が、区画整理に関係しているのではという推論も考えられますね。機能的・効率的な街は便利であっても「面白くはありません」。変化に乏しいからです。一方、住みやすくはなります。この「魅力に乏しい」部分を補おうとしたのが「デザイン都市」です。また、エクサイティング・シティもそうです。一方、「住みやすさ」と「モノづくり」は名古屋のアイデンティティとしてきちっと守っていくことが必要です。

図 19



図 20



姫路城



名古屋城



既に詳しく述べましたように「デザイン都市」は市制百周年記念事業として行った「世界デザイン博覧会」をきっかけに、議会で「デザイン都市宣言」を行いスタートした施策で、目的は、二つあります。ひとつはデザインで都市を美しく魅力的にしたいといういわば「アーバン・デザインの振興」です。今ひとつは、デザインで付加価値をつけ、輸出ドライブをかけたいという「インダストリアル・デザインの振興」です。後者は、国際デザインセンターの設立に結びつきました。時間の経過とともに初期の理念が風化し、デザインに対する関心が薄れていったことは寂しいですね。

結局一番大切だったのは、今思い起こせば、職員に対するデザイン教育でした。

また、トータル・デザインを実現しようとすると、横の調整が不可避になります。例えば国においてもアーバン・デザインと言えば国土交通省、インダストリアル・デザインは、経済産業省と縦割りになっています。名古屋市においても同じで、実際トータル・デザインを実現するにはセクショナリズムを排して、総合的に考えることが不可欠です。その意味からもデザインは縦割りの弊害を取り除き、総合行政を実現するよい切り口になると思います。

●先生は、自治について熱心に語って見えますが自治観についてお話しください。

(自治の精神に戻る)

足元をきちんと見る。これが実は自治の本質です。中国の唐晩期の詩人杜牧は「上策自治に如かず」と言っています。一番良い方法は何事によらず自治にしくはないという意味ですね。後藤新平は「自治を離

れて、**楽土なし**」「**自治宗の宗徒たれ**」と言っています。これは人としての有り様だと思いますね。「**礼記**」(大学)に「**修身、齐家、治国、平天下**」というのがあります。これはまさに身の処し方ですね。この順番は「**下から上**」であって上から下ではありません。ところが日本の自治は官治自治といって国が上から下に降ろしてきます。中央政府は地方政府を信用していないのですね。手取り足取りです。地方の側もそれに慣れ甘えているところがあります。しかし、「**民主主義の学校**」と言われるアメリカを見ると分かります。アメリカは何もない土地をフロンティア精神で開拓していきました。東部から西へ西へと未開の原野を切り開き、町を作っていました。いわゆる「**西漸運動**」ですね。ところが作った町はすぐに無頼漢に襲われる。そこで町を守るために自分たちで金を出して保安官(シェリフ)を雇いました。西部劇に良く出てきますね。「**ホームルールの思想**」で、地域のことは地域で解決する、自分の身は自分で守ることが当たり前前の国ですから、銃の乱射事件があっても銃砲規制はなかなか合意が取れません。すべてが下からで、自分たちの意思が一番先にあります。これが自治の原点です。「**自助の精神**」です。自治体でも、なりたいところが申請してなります。日本のようにどの地域をとっても必ずどこかの自治体に属している国とは大違いです。自治体でない地域が全体の3割くらいあるといわれています。「**Unincorporated Area**」(非法人地域)と呼ばれています。自分達で自治体を設立したい時には憲章(Charter)を作り、税の徴収など一定の計画を州に申請し、州の承認を得られれば法人格が付与されて自治体になれます。必要がないと住民が判断すれば法人格を取得しなくてもいいのです。その場合、その地域の行政サービスはどこが受け持つかということが問題になりますが、それは上部団体にあたるカウンティ(County:郡)が受け持ちます。アメリカは独と同じ連邦国家ですから、州が国に相当し、51の州の連合体が連邦国家になります。まさにその名の通り「**United State of America**」(州の統合体としてのアメリカ)です。もともとは英国の13植民地であったところが英国との独立戦争で一致団結するために連合したものです。従って、連邦には外交などの最低限の権限しかなく、州(State)が国家にあたります。日本は逆ですべて上からです。この下からというのが「**補完性の原則**」という考え方です。つまり、「**個人→家族→地域社会→基礎的自治体→広域自治体→国**」という順番です。これは、先ほどお話しした身の処し方「**修身→齐家→治国→平天下**」と同じですね。イタリアではまず一番小さい自治体であるコミューンがすべての事務を行うこととします。といてもできない行政サービスがありますからその場合には直近の上部団体が行います。それもできない場合にはさらに上部にあがります。最終が国になりますから国が行う仕事は外交とか防衛とかそういった事務に限定されます。日本は逆ですね。これは地方でやらせても差し支えないという事務を下におろしますね。これは自治ではありません。

(ヨーロッパの都市の形成と市民社会)

ドイツでもそうです。それは歴史的に見て、都市を自分達で作ってきたかどうかによります。ドイツでは、12世紀頃、力を持った商人が地域を支配していた領主を駆逐し、自分達の町を城壁で囲うことによって、自分達が治める地域(都市)を作り領主の支配から独立したのです。その場合何が違うかということと法律が違うのです。つまり領主の法に従わない自分達の法を作ったのです。これが「**市民法**」です。「**都市の空気は自由にする**」という有名な言葉がありますが、領主の支配を嫌う農民が農村から城壁内に逃げ込み、1年と1日都市に住んで宣誓をすれば市民になれます。これが「**宣誓共同体**」(コミューン)ですね。イメー

ジとしては、広大な領土という海に浮かぶ島のイメージですね。この城壁が最初にお話ししたブルグですね。実際一番資金が必要になるのは城壁の建設費です。それを市民全員が運命共同体として負担します。それは、各世代ごとの「必然的義務感の共有」なのです。また順番に城壁の見回りを行います。これが夜警ですね。アムステルダム国立美術館には、17世紀の画家レンブラントが描いた「夜警」という有名な絵があります。城壁の建設費には資金が必要ですので市民の税金として徴収します。多い場合には市の税収の3分の1に上ったという記録もあります。従って市の金を管理する収入役が同時に建設局長を兼務したという記録もあります。当然、外からどんどん農民が流入してくれば人口が増加します。そうなるはず建物を上に積み、増加する人口を収容しようとしています。すると、人口も過密になり騒音などのトラブルが発生します。相隣関係が難しくなりますから「住み方のルール」が必要になります。そこで市民法ができます。併せて法律に違反した場合の裁判が必要になります。その場合にルール違反には厳しく望む、という厳罰が必要になります。これがないと秩序が崩れます。従って、刑の執行は広場において公開で行われ、市民は晴れ着を着て見に行ったという記録もあります。それは法によって、秩序が適正に保たれていることの証の意味あいですね。よくドイツの小都市には拷問道具を陳列してある都市があります。例えばローテンプルグでは市庁舎の近くに「中世刑事博物館」というのがあり、色々の種類の拷問道具を多く見ることができます。豚の裁判もあったようで豚でさえ法を犯せば裁かれるというのはいかにもシンボリックですね。日本の高山市に江戸時代の代官屋敷の跡（陣屋跡）がありますが、そこにも拷問道具があります。比較にならないくらいシンプルな拷問道具です。さらに人口が増加し、過密になると城壁をさらに外に拡張して市域を拡げます。ヨーロッパの市街地図をみると丸く囲まれ曲線になっている道路が見られます。それが城壁の跡である可能性が高いですね。パリは5回拡張しています。一番外側の城壁の跡は外郭環状道路になっています。余談ですが、ダイアナ妃がパパラッチに追跡され事故で亡くなったところですね。ウィーンは外郭環状（リングシュトラッセ）になり周辺に国会議事堂やオペラハウスなどの公共施設が配置されています。（図21）

城壁は戦争手段の進化（大砲の出現）とモータリゼーションの進展により19世紀に取り除かれました。壁がなくなる過程はまさに「市民が国民に変容する過程」なのです。しかし、城壁の中で形成された社会（市民社会）と市民意識は、ヨーロッパの根底に通奏低音のごとく流れていると私は考えています。何より市民という概念で語られるものが根づいた意味は大きいと思います。

中世刑事博物館



高山陣屋



図 21



(都市は、市民の街である時最も輝く～結晶性に見る都市造形)

ヨーロッパでは市庁舎はシティホールと言われ「自治の中心」です。それが街の中心にあり、その前に広場（通常マルクト広場。市場）があり横に祈りの中心である教会が配置されているのが一般的です。（図 22, 23）ヨーロッパの諸都市に行くと気が付きますが市庁舎は実に美しく、一大観光スポットなのです。

市民にとって町の誇りです。この3点に噴水を加え、私は「3点セット+ワン」と呼んでいます。市庁舎には必ず豪華なホールがありそこはたいてい市民に開放されていますから結婚式などに使用されています。（図 22）このように中世都市は城壁に囲まれ、中心に美しい3点セットを持った「絵になる都市」がほとんどです。都市が囲い地であるがゆえに3点セットを中心に、凝縮しており、「都市の結晶性」がみられます。これこそが、城壁（都市壁）によって形成される市民及び市民社会を空間的に都市造形として表現したものであると私は考えています。

(計画策定にあたってもっと議論してほしい市民概念)

私は、計画論を議論する時に市民という概念についてもっと掘り下げてほしいと思っています。市民と住民の違いを理解している職員はどれ位いるのでしょうか。何故、市民にこだわるかという、日本には（いや東洋には）、真の意味での都市というものが存在しないからです。この点はマックス・ヴェーバーも指摘しています。従って、市民というものを存在しないのです。ヨーロッパでは「都市の形成が同時に市民の形成」になります。それがヨーロッパ文明でもあります。文明は都市という空間において形成されます。これが都市文明ですね。文明は Civilization と書きますが、「市民化」という意味です。語源的には、都市・文明・市民は同根です。ラテン語の Civitas（キビタス、都市）は英語の Civilization の語源に当たります。また、市民という概念は、個人の自立を意味しますし、公共性と深く関係してきます。日本で市民というのは、住民基本台帳に登録されている者を意味します。ヨーロッパでは、国民である前に都市市民だったのです。「都市に対する信頼は国家より強い」のです。

カミロ・ジッテは、ニュールンベルクを中心としたドイツを何度も訪ねることを推奨しています。リヒ

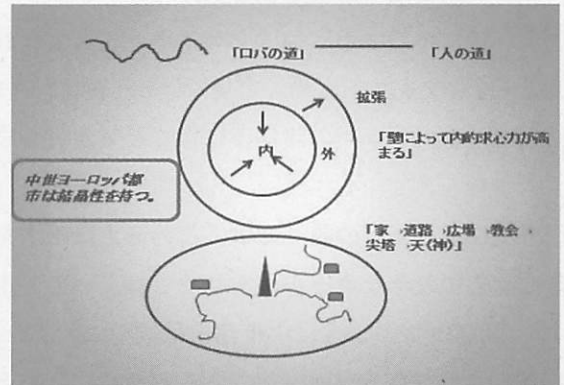
図 22



図 23

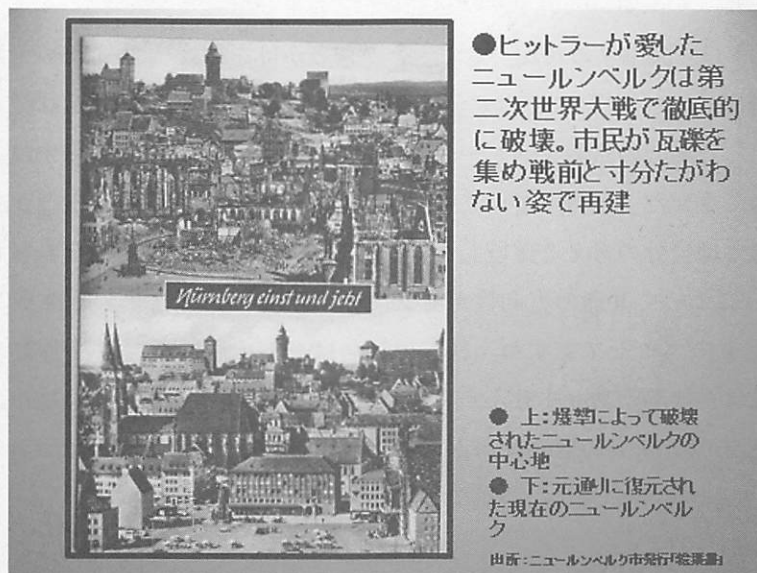


中世都市の概念図



アルト・ワグナーが最も美しい街と絶賛し、ヒットラーがこよなく愛した最もゲルマン的造形をたたえる街、ニュールンベルクは、第2次世界大戦で徹底的に破壊され旧市街地の90%は灰燼に帰しました。にもかかわらず、戦後の復興は住民投票の結果、ヘルムート・ヤンの改造案を退け、戦前のニュールンベルクに戻すことに決定し、市民一人ひとりががれきを積み、破壊前と寸分たがわぬ形で再建がなされています。(図24)しかも、古い建物を残すだけでなく、うまく利用しながら近代建築をたくみに取り込む努力をしており、この古いものと新しいものとの調和はニュールンベルクのみならず、フランクフルトはじめ、ドイツの諸都市にみられます。つまり、「**国家の論理より都市の論理が優先**」されるのです。私は中世ヨーロッパの都市にみられる市民精神は、現代にも十分通用する普遍的原理でありそれこそが都市の原点であ

図 24



り、都市を真の意味で都市足らしめるものであると考えています。

(市民とは一般意思を持った者)

ルソーは「一般意思」(General Will)という概念を提示しています。ルソー流に市民を定義づけると「市民とは一般意思を持った者」ということになります。城壁の中が市民社会と言いましたが、城壁の意義は、囲うことによって内に求心力が働くことです。つまり「囲い」というのは空間を「内」と「外」に区別することです。特に戦争になると、ヨーロッパの場合は日本と異なり、国境を接していますから、違う民族同士の戦いになることが多くあります。そうなると思滅戦に近いですから必死で城壁を守ろうとします。ますます内に固まりますね。つまり城壁(壁)の中で生活するという事は同じ船に乗るのと同じことで、「運命共同体」なのです。船の中ではそれぞれ個人がある程度我慢して、一定のルールに従わないと、船が沈没する危険があります。つまり城壁の中では「個人の利益を越えて全体の利益を図ることが実は個人の利益になる」という状況が生じます。「全体の利益=個人の利益」ですね。このことを深く認識(自覚)して、そのように行動できる者が市民です。これが公共の福祉の尊重なのです。これをルソーは、一般意思と呼んでいます。通常は間接民主主義ですから議会を通じてこの一般意思が実現されます。だから市民が地域政治に関心を持ち活発な議論をすることが極めて重要になります。

ルソーの一般意思に対して20世紀独の哲学者ユルゲン・ハーバーマスは、正当性の源泉は個人の予め決定された意思ではなく、その意思が形成される過程「合意形成過程」にあると主張しました。つまり万人の協議の成果が一般意思だという主張ですね。そういった協議の場を「市民的公共圏」と呼びましたが、古代ギリシャのアゴラのイメージですね。余談ですが、現在では「サイバー空間」が新たな公共圏になりつつあるような気がします。

先ほど松原市政のところで、藤前干潟の埋め立て断念の話をしました。「そして干潟は残った」という断念に至った経緯は本に詳細に書かれていますが、インターネットを使って埋め立て反対派は干潟の問題を世

界に発信しました。サイバースペースを利用して世論を喚起しようとしたのです。まさに新たな公共圏の出現だと思いましたね。

さて、このポイントは「議論する市民」です。そのきっかけを彼は「コーヒーハウス」に求めました。コーヒーハウスは17世紀にロンドンに初めて登場しますが、18世紀初頭には3000軒くらいはあったと言われています。こういった場での議論を通じ一般意思は形成されるという考えですね。私は講義でも常に「議論することは極めて重要だ」と言っています。議論のできる学生を育てることが必要だと考えています。議論するということは自分の考えを確認したり、修正したり、新しい考えを吸収したりしますから、議論の過程を経ることによって共通の方向性が見えてきます。コンセンサスを得ることが可能になります。これこそが民主主義のプロセスですね。日本の社会は一部を除いて同質社会です。しかも長年にわたって他国の支配を受けた経験がありませんから全く異なる価値観と遭遇した経験が乏しいのです。そういった社会では、聖徳太子の17条の憲法にある「初をもって貴しとなす」に代表されるように「議論より調和」を求めます。「以心伝心」のように言葉ではない情感や雰囲気理解しようとし、沈黙は金とか「察する」ということですね。

ヨーロッパ社会は新約聖書にあるように「始めに言葉ありき。言葉は神とともにあった」というように言葉（ロゴス）の社会です。こういったメンタリティの違いは文化の違いによく表れています。例えば映画を見ても小津安二郎監督作品とハリウッド映画を比べるとその違いがよく分かります。日本の禅は議論を拒みます。「禅問答」ですね。不立文字という言葉があります。大事なことは言葉にならないという考えですね。一言で言えば「ロゴス（論理）の西洋とパトス（情）の日本」ということではないでしょうか。日本では、これが長きに渡り村落共同体をベースに続いてきました。ヨーロッパが「自立した個人」をベースにして社会が成立しているのに対して日本の村落共同体では公共の利益が全体の利益に置き換わり、個の利益が無視されます。江戸時代でも税は個人が対象ではなく村を対象に課税され、それを家ごとに配分します。「みんなで仲良くやるのが美德」の世界では、個の利益と公共の利益が激しくぶつかったり、調和したりということはありません。このようなメンタリティの違いを認識したうえで、西洋的な市民社会を日本は目指すべきなのか、それとも日本的な民主主義の方向を模索するのかを考えることが必要になります。

もう少しわかり易く映画を例に、市民について説明しましょう。黒澤明監督の「七人の侍」という映画がありますね。舞台はちょうど戦国時代の応仁の乱の頃だと思いますが、各地方を守っていた武士が皆京都に戦争に行ってしまう。そうすると地方の農村を守ってくれる人がいません。自分達ではとても守れないので先ほどの保安官と同じで腕利き7人の武士を雇います。武士は村の防御を固め農民の軍事訓練を行います。途中で面白い話が出てくるのですよ。戦略的にこのエリアに3件の家があるが、これは襲われても戦略上は放棄せざるを得ないと。当然家の住民は怒りますね。そんなことやるんだったら俺達は協力しない。戦線離脱だ。こんな奴に従わず、みんなもそれぞれ自分の家を守れと。人の家なんかより、自分の家を守れと。そこで7人のリーダーにあたる志村番扮する武士が怒って、恫喝して力づくで従わせるのですが、よく考えてみると、この場合は威嚇して力づくで従わせますが、これが議論で納得すればどうなるか。自分の家を守ろうとすると、実は全体が潰される。だから自分のが我慢してでも、全体に協力して、みんなでやるのが、強いては自分の家を守ることになる、ということを実感します。その結果、

一丸となって勝利するわけです。これが市民ですね。これが分かるかどうか市民のポイントだと私は考えています。こういう自覚を持てる人が、どうやったら形成できるのかというのが私の興味の対象です。

●自治の問題も歴史的に掘り下げていくとなかなか底が深いですね。ところで日本でヨーロッパ的な市民と言うのは可能なのですか？

(市民形成のきっかけはまず地域を知ること)

大切なのは、自分達の地域をまず知ることです。孔子も言っています。「知るは好むにしかず、好むは楽しむにしかず」と。知ると好きになる。好きになると、だんだん楽しくなってきます。地域のためになんとかしようという人がたくさん出てくると、その地域は良くなります。なぜかというとその地域に対する住民の愛着が出てくるからです。そのうちに地域に誇りを持つようになってきます。このことが、実はすごく大切なことなのです。

別に地域でなくても、仕事をやる上でも同じことだと思います。私は、常に言っていますが「仕事をするときは、自分の仕事に自負を持って」と。つまり誇りと自信ですね。新しい仕事に就くと最初はわからないから知ろうとします。だんだん知ってくると、良いところを発見して好きになります。これは恋愛と同じだと思います。恋愛でも好きになって終わってしまっただけではいけません。次に生活を共にする。毎日生活を共にすると単に好きだけ(恋愛感情)ではやっていけません。この人と一緒にいるのが一番楽しい。いつも一緒にいたい、そう思えなければ長い人生一緒には暮らせません。これが夫婦だと。これは仕事も同じだと言っているのです。地域づくりも同じです。この孔子の「知る→好む→楽しむ」ステップは普遍性を持っています。まさに、仕事の極意、人生の極意は「楽しむ」ことなのです。この地域で何かをやるのが面白ければ、面白いほど、そう思う人が多ければ多いほど、地域は良くなります。こういう人間がどれだけ育ってくるかが鍵です。そのために私はコミュニティを軸にした、NPOやボランティアなどの新しい動きに期待しています。

(ソーシャルビジネスと道徳経済)

これは井上先生のサードセクター論になりますが、この「面白さ」をビジネスにしていこうという動きが出てきています。いわゆるソーシャルセクターとか「ソーシャルエンタープライズ(社会的企業)」というものです。面白さと言っても利潤の極大化を図り大金持ちになって暮らす面白さではありません。そこに「他人の喜びが自分の喜びとする」という考え方があることがポイントです。これがソーシャルという意味です。資本主義がその原点を忘れ、ますます私利私欲に走る方向に進んでいる中で、こういう考え方が出てきたということは、ひとつの救いかな、と私は思っています。

資本主義というのは、とにかく利潤を極大化する。そして利益が上がると、内部留保に充てたり、新規投資に回したりします。それでも利益に余剰があれば株主に配当します。どこまでいっても、自分達の世界で儲けを回します。しかし、このソーシャルビジネスのコンセプトは利益が上がった分を配当に回すのではなく社会のために使おうとするものです。これが経済のあるべき姿だと思っているのです。これは道徳経済に近い考え方だと思っています。二宮尊徳はこう言っています。「私利私欲に走るのではなく、社会に貢献すれば、いずれ自らに還元される」(二宮の報徳思想)

(過去の歴史から学ぶ道徳経済)

道徳経済というのは、江戸時代には、当たり前の考え方でした。何故かという、日本には長きにわたる儒教の土壌があったからだとは私は思っています。本来は孔子を生んだ中国が本家なのですが、残念ながら、中国では儒教は死に絶え、資本主義以上の拝金主義が蔓延しているように思えます。盛んに中国政府が孔子の教えを復活させようとしているようですが。

私は、江戸時代の偉人から多くのことを学ぶ必要があると考えています。例えば二宮尊徳は何を言ったかという、「道徳のない経済は罪悪、経済のない道徳は寝言」と言っています。道徳と経済が融合していることが必要不可欠なのだ。だから利を求めより先に義を求めよと言っています。「先義後利」ですね。近江商人も同じことを言っています。日本資本主義の父と言われる渋沢栄一は「算盤と論語は一致させねばならない」と言っています。これが実は伝統的な儒教をベースにした、日本の江戸時代の経済です。もともと経済は「世をおさめ、民を救う」(經世済民)の略ですね。それがどうなったかという、どんどん「金儲けのための金儲け」になり「何のために儲けるか」という一番大切な理念が失われてきました。その象徴が、金融工学だと思います。ハーバード大学の秀才を中心にどうしたら儲かるかという仕組みを作りそれを投機に使いました。サブプライムローンの仕組みは金融工学がベースだと聞いていますが、結局破綻し、それが引き金でリーマンショックに至りました。何が間違っているかという、道徳がそこにはありません。二宮尊徳がすごいと思うのは、まず人のために何かをやる。つまり幸福を何に求めているかという、自分ではないのです。他人が先にある。「他人が幸せになることによってそれに役立った自分が幸せを感じる」ということですね。孔子流に言えば「恕の精神」(相手を思う心。「己の欲せざることを人に施すなかれ」)ですかね。これが人間として正しいことで、仏教はじめほとんどの宗教が説く、共通の考えですね。松下幸之助氏とか稲森和夫氏も同じことを言っていますね。稲盛会長がJALの再建を任せ、経常収支が2000億の黒字になり、再上場を果たした時、新聞紙上で、「私は職員に三つのことを常に口を酸っぱくして言っていた」と語っていました。それは、①人として正しいことをやってほしい②少しずつ積み上げてやってほしい③コスト意識を持ってほしい。この三つだそうです。①はまさに「義」です。②は、二宮尊徳がよくいっている「積小為大」ということです。③は当然のことですね。

よく考えてみると資本主義自体が本来は利益追求が主ではなかったですね。マックス・ヴェーバーが「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」で書いていますね。それは、プロテスタントの禁欲精神が資本主義の倫理だという主張ですね。プロテスタンティズムでは「禁欲こそが美德」ですから、遊興に走らずひたすら仕事に没頭する。仕事こそが神によって与えられた天職(Calling)だという考えです。脇目も振らず働きますから「結果として利潤」が出ます。それを蓄積して投資に回す。このメカニズムで自然に資本主義は回転していきます。この「結果としての利潤」がポイントです。

貧しかったベンジャミン・フランクリンは、時間を惜しんで働き、アメリカ合衆国の建国の一人と讃えられる政治家になりました。まさに「Time is Money」ですね。一時期、米国がモノづくりの精神を忘れ経済が停滞した時期がありました。その時「Poor Richard Legacy」という題の本が出たことを思い出します。リチャードとは、フランクリンが小さい時に呼ばれていた名前です。つまり「米国よ、リチャードに立ち返れ」という呼びかけなのです。

私達も、今こそ原点に立ち返る必要があります。それには、過去を知ることが極めて大切だと思います。

過去から学ぶことですね。まさに孔子の「温故知新」です。

●先生は、名古屋市で交通局長を経験され、交通事業の黒字化を達成したとお伺いしています。現在は都市経営論を講義されていますが、経営の基本は何だと考えてお見えですか？

(経営の原点～「入るを量りて、出を制する」)

「入るを量りて、出を制する」これが経営の原点だと私は考えています。ドラッカーの経営学もいいですが、日本には学ぶべき多くの先輩がいます。そこに光を当てるのが大切だと思います。

江戸時代からの日本の「先人・偉人の経営の神髄」を学べば経営はできます。交通局長に就任した時、万年赤字の交通局の経営再建を任されました。財政健全化計画を策定しましたが、その際念頭に置いていたのが「量入制出」です。つまりどういうことかという、まず、収入を固く、固く見積もります。だいたい役人は見積もりがアバウトです。これは基本的に自分の金ではないからです。自分の金ならもっと真剣に考えるでしょう。こう言う言葉があります。「人間は他人の金を使う時には自分の金を使うほど賢明にはなれない」。計画を作れば、仕事の半分は終わったという気分が蔓延しているように思えます。だから、まず整合性のとれた「立派な計画」を作ろうとします。計画を実行した結果よりも計画自体が目的化します。どうしても期待値が入り甘くなりがちです。収入を見積もったら次に支出をそれに合わせますね。そうすると収入が甘ければ支出も甘くなります。大事なのはまず「収入の見積もりを固く固く慎重に行う」ことです。これが、「入るを量る」の本当の意味です。

二宮尊徳のやり方を見ていると大変勉強になります。彼は、小田原藩主にあるところの再建を頼まれます。そういった場合には、彼は必ずまず固辞します。容易には受けません。藩主にいかに困難か、腹をくくらせなければならぬからです。「お前しかおらんと」いくら言われても、頑として首を縦にふりません。しかし、藩主の命ですから無碍にもできません。そこでまず「現地を調査させてほしい」と頼みます。そして、1年位かけて現地を詳細に調査します。まず実高はどれくらいか正確に調べます。その上で荒地を開墾した場合、どれくらいなら収穫可能か割り出します。必ず自分の足で見て回ります。そうするとまず実高がどれくらい石高と違うかがわかります。幕府が検地を行い石高を決めていますから、その石高にあった生活をするを武士は余儀なくされます。石高が多ければ家臣の数も多くなります。江戸時代の武士は格式を重んじますから「身分費用」という支出がかなり多いので、石高が多ければそれに見合う付き合いが必要になり支出も増えます。ところが財政再建が必要な藩は農村も荒廃して、逃散する農民もいますから検地通りの収穫はあがりません。公称4000石とするとせいぜい2000石が実高ということになります。それをまず正確に把握します。次に荒地を検分し、どれくらいなら収穫可能か固く算定します。それが収入のすべてです。現地調査の結果を、証拠を揃え、調査報告書にまとめ藩主に見せます。「どうしても私にやれというならこの収入に見合うように支出を削っていただきますがよろしいですか。それができなければ引き受けることはできません」とやるのです。一番困難なのが、支出の削減です。武士は何より格式を重んじます。しかし、実際の収入に合う節約をするとなると、今でいう藩士の給与カットのみならず、大奥の女性の着物や食事の節約など「生活水準の切り下げ」が必須になります。これが実は一番難しいのです。「武士は食わねど高楊枝」という言葉がありますね。武士は「見栄張です」。藩主と二宮は理解していても他の人は誰も状況が理解できません。「量入制出」の一番のねらいは実は、「制出」にあると私

は考えています。

上杉鷹山公は次のように言っています。「明らかに無駄な出費が家を減ぼすのではなく、少しづつ積み上げられた常識的なライフスタイルが家を減ぼすのだ」と。まさに無駄遣いの正体は不必要な出費ではなく私達が普通の生活で当たり前だと思っている高い水準のライフスタイルそのものにあるということですね。それゆえに理解してもらうことは困難なのです。それでもそれをやらなければ財政再建はできません。つまりは「意識改革」が財政再建の要なのです。節約は上から言われていやいややっていたのではダメです。自覚が必要なのです。

京セラの稲盛会長がテレビで記者に「会長財政再建の秘訣はなんですか」と聞かれて一言「入るを量りて、出を制する」と言っていました。稲盛会長も意識改革が一番困難だったようで、前に述べた3項目を毎日言っていたそうですがJALの職員は全くびんとこないでまるで官僚より官僚的だったと述懐していました。ところがある時一人の幹部が「会長の言っていた意味がやっとわかりました」と言ってきたそうです。それから改革は進展していったそうです。まるで「百匹目の猿」だと私は思いましたね。二宮の固く固く、収入を見積もるやり方は、真のねらいは、「支出をそれに合わせて削減するためのもの」だと私は考えています。だから実際に、収入に合わせて支出を抑えることさえうまくいけばそれなりの利益が上がります。その一部を貯蓄に回し、残りを新規投資に回します。これは資本主義の「資本蓄積のメカニズム」ですね。とにかく実行責任者（二宮）は農民出身です。しかも藩主の意を直接受けて執行するわけですから、家老など重臣は蚊帳の外ですね。相当抵抗も強く、暗殺の危険もあったそうです。江戸時代の財政改革者は命を奪われる危険の中で相当の覚悟をもって財政改革に取り組みました。果たして今の日本の財政改革者のそのような覚悟はあるでしょうか。

●現在名古屋市では、新たな基本計画の策定作業が進んでいますが、職員の方にこんなことに留意してやってほしいということがありましたら、お教えてください。

(総合計画策定にあたっての留意事項)

私が今一番気になっているのは、これは、名古屋市役所だけの問題ではありませんが、日本の社会の中に蔓延する「セクショナリズム」です。ものすごくこれが気になっていて、横糸を通すということをもっとやらないといけないと強く思いますね。東大の中根千枝さんが指摘した「タテ社会」があらゆる分野に蔓延しています。学界、医学、行政などなどすべての分野においてですね。セクショナリズムというと行政の専売特許のように思われますが日本社会のいたるところに根強く存在しています。第2次世界対戦の時の陸軍、海軍の確執と全く同じ構図ですね。原発事故の際のスピーディの対応を見てもそうですね。もっと横の連携がとれていたらと悔やまれますね。

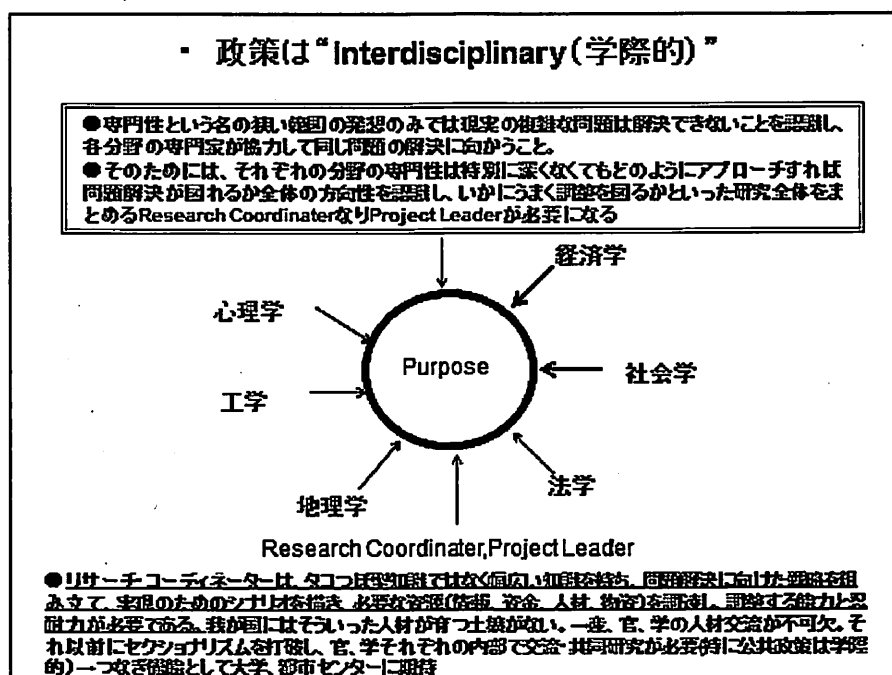
名古屋市役所も全くそうなのです。横の調整機能が上手くいっていませんね。これをどうするか真剣に考えないといけません。もともと市町村が中央政府と異なり一番面白く、市民のためにやろうと思えばできる最大のポイントは「目に見える規模」つまり可視的なことなのです。どういうことかと言えば規模が適正なので、全体が掌握し易く、政策の総合性を図ることが可能ということなのです。つまり「総合行政」が可能なのです。これは政府では市町村しかありません。折角、総合行政が可能なのに、つまらないセクショナリズムがはびこり政策の統合化が阻害されるのは悲しいし、市民のためになりませんね。

(政策研究には学際的アプローチが不可欠)

総合行政を行おうとする場合に大切な事は「学際的に考える」ことです。調整という意味も実はこれなのです。「都市問題」というのは実に複雑です。都市という空間の中で時間軸を伴いながら実に複雑な利害を伴って現れます。これを解決しようとする、ひとつの分野ではとても無理で、この問題を解決する処方箋は「学際的なアプローチ」しかありません。政策の立案は学際的なアプローチからしかできません。専門性という名の狭い範囲からの発想ではとても現実の複雑な問題は解決できません。それを十分認識して各分野の専門家が協力して問題解決に立ち向かうことが必要です。まさに学際的 (Interdisciplinary) とはその名の通り discipline の垣根 (際) を越えて交わることです。これはセクショナリズムの対極にある考えです。そのためには、それぞれの分野の専門性は特別に深くなくてもどのようにアプローチすれば問題解決が図られるか全体の方向性を認識し、いかにうまく調整を図るかという研究全体をまとめる Research Coordinator とか Project Leader が必要になります。(図 25)

そのためには「タコ壺型知識」ではなく幅広い知見を持ち、問題解決に向けた戦略を組み立て、実現のためのシナリオを描き、必要な資源 (情報、資金、人材、物資) を調達し、調整する能力と忍耐力を持った人材が必要になります。日本ではこういった人材を育てる風土が余りありません。唯一期待されたのが「シンクタンク」ですが、我が国のように人材の流動性が低く、知的生産物に対する評価の低い国ではなかなか当初の意図通りにはシンクタンクが育っていません。米国ではシンクタンクは「第4権力」と言われるように力を持っています。政策立案者である行政 (Beurocracy: 官僚) は、具体的な政策立案には長けているが、専門性が低い。一方、学界 (Academism) は、専門性は高いが政策立案経験がない。そこで両者を橋渡しするためにシンクタンクというものが、考えられたのです。米国では労働市場の流動性が高く、両者の交流が活発であるため両方に長けた人材が育っています。そういった意味でも産、官、学の人

図 25



材交流は不可欠だと思います。でもまずその前に、セクショナリズムを打破して官、学内部での交流、共同研究が必要ですね。そのためにも都市センターや市立大学の役割に期待したいですね。

(今だからこそ、人材育成を)

こういった時期だからこそ名古屋市は人材育成に取り組むべきだと思います。人材育成は将来に対する投資です。いまかりに閉塞状況にあるとするなら、将来の名古屋市のために今こそ有為な人材を育てることが大切です。財源難でもそんなに予算はいりません。予算なしにいくらでもできます。

江戸時代の各藩の財政改革を調べてみると面白いのですが、財政難で改革をやろうとする藩ほど人材育成に力を注ぎ藩校を充実しています。財政難にもかかわらずです。有名になったのは小泉元総理が引用した「米百表」の話です。これは、長岡藩の河井継之助が北越戦争で敗れ、長岡藩は7万4000石が2万4000石と、実に60%の減知をうけました。窮乏した本藩を援助しようと長岡藩の支藩三根山藩から米百表が贈られてきます。藩士は喜びましたが長岡藩の大参事小林虎三郎が「百表の米も食べばたちまちなくなるが、教育にあてれば明日の一万、百万表になる」と主張しそれを実行した話です。

外にもほとんどの先覚者は藩の教育に力を入れています。上杉鷹山公は藩校「^{こつじょうかん}興譲館」を再興し、細井平洲先生を招聘しています。また、備中松山藩の山田方谷^{ほうこく}は藩校「有終館」の校長でありながら農民や女性の教育の必要性を感じ、私塾「^{ぎゅうじょうくしや}牛籠舎」を設立し教育に力を入れました。山田方谷は農民の出身ながら松山藩主板倉勝清に信頼され、板倉が15代将軍慶喜の老中首座になると、藩主から藩の運営一切を任され、財政改革を成し遂げるとともに藩主のブレインとして国政にまで相談に乗った偉人です。明治維新政府は大蔵大臣就任を要請しますが断り教育に力を注ぎました。岡山藩の池田光政が津田永忠に命じ開校した日本最初の庶民の学校「^{しずたにがっこう}閑谷学校」が明治に入ってその再興をはかった折、山田方谷を迎え、新たに閑谷学舎として再興されました。すべての依頼を断り隠棲していた方谷も池田公が心血を注いだ閑谷学校の再興には意欲的であったと言われています。

人材育成を名古屋市が行う際に考えてほしいのは、次の点です。①団塊の世代が完全年金世代になり、体力と時間のあるここ5年が勝負。経験豊かな団塊の世代をボランティアとして活用する。時間外にサロンを開催し、その経験を伝え議論する。②職員同士の横の交流を図るために、人事課がオープンサロン出席者の中からリーダーとなりうる人材を見つけ、色々な研究会を発足させる。この場合立ち上がりは人事課がインキュベーターとしての機能を果たし、スタートしたらそれぞれに任せる。(今の職員は自発的に組織化することが苦手なので人事課が立ち上がりをサポートするのがよいと考えるからです。)③職員の発表の場を設け(ネット上でも可)研究発表や提言を積極的に受け付ける。審査して優秀なものには何らかのインセンティブを設ける。(かつては職員機関誌「シャチ」がありそこへ自由に投稿ができたことは先にお話ししましたね。)④他の自治体の職員などとの交流を促進する。⑤かつて実施していた海外派遣研修をコストを抑えながら実施することを検討する。⑥名古屋市立大学や都市センターとの連携を強め、お互いのできることを検討する。「人材は人財」です。名古屋市の未来を考えれば人材育成は極めて大事だと思いますね。

●名古屋の将来についてどの様に考えて見えますか？

(名古屋市の将来について)

では、将来の名古屋の話をしてしまおう。まず街づくりの基本は「近き者喜ばば、遠き者来る」です。生活の質を高めることが大切です。私は「住みやすさの再構築」と言っていますが、名古屋というのは住みやすく、生活の質は高いところです。しかし、だからいつまでもそうかという、時代とともに変化してきます。だから常に生活の質がどうなのかフォローしていかなくてはなりません。私が企画部長として新世紀計画を策定していた頃、自分で作業したことがあります。当時は宮沢喜一総理が「生活大国論」を出して、日本国民が年収の5倍で持ち家が手に入るようにするのだと言っていました。その時、私は名古屋ではどうなっているか分析したことがありました。結果はすでに「生活大市」でした。その後はどうか分析がないのでわかりませんが、常に生活の質についてはフォローし、落ちてきている事項については強化することが大切です。

その時のさわりだけお話ししましょう。

(CIAMに基づいて分析)

基本的に都市というものはどういった要素を満たせば望ましい都市と言えるのでしょうか。その手掛かりを「アテネ憲章」に求めました。これは、1933年アテネで開かれたCIAM(国際建築家会議)第4回の会議の成果をまとめたもので、機械文明下における都市計画の憲章として、その後、長く規範とされてきたものです。

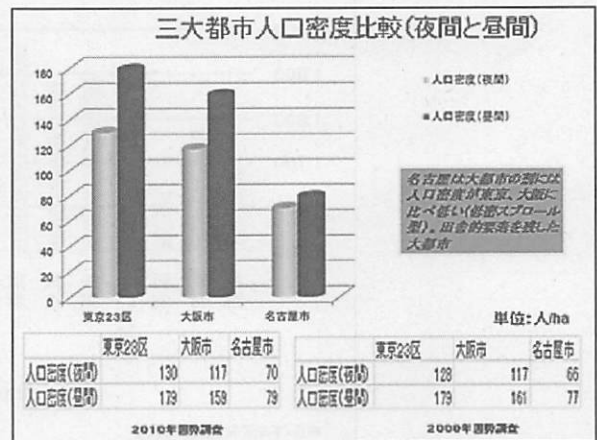
この会議において、人間にとって本質的な喜びであり、都市にとって不可欠な要素は、「太陽・広がり・緑」の三つであり、これらが都市計画の基礎材料であるという仮定が認められたのです。アテネ憲章の中心人物であるル・コルビジェは次の様に述べています。「広がりから受ける感じは、心理的生理的なものであって、道路の狭さや押し詰まった中庭のもつ雰囲気は肉体を損なうとともに精神をも殺すものだ」と。この基準からすれば、「空が高い」と言われる名古屋市は、まさに、都市計画の模範都市と言えると思います。

アテネ憲章は、以上のことを前提として、政策目標として、「住居(住む)、職場(働く)、余暇(憩う)と交通(移動する)」の四つを掲げています。ちなみに、この政策目標は西尾市長の時の基本計画「住みたくなるまちの建設をめざして」の土地利用の基本原則として採用され「すむ、はたらく、いこう」とされています。

そこで、まず、広がりからみてみました。これはコルビジェの言う「空間的なゆとり」と考えていいですね。そこで、3大都市の人口及び人口密度をみてみました。結果は現在のデータと変わりません。

(図26)少なくとも東京、大阪に比べ、名古屋は人口密度が半分程で空間的にはゆとりがあると考えていいと思います。(このことは私達の日常的な感覚

図 26



と一致していますね。東京、大阪へ出張などで出かけてみると少なくとも名古屋よりは人が多く出ていて混雑している印象を受けます。また、広がりを示す今ひとつの指標として道路についてみてみることにしました。市（区）域内に占める道路面積を示す道路率でみる限り、名古屋市は東京、大阪に比べ、少し上回っている程度でそれほどの差はありませんが、人口一人当たりでみてみますと、東京、大阪のほぼ倍近く、また、昼間の状態ではそれ以上ということで、道路が多く、空が高いという実感を数値が裏付けているという結果でした。現在のデータを見てみても同じ結果ですね。（図 27）

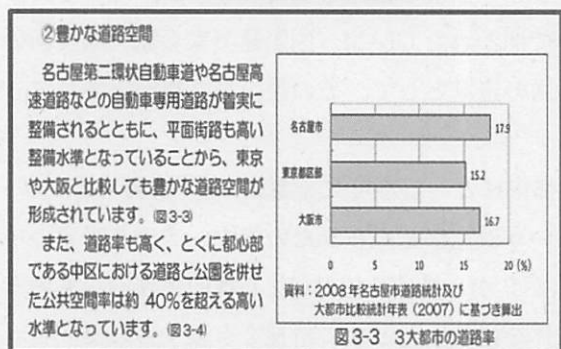
次に、太陽を見てみました。これは日照時間でみるのが妥当であろうと考えました。結果はこれも名古屋が上位にありました。これも現在の数字がありますので参考に掲げておきましょう。（図 28）最後に緑をみてみました。これについては、とりあえず都市公園面積を比較してみました。結果は、名古屋市は緑の面でも大いに健闘しているということでした。しかし、市民の実感として緑の多い都市という実感が果たしてあるのでしょうか。疑問ですね。これには色々な原因が考えられます。まず、都市公園以外の緑地

がカウントされていないこと。また、名古屋市の場合、土壌が良くないため、樹木の成育が他都市に比べ悪いこと。更に、地形が平坦で町割りが直線的であるため、どうしても緑視率が低い印象を与えがちであることなどです。従って、実際の印象に比べ、データでみる限り、名古屋市としては結構がんばっているとは言えるのではないかと思います。四つの政策目標については時間の都合で省略しますが、定期的に点検し、その状況を見ながら政策を打っていくことが必要でしょうね。

一言付け加えますと、地形が平坦であることは名

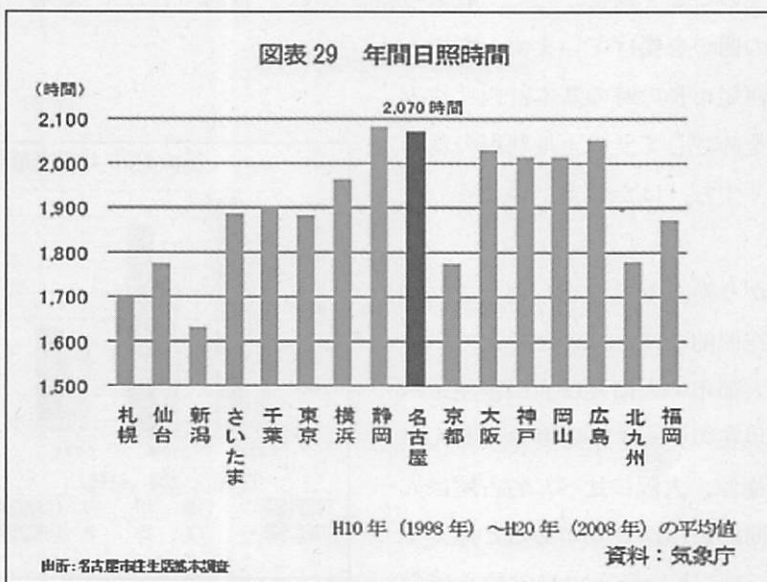
図 27

名古屋市の道路空間



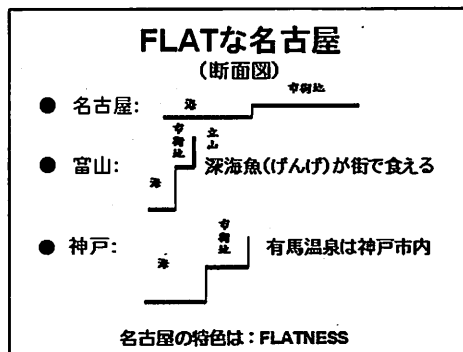
出所：名古屋新交通戦略推進プラン

図 28 年間日照時間



古屋の大きな特色で、この「Flatness」は名古屋を特徴づけるキーワードのひとつなのです。他都市と比較して見るとよくわかります。参考に富山、神戸を見てください。(図 29)

図 29



●長期計画の中でこの点をもっと検討して欲しいというものはありますか？

(女性が働きやすい名古屋を)

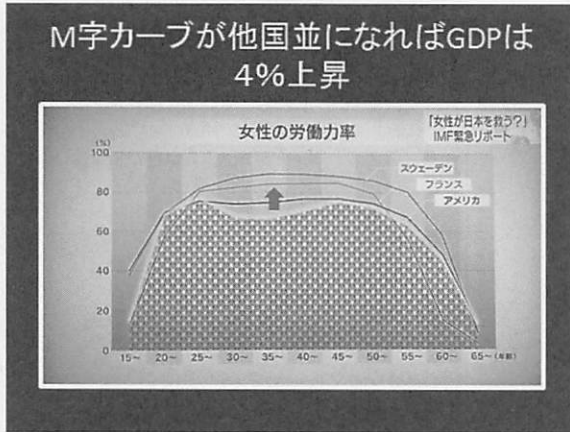
分野ごとに話をするとあまりに多岐にわたりますので各論は別の機会にしますが、ひとつだけ言っておきますと、女性を前面に出すことがいいと思いますね。これは総合計画の柱のひとつ

つになりますし、キャッチとしても「女性が働きやすい名古屋」というのがいいのではと思います。というのは、かねて私は思っていたのですが、「人口は国力」なのです。人口のものは女性の出産です。ところが女性に産めよ増やせよとは言えません。そこで「子育て」ということになっていますが、ちょっと違うという気がしています。子育ても大切ですが、その前に「女性が暮らしやすい、働きやすい」ということが前提になって子育てだと思えますね。もちろん市側も分かっているところがジレンマですね。大きいのは雇用の問題ですね。どうして女性の子供をつくらないのか。晩婚化、未婚化の中で、本当は子供が欲しいと思っているのに、つukれない客観的な条件ってあるわけですね。それは、ひとつは教育費が高過ぎる、それから住宅が非常に狭い。それから一旦就職しても、子供ができれば、6割が辞めざるを得ないわけですね。再就職ができない。つまりそういう「雇用環境が大きい」ですね。そういう制約の中で、女性が働けない。しかも、これに男性の労働条件が加わります。男性は残業ばかりで、帰宅して家事を手伝おうにも疲れてできない。いきおい家事の負担は女性の肩に。こういった構図があります。これがまさに「ワーク・ライフ・バランス」の問題ですね。オランダみたいに、例えば夫婦共働きで1週間に3日男性が働いて、女性が3日働いて両方合わせると今までの収入と同じになるといった、働き方に踏み込んだ抜本的な政策をとらないと根本的な解決は難しいですね。ところが、これが名古屋市でできるかということ、これがなかなか難しいのです。それは、労働行政に関しては大都市でも市には権限がなく、県の権限だからです。県でも限界があります。雇用制度に踏み込むとなると民間企業に大きな影響が及びますから、結局、国の政策として対応しないと実現できません。従って、名古屋市でできる施策で頑張るしかないということになります。名古屋市で何ができるかということ、待機児童ゼロなんかは、できるのですね。4月に零になるのを期待しています。

子育てだけではありません。日本社会が超高齢社会に入り生産年齢人口が2050年には、半分位になると言われています。今後のGDPを考えれば労働力不足を解消するには高齢者と女性の労働参加は不可欠ですね。一昨年でしたかIMFが緊急レポートを出しましたね。あのレポートによると日本独特のM字カーブ(女性の年齢別の就業率を曲線にすると日本は出産後の退職が6割近いため、いったん就業率が落ちて子育てが終了した年齢位からまた上がるためグラフがM字型になること)の真ん中を上げると、つまりM字でなくすと、4パーセント日本のGDPが上がるということです。(図 30)

女性に働いてもらうということは、ものすごくGDPにも貢献するし、いいわけですね。だから女性が

図 30



働きやすい環境をどこまでつくって、どんどん働いてもらうかというのはけっこう大きいこれからの問題になると思います。ただ、その際大きな障害があります。それは中高年男性の意識です。この意識が変わらないと根本的には変わりません。特に政治家の意識が変わってほしいですね。なぜ政治家かという、もちろん制度を最終的に決めるのは議会の決定だからという理由もありますが、今の選挙制度も大きく関わっている気がします。選挙の際には、代議士の奥さんは結構大変なのです。本人の代わりに後援会を回ったり、挨拶に行ったりと重要な役割を果たしています。パートナーの出来不出来で当落

が決まるとさえ言われています。直接聞いたことはありませんが、おそらく選挙をする人はパートナーが専業主婦でいてほしいと望んでいるのではないかと推測しています。「政治家ほど専業主婦の労働力の価値を認識している人はいない」と私は思います。専業主婦にもそれに見合う労働の対価があって当然であるという意見がありますが、その背景にはこういった事情があるのではと推測しています。

●確かに女性問題は重要だと思いますが、この問題は他の政策に大きく関わってくるのですか？ 政治家の意識と言う発言も気になります。その辺りをもう少し話し頂けませんか？

(家族で支えるのは日本の美風)

この考えの根底には、もっと深い日本人のメンタリティが潜んでいると思っています。それは「家族主義」に対する郷愁です。個人ではなく「家」中心の考え方です。「家族を基本単位として家族で支えるのが日本の美風」という考え方です。

これは伝統的に自民党の根底にある意識だと思います。昭和53年の「厚生白書」では「同居は福祉の含み資産」と位置付けています。この発想は日本の福祉は同居家族で支えるということですね。それはとりもなおさず女性を家庭に縛ることを前提としています。当時の発想は、女性が社会に進出することは、家庭が担保していた安全保障機能を弱体化させるという考え方ですね。従って「3世代同居が10パーセント以下が望ましいとは思わない」(橋本龍太郎氏)という発言になります。

日本の福祉をどうしようかという中で、スウェーデン型の「高福祉、高負担」でいくのか、米国型の全部自己責任でいく「低負担、低福祉」でいくのかという議論がありました。ご承知のように日本は「中福祉、中負担」で行くということになりました。これが「日本型福祉論」ですね。この基本的な考え方というのは、日本には伝統的に家族というものがあって、同居制度という美風がある。これを大事にしなければならないということですね。家族で支えると言っても現実には、女性を専業主婦にして、家に閉じ込めることによって、嫁が子供を見て、親を見ると。だから政府は国費を使うことなく経費が安くなるという発想なのです。

この遠因は村落共同体にあると、私は考えています。先ほどの話(修身、齐家、治国、平天下)を引用

しますと、齊家から始まり、修身がない。もちろん、儒教教育中心でしたから、まず自分の身を修める道徳教育は現在以上です。ここで言いたいことは、西欧の個人主義がないという意味です。西欧社会では個人の自立に重点を置き「個」を大事にします。個人主義は利己主義とは違います。個人 (Individual) とは、divide できない (in) という意味です。「共同体との関係を密接に保ちながらも自立している」という意味ですね。日本社会は「共同体と融合」してしまっていますから、この「自立」がありません。日本で「個人主義」というとエゴイズム (利己主義) と同じに考えられているようですね。この個人が存在しないために、市民社会も市民も存在しません。

この家族主義の考え方は、いたるところに浸透しています。誤解があるといけませんから言っておきますが、私は家族主義を否定しているわけではありません。現実はそのように進んでいないのに、そういった考えに固執し過ぎるのは如何なものかと思っただけです。女性の社会進出はもはや止めることはできませんし、止めることがいいことでもありません。それを家庭に閉じ込めようとするなら、それは時代錯誤ですね。結局、現実から目を背け、家族主義の郷愁に固執した結果、政策が後手に回ってしまったと言っても過言ではないと思います。その結果、GDP まで低下させてきたように私には思えます。

明治政府は、江戸時代からの村落共同体をベースに地方制度を構築しました。村落には家長がありますが、日本の国全体からみれば「天皇を家長とした国がひとつの家族」と考える家族主義ですね。さらにそれに宗教を結び付けました。天皇を神と考える国家神道を提唱し、廃仏毀釈と神社の統合を進めました。日本では、企業に入っても社員は家族と考えている企業が多いですね。こう言った家族主義的な考え方が、日本全体を支配していると思います。

(家族主義的地方制度)

地方制度というのも実はそこから構成されています。日本最初の地方制度は (自治法) は、明治 21 年欽定憲法 (大日本帝国憲法) 制定の 1 年前に制定されています。普通は憲法が先か、あるいは同時に制定されます。これについては色々議論がありましたが、結局当時は自由民権運動の嵐が吹きすさんでいましたから、地方を抑えないと国家の安定が図られないということでまず地方自治制度を先に発足させました。日本の地方制度は、明治 22 年頃には確立すると考えていいと思います。これは先進国に比べてもそんなに遅いものではありません。むしろ、プロシャにおいて同時並行で検討されていた制度を取り入れており、当時としては最新の制度だったと言われています。少なくとも、アジアにおいては、近代地方制度を整備した唯一の国でした。

日本がこのように早期に地方自治制度を整えることができたのは「自由民権運動」のお蔭だと私は考えています。自由民権運動は、地方自治を掲げていました。それは、地方自治の確立を要求する運動でもあったのです。当時、作られつつあった地方民会 (県会、区会、町村会) を拠点として展開され、その地方民会を地方議会として制度化し、議員公選制を実現し、民会に対する中央政府の干渉や監督を排除し、地方住民の財政負担の軽減を求めています。板垣退助に私淑していた植木枝盛は私擬憲法草案の中で地方自治に連邦制を取り入れています。国というものは小さければ小さいほど民主主義が徹底できるとして全国を 70 州に分け、それぞれに地方自治を行おうとしていました。その憲法草案第 9 条には「日本連邦は、日本各州に対しその州の自由独立を保護するを主とすべし」とあります。極めて斬新ですね。ところが面白

いのは、こういった人権家も家に帰れば「家父長様」だったようで、威張っていたそうです。これまで見てきたヨーロッパのように個人をベースに考えられた人権ではなかったので、その点で限界がありました。裏返せば、我が国における「家父長制」はかくも強固とも言えると思います。

(隣保共同の精神)

「家父長制」は、町村を「家」に擬人化し、その「隣保共同の精神」を自治とみなしたものでした。この隣保共同の精神という観念は、しぶとく現在でも残っています。災害対策基本法という法律がありますが、その第5条2項に自主防災組織という規定があります。そこには「住民の隣保共同の精神に基づく自発的な防災組織」とあります。地域社会の伝統的秩序の維持こそが眼目でした。そのために、家族制度の延長にある村落共同体に淳風美俗を求めました。自治と言ってもヨーロッパの自治とは異なり、極めて日本的なものでした。根底に流れている思想は、市町村という基礎自治体においては法律や制度でがんじがらめに縛るのではなく、一家の団欒のごとく仲良くするのが本義という考え方です。まさに「正義より調和を重視した日本的な制度」でした。

それは、明治初頭の改革の失敗に懲り、その反省に基づいて作られたものだからです。明治政府は、府、藩、県といった上級単位は厳重な中央政府の監督下に置きましたが、市町村は明治4年に「戸籍法」を制定し、旧来の町村の区域を無視して「大区、小区制」を敷きました。これが不満の種になり、各地で反発が occurred。政権内部からも批判の声が上がりました。あまりに反対の声が強いので、明治11年に「郡区町村編成法」という新たな法律を制定し、大区、小区制を廃止し、元に戻すことにしました。内務卿大久保は、太政大臣三条実美にあてた上申書の中で「地方の区画のごときは、いかなる美法良政たるも、固有の慣習によらずして新規のことを起こすときはその形美なるもその実益なし」と書いています。明治政府の幹部はこの失敗から、我が国の歴史的に形成されてきた伝統、慣習を守ることが秩序の維持にとっていかに大切か身に染み込んだのだと思います。

中央政府は内務大臣の山県有朋始め自由民権運動に強い危機感を持っていました。すべては天皇制の維持（国体の護持）が至上命題です。天皇制を維持するために地方をどうするかを考えるという発想です。つまり、山県が考えた地方制度は「国家統制の手段」であったのです。明治憲法制定の主役である伊藤博文は、憲法には基本的な「支柱（しんばしら）」が必要だと考えた末、憲法の「支柱」を「天皇」におきました。あれこれ考え、儒教も衰退気味、仏教もダメという中で「万世一系の天皇」に目をつけ、天皇の君権を軸に憲法を組み立てました。天皇を頂点とした、「国家一家主義」ですね。そのベースは村落共同体で、その固有の慣習を尊重し、町村の支配者である旧地主に参政権を与え、地方制度を支える役割としました。国体という極めてイデオロギッシュなものと古来からの淳風美俗という情緒的なものを一体化した極めて日本的と言える制度ですね。

当時、地方は騒然として、自由民権運動を抑えないことには天皇制が危ないという危機感が政府にありました。そこで地方の問題が天皇まで飛び火しないために地方の番人（防波堤）として「知事」を考えました。地方からは、地方の首長や議員の公選要求が、どんどん出ていました。しかし、政府として、絶対に譲れない最後の砦は「知事公選」でした。結局知事の官選は終戦まで存続しました。そのかわりに、地方には天皇制を揺るがさない範囲での自由度を認め、いわば不満を解消するガス抜きを行いました。結局

公選は敗戦まで実現しませんでした。それでも、内務省は強く抵抗しましたが、GHQの要請でしぶしぶ実現されました。それでやっと今の公選になったわけです。これくらい、頑なに国体を守るという意識が強いですね。戦後変わったかという、多少は変化しましたが以前根底にその意識があるような気がします。この部分は日本人のメンタリティを形成していますから、かなり意識して議論しなければいけないと思います。でもこういった根源的な議論はほとんど聞いたことがありません。私は各種制度や政策の根底に無意識のうちに脈々と流れる日本人の気質を考えないと本質に迫れないと考えています。

(女性の逆襲)

現在の福祉を取り巻く問題は「女性の逆襲」のような気が、私にはしています。現実には、核家族どころか世帯の分化はどんどん進んでいますね。女性の社会進出を止めることはできません。「男女共同参画」は法律になりました。こういう現実の流れを無視して、日本型福祉論というのを唱えて、女性を家庭の中に閉じ込めて、それを含み資産としてコストを安くして、日本型福祉と言うのは、やはり時代錯誤ですね。もちろん「今は違う」という反論があるでしょう。しかし、本音はどうですかと言いたいですね。だから美風は美風でいいのですが、時代はどんどん変わっているわけですから、ここをどう見るかということですね。

せめて名古屋くらいはその辺をよくよく考えて、やはり「女性が働きやすい都市」というのを理念として掲げてみてはどうかと言うのが私の真意です。

●なるほど、日本における女性問題をご指摘のように、日本社会の縮図なのですね。よくわかりました。女性以外に何か注目すべき点がありますか？

(観光に力点を)

都市の魅力づくりでひとつ提案しておきたいのは、観光です。観光といっても、今までの自然観光や都市観光、産業観光というのではなく目に見えないものに注目してみてもどうかということです。これまであまり意識してこなかった視点ですね。この点に気づかされたのは、国の「クールジャパン戦略」ですね。これを「クール名古屋」でやってみてはどうかと思っているのです。日本人はどうも自分達のやっていることが外からどの様に評価されているか、関心が少ないと思います。日本人は、何事でも、とにかく工夫し、改善し、どうしたらより良いものができるか必死で努力します。やはり根底に儒教精神が流れているような気がします。一旦、外国で評価されると国内でも評価されるということが多いですね。

名古屋というところは、極めて日本的で日本の縮図だと私は思っています。作家の村上春樹氏が最近、名古屋を舞台にした小説「色彩を持たない多崎つくると彼の巡礼の年」という小説を書いています。彼は「名古屋ファンダメンタリズム」といっていますが、どこか名古屋には強靱な原理主義的なところがありますね。

名古屋人が気付かない名古屋のクール探しをやってはどうかという提案です。名古屋という足元を見ても、いいところがいっぱいあるのですよ。ところが「観光戦略ビジョン」の策定の際のアンケート結果を見ると名古屋で一番人気は「名古屋飯」なんですね。来訪者のアンケートでもやはり名古屋飯が一番。ナンバーワンが名古屋飯ってなんか寂しい気がしませんか。クールジャパン戦略で一番良かったのは日本

人自身が自分達の足元にこんなに国際的に評価されていたものがたくさんあったのだということに気づかされたことです。日本人が当然と思って何も感じなかったことが実は大変評判がいいということに気が付いたことです。例えば、「おもてなし」。すごく外国人は、感動しますね。でも日本人は当たり前だと思っています。今、東京でも渋谷が外国人に人気のスポットのひとつです。どこかというところと最近できた東急の「ヒカリエ」ではなく渋谷のハチ公前の「スクランブル交差点」だということから驚きです。カメラを抱えて写真を撮っています。確かにスクランブル交差点は日本人の発明だそうですが興味はそこにあるのではなく、あれほど多くの人が一斉にぶつからずに整然と渡っている姿が珍しいということだそうです。日本人にとっては当たり前ですね。もっと面白いのは、新幹線の新富士という駅がありますが、ここのホームが観光資源になっているそうです。何を見に行くと思いますか。列車が目の前1mを時速300キロ近いスピードで通り過ぎるのが、面白いそうです。

日本人には、儒教の「恕の精神」が浸透しているのか、自分が不快なことを人にしないと考えているように思えます。例えば、おもてなし。これは英語では hospitality です。しかし、英語の hospitality は、friendly の意味が強いようで、自宅に招待してもお客様扱いするより、自由に冷蔵庫も開けていいよ、と言ったように家族同様の扱いが hospitality だそうです。日本人は前日から掃除をしたり、布団を干したり粗相のないよう全力で準備します。お客様扱いされると、なんだかよそよそしいという意見も聞かれますね。ホテルでも同じで外国人に一番人気のホテルは、カプセルホテルだそうです。日本国内では京都の3千円台のカプセルが一番人気。浅草の何段ベッドかの旅館も大変な人気だそうです。宿の主人も含め色々な人と交流できるのが魅力だそうです。普通の旅館ではご主人も中居さんも交流なんぞは全く念頭にありません。ところが浅草の旅館はそういうコンセプトでやっています。色々質問すると教えてくれる。食堂へ行くと、みんながいて、宿屋のおばちゃんもいて、みんながワーワーやっている。この雰囲気は外国人は味わいたいと思って来ているのに、普通の宿やホテルでは全然やってくれない。どうも価値観に大きなギャップがありますね。

やはり日本はこれまで侵略されたことがなく、国民もほぼホモジニアスですから、価値観が画一的ですね。だから「以心伝心」という言葉ができるくらい「言葉に出さなくても分かっています」。こうなりますとコミュニケーションや議論は苦手になりますね。多様な価値観とぶつかった経験が少なく、価値の多様性が理解できないことは、グローバリゼーションの時代においては危険です。同じ価値観で内に固まると強靱になりますから、外に対しては排他的、攻撃的になります。寛容性、柔軟性に欠けますね。最近の国際関係を見るとその危険を強く感じます。それだけに外国人の目線を通して自分達のことを再認識することは重要だと思います。どんどん異なる価値観を持つ人を受け入れ、日常的に異文化と交流することが重要ですね。

最近では日本のいいところを発見する番組が多いですね。クールジャパンを筆頭に、ジパング、和風絵本家などなど。それはそれでいいことなのですが、どうも政府の意図が垣間見えて危険ですね。「もっと日本のいいところを発見して、日本を好きになろう」。何か愛国主義を受け付け様とする意図が感じられ危険ですね。よくよく考えてみる必要があります。でも正直興味深い番組が多いですね。

先日の番組では弁当箱を取り上げていました。これは目から鱗でした。パリでものすごい人気だそうです。日本の弁当箱産業は衰退気味でしたが、ネットで販売したら世界的に売れて再生しかかってい

るというのです。よく考えてみると「弁当はフルコース料理」ですね。仏ではランチは2千円台でコースですから順番にできます。ところが弁当は仕切りがあって初めから主食もオードブルも入っています。どれからでも好きに食べられるのも人気ですね。しかも日本食はヘルシー。それに安くて、速く食べられる。弁当箱自体もかわいい。OLが自前の弁当を作って職場で食べるのも人気だそうです。火付けの一つに日本の漫画カフェがあり、そこで弁当が出てきて話題になったそうです。こうなると産業振興にもなります。

この手の話は山ほどあるわけですよ。クール名古屋みたいな団をつくって、名古屋のクールを探しにいく。というのは番組的にも面白いし、そういう番組をつくってもいい。それをやると、何がいいかというと、地域の資源を自分たちで探することができる。職員もね、知らない魅力がいっぱいあるわけですよ、自分の住んでいる地域を回って、こんないいところがあると。それがすごく大事です。街づくりの基本は「地域の資源を再発掘し、それを組み立てる」ことです。外の目を向けてばかりいるのではなく、まず自分の足元を評価することです。果たして、皆さんどれくらい自分の住んでいる地域を知っていますか？「自治とは、自分の足元を評価する心」だと私は考えています。これが自治の精神ですね。

●なるほど「クール名古屋」は面白そうですね。ところで3.11から3年経ちました。この未曾有の大災害をどの様に考えていますか？

(防災こそが今後の街づくりの鍵)

今後何年かの間には必ず大地震が来ると言われています。そうなるとこれに備えねばなりません。この問題は「誰もが自分の問題としてとらえることができる課題」なのです。ここがポイントです。だから自治意識を涵養するのに最も相応しいテーマなのです。3.11の悲惨な状況はまだ私たちの記憶に生々しく残っています。だから防災という一応皆関心を持ちます。例えば、医療とか保育、年金などの問題は市民全員が対象かというところが違いますね。ところが地震防災はすべての人が対象になります。自治意識の涵養が不可欠だと言ってもだれもピンときません。

結局、人間は、自分が本当に危ないとか、このままではダメだと思った時でないとはなりません。それが内発的な気づきということですね。防災教育でも同じで、この「内発的な気づき」は東北で長年防災教育を現場で指導して3.11の時に成果を上げた(釜石の奇跡)群馬大の片田敏孝先生がよく言って見えます。例えば、子供に「津波が来たら逃げるんだよ」というと「うん、わかった」と言います。それではだめだと片田先生は言うのです。これをこう言うのだそうです。「津波がきたら、ここにずっといたら、どうなる。きっとお母さん来るよね。その時に津波がきたら、お母さんどうなる」と。そうするとその子はずっと考えて、当然死ぬということがわかるわけ。「お母さん死んじゃう」と涙を流して言うそうです。「そうだよね」。「じゃあそういう時には必ず逃げるんだよ。君が必ず逃げてくれれば、お母さんは安心して自分で逃げているよ」。そうすると「うん、わかった」と頷くそうです。これで「ストーン」と腹に落ちるわけですね。これが、内発的な自覚であると片田先生は言っています。まさに教育の原点でもありますね。本人の気づき(自覚)がなければだめだということですね。

(人は、苦しんで気づく～ピンチこそチャンス)

この気づきを得るには「ピンチはまさにチャンス」なのです。宮古市田老町では半生期近くかけて高さ10m、総延長2.4kmの大防潮堤を築造しました。結果、国交省は、被害が軽減され、時間が稼げたので一定の成果はあったと言っていますが、コストには見合いませんね。しかも国はこれで十分防げると考えていたわけですから、全く結果は異なりますね。ギネスにも搭載されて、海外からも視察に来たそうです。それが防げなかったわけですから、岩手県普代村の例はあるにせよ、ハードには過度に頼れないことは明らかですね。ハザードマップもそうです。ハザードマップで「ここまで津波が来るが、この地域までは来ません」ということをマップで示し、各家庭に配布しました。結果は、安全だと信じていた人は、避難しなかったために津波に襲われ甚大な被害を蒙り、危険とされた人は、いち早く避難して助かったということでした。こうなると自治体も頼りにはできないですね。

結局、自分の身は自分で守るしかないという考えになります。まさに、「自助」ですね。アメリカの建国時代に後戻りです。原点回帰です。これが、自治の原点ですね。自治の原点というのは「自分の身は自分で守る自助」です。前述した様に自分の村を守るには、自分達で金を出して、武器を持って戦う。これが自治の原点ですよ。これからは、ハードも役所もあてにならないことがはっきりしました。なら自分達でどのように逃げたらいいか、実際に歩いて確かめてみようということになりますね。数人で集まって先ず歩く。そうすると色々気が付くことがあります。ここには誘導標識が必要だよ。それなら町内会費でなんとか賄えるので設置しようとか。あるいはここは手すりがないと危険だよ。でも費用がかかりそうだから一度自治体に相談してみようとか。色々な考えが浮かんできます。警報をどう伝え、どのように誘導したらいいか。車いすの人や寝たきりの人はどうするか。色々な課題も出てきます。こういったことを考え皆で議論することが一番大切なことです。まずは、自分でできることをする。(自助)次に近隣で協力してできることをする。(共助)そして最後に公助。自治体の登場です(自助→共助→公助)。考えてみると容易に理解できます。阪神淡路大震災で明らかになりましたが、初期の段階では自治体消防は機能しません。勤務時間外に発災すればほとんどの職員は自宅にいるわけですから職員自体が被災しています。従ってすぐに出動することは不可能です。そうするとまずは自力ですね。次に期待できるのは近所の人。近所の人にはあそこの家は何人が住んでいて、どのあたりに誰が寝ているかもある程度推測がつかます。家が倒壊していれば、「あそこには誰それが埋まっている」ということで、すぐに救助に行けます。町内会の機能というのは大切ですね。今一度コミュニティの再生が必要ですね。役所が出動できるのはその後です。それが、どうしても自治体に頼りがちになります。国が補助金を出して立派な防潮堤を作ってくれたから大丈夫。また、役人も皆「絶対大丈夫」と言っているから間違いない。これでしっかり「他者依存型意識」が作られてしまいます。これは、基本的日本の自治制度が上からの官治自治で本来の自治の精神が浸透していないからだだと思います。今回の地震で自助の重要さが認識できたと思います。まず自分達で歩いて自分の地域を「知る」ことが大事です。知れば、色々な発見があります。いいところも見つかります。そうなると地域が「好き」になります。地域に愛着を感じるようになります。これが「防災を通じて、自治の精神を涵養する」と言う意味です。

関東大震災時の内務大臣として、帝都の復興に尽力した後藤新平は独特の自治観を持っていました。彼は医者でした。衛生の専門家ですね。後藤によると「自衛の衛は衛生の衛」、自分で自分を守るという意味

だそうです。人間は本来、危機に直面すると、生存本能で絶対に自分を守る。これを自衛という。自衛が自治だと言うわけなのです。だから後藤に言わせれば、「自治は本来自衛本能」ということになります。まさに、ハードにも行政にも頼れず、最後は自衛。原点回帰ですね。

(NPO, ボランティアなど「新しい公共」の出現)

阪神淡路の際クローズアップされたのがボランティアです。随分ボランティアが活躍しました。3.11でもボランティアが各地から被災地に入りました。先ほどソーシャルビジネスのお話をしましたが、これからの時代はボランティアやNPOのように自発的に社会的使命を果たすのに力を入れる人達がでてくるのはいいことですね。これまでは、「公共サービス=行政サービス」と考えられてきました。それだけ行政の力が強く、国民も行政に頼ったと言えるでしょう。しかし、本来公共は、公と共で別物なのです。公は政府(行政)です。共は住民が共同で行うもので、例えば白川郷の「結」(ゆい)のようなものですね。かつては、住民が自分達で共に問題を解決してきました。コミュニティですね。それを行政が肩代わりして、いつの間にか公共サービス=行政サービスになってしまったのです。セクターは本来、①私(市場)②公(行政)③共(地域・コミュニティ)の三つのセクターに分類されてきました。ところが歴史的に公が共を飲み込み、Public=公共=行政の図式が長きに渡って定着してしまいました。しかし、近年財政難や意識の変化などのより第3のセクター(共)の存在感が増してきました。井上先生の言っている「サードセクター」ですね。これまでほとんど行政が提供していた公共サービスをNPO、営利企業、ボランティアなど多様な主体が提供するようになりました。鳩山内閣の時に提唱された「新しい公共」ですね。これからこの「サードセクター」のウエイトが高まっていくことを期待しています。

なぜなら、先にお話ししましたように、「社会のために役に立つことをまずやる」。これが大切です。思い出してください。「先義後利」ですね。ソーシャルビジネスで成功しているものはすべてそうです。バングラディッシュのユヌス氏のグラミン銀行やホームレス救済のためのビッグ・イシューもそうですね。日本でも小暮さんが始めた「Table for Two」もそうですね。やはり「他人が喜び、ありがとうと感謝してもらえる」そういったことを持続的に行うために利益を上げる。ということが必要ですね。現在話題になっている「エシカルビジネス (Ethical Business)」がそうですね。街づくりもそういった形ができればいいですね。私は、街づくりとは究極的には「人づくり」だと考えています。ハードの立派な施設を作ることではありません。日本では街づくりという所管は都市計画部門になり建築、土木が中心になります。それはそれで成果を上げていますが、やはり「仏作って魂入れず」ではいけません。その魂を吹き込むのはそこに住む住民(市民)の意識なのです。

●ここでちょっと切り口を変えて、先生は独特の都市の見方をして見えますが、それについてお話し頂けますか？

(直線 vs. 曲線～都市論争の視点)

確かに私の都市の見方は常に“政策立案の観点”から考えていますので独特ですね。少しご紹介しましょう。

コルビジェという近代を代表する建築家で都市計画者が「輝ける都市」ということを言っています。住

宅を高層化してスペースをとり、そこに太陽が注ぎ、緑がある快適な姿を構想しています。都市は効率的・機能的でなくてはならないと彼は考えているのです。そのために直線を重視しています。(図31)

私は都市を歴史的に見る場合にひとつの注目すべき視点は「直線対曲線という視点」だと考えています。直線は自然界に存在しません。人間独自の線です。A、B2点を線で結ぶと直線が最短距離で最も経済的で効率的な線になります。同時に直線は途中の障害物をすべて蹴散らす暴力的な線でもあります。人間の「意志」が明確に表れた線ですね。一方、曲線は障害物があればよけて通る優しい線です。コルビジェは「直線は人の道、曲線はロバの道」と曲線を揶揄しました。近代合理主義こそが科学であるという信念ですね。

独に代表されるヨーロッパ中世都市は、ほとんど曲線で構成されています。一方近代都市になるほど直線が多くなります。(図32)これは大量生産を行うために画一的生産が行われたことにもよります。私は、

直線は、ひとつの近代の特徴だと思っています。(もっともローマタウンは直線多様なので意志の強い表れと言った方がいいかも知れません)日本でも城下町の構成を見ると面白いことがわかります。都市を経済性や効率性を重視して(つまり防御より経済取引を重視)縄張りを考えると、直線型の都市になります。城もそうですね。その点では名古屋城はまさに近世の幕開けにふさわしい「直角直行の城」です。城下の構成も経済優先で「グリッドパターン(格子状)」ですね。私は名古屋城の最大の特徴はこの直線性にあると考えています。他の城と比較してみるとすぐわかり

図 31

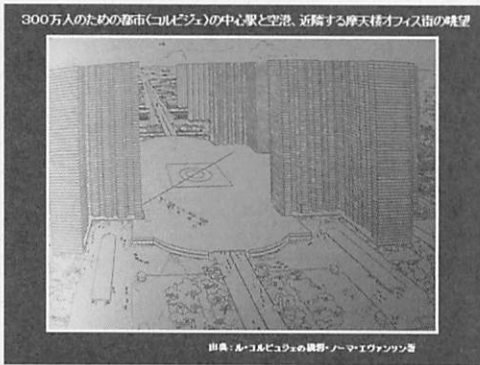


図 32

中世のミラノ



17世紀のトリノ



ロンドン近郊の田園郊外ハムステッド(アンウィン設計)



ます。(前述参照)

話を元に戻しますと、コルビジェと違う方向で街づくりを考えたのがマンフォードです。彼は「中世帰り」と批判されるくらいヨーロッパ中世都市を評価しています。ハワードは「田園都市」を提唱しましたが、彼がロンドン郊外で手掛けた、ハムステッドやレッチワースなどの田園郊外は独の中世都市を評価して、アメニティ豊かな「ピクチャレスク」な街並みを構成しています。(前述参照) この論争は結局、極論すれば「芸術か機能か」ということになります。どちらに重点を置くかで形態が変わります。日本は明治維新後欧米の文明に追いつけ追い越せで、効率性、機能性を重視した街づくりを推進してきました。

一方ヨーロッパは古い街並みを大切にし、第2次大戦でほとんど瓦礫の山と化した後でも、市民が破片を集めて寸分たがわなない元の姿に復元しています。

それは、当局の指導ではなく住民の総意だったのです。日本の街はヨーロッパに比べて美しくないと言われていました。「都市の景観は住民の心の投影」だと私は考えています。都市の景観が美しくないのは、住民がそうしようという強い意志に欠けるからです。

結局「都市は市民の街である時最も美しい」のです。パリの街並みを見てください。ナポレオン三世の下でのオスマン男爵の都市計画ですね。華麗です。それはバロック都市と呼ばれる絶対君主の街だからです。この街には「絶対権力を視覚化」(目に見えるように)するための色々な仕掛けが見られます。長大な大通り(ブルバール)を直線で構成し、どこまでも続くことにより先の方はかすんで消えてしまいそうです。(図33) これは権力の無限性、永遠性を演出していると思います。「視線の政治」と呼ぶ学者もいます。パリは市民の街ではありません。私には眩しすぎ、大仰で疲れる都市です。そこへ行くと独の中世都市は「しみじみ」として親しみやすさを感じさせます。

市民の街だからですね。私は、かつてに「しみじみ都市論」と呼んでいますが、私の考えでは、日本が学ぶべきは米国流の「スクラップ・アンド・ビルド型」より過去のメモリーを大切にしたヨーロッパ流の「リハビリテーション型街づくり」だと思っています。何度も繰り返しますが、「真に都市が輝くのは市民の街である時」です。魅力的な街にするには「そこに住む人の心」が大切です。その意味で「街づくりは人づくり」です。まさに住民ひとり一人が自分の街に「誇りと愛着」を持つとき、その都市はコルビジェを超えた「真の輝ける都市」になるでしょう。それが、まさに「自治の心」なのです。

図 33



●まさに先生の見方は独特ですね。ところで最近、河村市長がさかんに「面白い都市」と言って見えますがこの点についてどう思われますか？

(面白い都市)

最近、長期計画策定のためのタウンミーティングを聴いていると河村市長は「面白い街」にしたいと盛んに言って見えます。どのような意図なのかはよく知りませんが、面白こと自体はいいことですね。面白いということは「心が躍る」わけですから、「ワクワク心躍る都市」と読み替えるとわかり易くなります。かつて西尾市長の時に「ワクワク、ドキドキ、心ときめくエクサイティング・シティ」を打ち出したことがあります。中日新聞で大きく報道されました。それは、名古屋は堅実で住みやすいけれど、刺激が少なく、面白みに欠けるという特に若い人からの意見が多かったからです。今でもそんなに傾向は変わっていないと思います。

面白がると言うのは、好きなことが自由にできますから、自分で参画し、自分でやる満足感もあります。だから仕事でもなんでも面白くないと、いいものはできません。面白い都市にしていけば、人はその中で豊かな発想で新しいものを生み出すことができます。

もともと都市というものは、田舎と違って、いろんな多様な価値観がぶつかり合う場所です。多様な価値観がぶつかり合い、火花を散らし、そこから新しい発想やアイディが生まれてくる、いわば色々な考えや異なる価値観をシャッフルする「攪拌装置^{かくはんそうち}」なんです。いろんな価値観がぶつかり合って、新しいものがクリエイティブに出てくるというのが、都市の本質なのですね。いわゆる「創造都市」の原点ですね。そうすると多様性を持たないとダメ。そうするとぶつかり合う、それを「許容する寛容さ」というのが都市には実は求められていると私は思うのです。「寛容な都市」ですね。それが非常に重要だと。例えば東京が、どうしてあれほどエクサイティングで面白いかというと、東京というのは各地方からの上京人で成り立っていますね。まず人口の初期移動は大学です。まず大学の集まる東京に学生が全国から集まります。卒業しても就職先は多いし、面白い。そのまま東京で就職します。元は、みんな地方人ですよ。この人達が色々な言葉（方言）を使いながら、だんだん標準語になっていくプロセスというのは、価値観がぶつかり合い、標準化されていく過程ですね。いろんな価値観の多様性が東京を支えています。それに比べて名古屋はどうでしょう。私も含めて「なごやん」(名古屋生まれの名古屋育ちで、現在も名古屋に在住している人)が多いですね。前に私が「名古屋は日本の縮図」といったのは、名古屋人は「なごやん」の同質社会だからです。

(損益分岐点都市^{そんえきぶんぎてんとし}、名古屋)

私は、名古屋が「損益分岐点都市」だと考えています。これは、私の造語です。どういう意味かという、次の通りです。東京ほど過大ではない。しかし、地方都市ほど小さくもない。昔、「名古屋3男坊説」というのがありました。今では意識が変わりましたが、昔は東京が長男、大阪次男、名古屋は3男坊だと考えられていた時期がありました。従って、がんばれば長男を追い越すと。つまり東京に対抗心を持っていたのです。しかし、現実それは「夢のまた夢」でした。それでも、やはり3番目の大都市であることは事実です。名古屋人は、東京、大阪でやっているなら名古屋でもやりたいという意識を持っています。ところが東京だと何をやってもほとんど成功します。首都圏3000万人以上の人口は大きいですね。名古屋

屋圏の約4倍です。

ところが名古屋でも検討に入ると、常に採算が問題になります。損益分岐点ぎりぎりだからです。一方、地方都市あたりだと初めから東京と同じものを欲しがりませんから、身の丈に合った独自のものを求めます。なまじ3番目の大都市であるがゆえに、同じことがやりたいという欲が出るのです。この中途半端さが良くも悪くも「The Nagoya」なのだと思っています。悪く言えば中途半端。よく言えば適正規模。私は、ポジティブに評価しています。なぜなら、適正規模であることが「住みやすさ」を中心にした生活の質を担保する重要な条件であるからです。まず、人口密度が大都市の割には低いのです。東京でも大阪でも大都市には中心に行くほどピラミッド状に人口密度が高くなり、一定の人口密度に達すると今度は中心部から周辺に向けて人口密度が高い地域が移動し、極端に言えば都心部が空洞化していきます。これがいわゆる「ドーナツ現象」と言われるもので、この結果、都心部で生じる都市問題が「インナーシティ問題」と言われるものです。東京、大阪の場合は、だいたい都心部の人口密度が150人位/haで始まりませんが、名古屋では70人/ha位から始まっています。つまり、名古屋は「低密スプロール」都市なのです。大都市の魅力(Attractiveness)の源泉は、まさにその名の通り吸引力(Ability to Attract)ですから、ひとつの指標として昼夜間人口が考えられます。主に、通勤通学の流出・流入を考慮した昼間人口密度でも、名古屋は東京、大阪の半分くらいとゆとりがあります。また、通勤・通学時間も東京圏、大阪圏に比べて短く、また物価水準もそれほど高くなく、持ち家の取得も容易です。大都市としての要件は満たしていますから何でも手に入ります。それでいて、東京・大阪ほど過密ではありませんから防災上も安全性が高いですね。(図34)つまり大都市でありながら田舎的要素も備えている大都市なのです。

この地域の中心の大学は名古屋大学ですが、学生の70%近くが東海3県出身者で占められています。し

図34

図表28 都市の基盤整備状況と利便性

	平均通勤時間	駅までの距離		6m以上道路 までの距離	各施設までの距離が500m未満				
		500m未満	11m未満		医療機関	公園	デパート・センター	郵便局・銀行	小学校
札幌	28.3分	27.9%	59.6%	99.6%	75.3%	95.2%	33.6%	62.6%	24.0%
仙台	27.9分	16.8%	37.6%	85.9%	73.5%	73.2%	33.7%	56.5%	17.8%
さいたま	53.9分	17.5%	46.9%	61.6%	67.6%	69.0%	44.5%	56.7%	18.8%
千葉	49.7分	23.2%	46.1%	59.4%	71.8%	87.7%	28.4%	54.9%	24.7%
東京	41.6分	46.1%	82.1%	89.2%	89.2%	88.2%	56.8%	81.7%	48.5%
横浜	53.2分	24.2%	51.2%	64.2%	84.3%	82.9%	45.8%	52.8%	23.9%
川崎	49.9分	25.6%	57.9%	63.3%	81.3%	77.5%	49.0%	60.6%	30.3%
新潟	22.9分	10.1%	28.3%	66.3%	64.0%	45.6%	24.7%	53.3%	15.2%
静岡	23.0分	9.5%	24.9%	49.1%	56.6%	70.2%	35.7%	63.1%	16.5%
浜松	23.1分	9.1%	21.6%	45.7%	59.0%	54.3%	31.3%	51.9%	11.9%
名古屋	30.7分	34.4%	66.6%	83.6%	85.0%	80.0%	49.8%	74.3%	31.9%
京都	28.7分	32.8%	60.9%	85.2%	79.8%	53.9%	48.0%	70.2%	32.4%
大阪	32.2分	56.0%	85.5%	72.0%	94.6%	93.9%	70.3%	84.0%	52.6%
堺	42.1分	30.0%	53.9%	53.0%	59.4%	77.5%	28.4%	64.2%	27.9%
神戸	42.8分	33.7%	58.1%	70.9%	77.8%	86.0%	49.4%	61.0%	29.6%
広島	28.1分	29.2%	46.8%	59.7%	72.6%	56.7%	44.5%	62.9%	18.4%
北九州	27.0分	16.6%	37.9%	61.4%	70.0%	76.4%	42.5%	55.8%	21.3%
福岡	28.9分	26.4%	52.0%	82.6%	81.3%	89.4%	49.3%	65.0%	25.6%

※ 〇部分は、名古屋市の方が数値的に優れているものを表す。

資料：住宅・土地統計調査 (H20)

出版：名古屋市住宅政策本誌

かも、日本のモノづくりのメッカですから、就職には困りません。卒業して外に行く必要もありません。まさに、「自給自足都市」でもあります。このことが名古屋の閉鎖性に繋がるのです。これが、名古屋が「なごやんの都市」であるゆえんです。

もともと濃尾平野は豊かな土地柄でした。江戸時代の税率は平均で5公5民位だと思います。この地域（尾張）は、4公6民とも幕末には3公7民とも言われていました。つまり税率が低かったのです。それだけ豊かな土地柄で、苛斂誅求な税の取り立てがなかったために、農民一揆があまり起きていません。尾張藩自体も表石62万石ですが、春姫が義直に嫁ぐ際に將軍家（家康）から結婚プレゼントで拝領した木曾の美林7万石に新田開発の分を足すと実質100万石ともいわれる豊かな土地柄でした。従って、民力が高く、「金持ち喧嘩せず」といわれるようにおっとりとして、ががつしない気質が醸成されたのではないか見えています。長州藩とか薩摩藩のような外様でいつ幕府から言いがかりをつけられ、お取り潰しになるかという緊張感もないため、情報に鈍感でした。結局チャンス（8代將軍の継承争い）はあったのですが、情報収集能力と根回しにしくじり、御三家筆頭でありながら一度も將軍を輩出していない憂き目にあっていました。その背景はやはりこの地域が「豊の国」であったことだと考えています。この地域だけで経済がまわっていけば、どうしても他国ものを受け入れたがらず、地域で利益を独占しようとしますから、排他的になります。これが「名古屋モンロー主義」と言われる所以です。明治維新後は、耕地整理、区画整理を徹底的に実施し、都市基盤を整備してきました。名古屋の区画整理は世界一だと考えています。まさに「世界に誇る区画整理都市」です。つまりこの都市は不足がないのです。だからぬくぬくしてしまうのです。なごやんでいる限り地域のネットワークもでき、この地域で生涯安穩に暮らせるのです。これはまさに日本の象徴、村落共同体ではないですか。

●名古屋はよく「文化不毛の地」と言われますが、本当ですか？

（名古屋は文化不毛の地ではない）

よく「文化不毛の地」と自虐的に言います。これは違います。確かに東京でしか見ることのできない美術展等は多くあります。しかし、どうしても見たければ新幹線で上京すればいいのです。それより重要なのは日頃の美術展やコンサートの状況です。普通の人はそのそんなに多い回数行くわけではありません。東京で美術展を見ようとすると1日がかかります。まず、都心に出てくるのに時間と体力がいります。チケットを買うのに並び、中に入れば人の頭しか見えない。出てきて昼飯を食べようとするとレストランでまた並ぶ。疲れて帰ろうとしてタクシーに乗ろうとしても捕まらない。やっとの思いで家路につく頃にはぐったり疲れ休日はおしまいです。名古屋では実にゆっくりと時間を過ごすことができます。これは私が体験したことです。果たしてこれが「文化不毛の地」ですか。一時新幹線の「のぞみ」が運行した時マスコミで話題になった「名古屋とぼし」も今では何の問題もありません。それどころか、リニア新幹線だって通ります。

でもいいことばかりではありません。街づくりはその地域の持つ「Strong PointとWeak Point」を見極め、前者を伸ばし、後者を補うのが鉄則です。ぶつかり合いも摩擦もありませんから、ぬるま湯につかったようにぬくぬくし、心地よく生活ができるのですが、緊張感がありませんから、新しいものがなかなか生まれません。強みは弱みに転化します。そうすると、もっと交流を高めることが必要になりますね。

●なるほど、強み弱みの分析ですか？ では名古屋の強み、弱みはなんですか？ またそれをどの様に街づくりに活かすのですかお聞かせください。

(名古屋の Strong Point, Weak Point)

では、ここで私が考える「Strong Point と Weak Point」について述べてみたいと思います。私は、「強み」と「弱み」をしっかりと認識し「強みを最大限に活かしつつ、弱みをカバーする」ことこそが街づくりの基本だと考えています。

名古屋の強みは、①本州の真ん中に位置する(交通の要衝)②製造業(モノづくり・実業)のしっかりした基盤③効率的、機能的な都市計画(特徴的な広幅員街路)④突出したものはなくてもすべての施設、機能が揃った「Well balanced City」⑤大都市の割には人口密度が低く田舎的要素がある⑥堅実で質実剛健な市民気質⑦近世武家文化 などです。

一方、名古屋の弱みは、①情報系の産業の集積が少ない②都市に陰影がない(地形が平坦で土壤が悪い、区画整理や伊勢湾台風で緑が減った、伊勢湾台風で緑が減った)③これといった自慢するものオンリーワンのものが少ない④夏暑く冬寒い⑤自動車産業への依存度が高すぎる⑥堅実過ぎて面白みにかける・冒険心チャレンジ精神に欠ける などと考えています。

これに基づいて名古屋の街づくりの視点を六つ述べてみたいと思います。

- | |
|--|
| <p>① 今ある資源を最大限に活かす。(東山, 名古屋城, 久屋大通りなど)</p> <p>・特に名古屋の特徴である、豊かな空間(特に道路空間)、豊かな水資源、平坦な地形の活かし方がポイント</p> <p>② 人の流れに回遊性を持たせる(歩いて楽しい街づくり)</p> <p>・空間の再分配(みちまちづくりなど)</p> <p>・人気施設の配置誘導戦略(ランドデザイン)(例ナディアパークなど)</p> <p>・地下と地上の連携(地下に光を)(例:オアシス21など)</p> <p>・名古屋のハレの場を市民に(例:日銀跡地など)</p> <p>③ 歴史的に価値ある建物等を大切に、心象風景を演出する。(例:文化の道など、カルチュラル・エンジニアリング):都市の記憶を大切に。都市のアルバム作り</p> <p>④ 象徴的なものをつくり可視化する。(大噴水, モノづくり拠点, 近世武家文化, 東山など):自分の街に誇りと愛着をもたせる</p> <p>⑤ 土地利用にメリハリをつけ全体としてコンパクトな街をつくる。(地下鉄主要駅勢圏の容積アップ, 都市の骨格の整備など集約連携型都市構造)</p> <p>⑥ 広域連携を図り、大都市圏の一体化を視野に入れ、中核都市としての役割を担う</p> |
|--|

具体的に、全部を説明するのは時間がないので省略しますが、2点についてコメントしておきたいと思います。

まず、「名古屋のハレの場を市民に」ということです。これは日銀の跡地のことです。松坂屋と名古屋市が土地を所有し、これまでも色々構想が生まれましたが、いまだ実現していません。近年は松坂屋が大丸になりさらに難しくなっています。まさに名古屋のど真ん中です。これまでの構想は、ほとんどが高級ホテルなどの高層建築物の計画でした。私は、これを「サンクンガーデン」にしたらどうかと考えていました。

もちのき広場的発想ですね。その都市で最高の場所を市民ために解放しようとする思想です。

地下街に光も入り、明るくなります。地上と地下の連携も図れます。近くの、オアシス 21、もちのき広場と連携もできます。なにより、名古屋で最高の場所が、市民が集える魅力空間になるのがいいですね。

もうひとつは、「**象徴的なものをつくり視覚化する**」と言う提案の主旨です。何度も言っていますが、何より大事なことは「誇りと愛着」を持つ市民が増えることです。それは「ふるさと意識」と言ってもいいでしょう。もともと縄文時代のように狩猟採集時代には、移動が主体の「ノマド」でした。稲作を始めた弥生時代から人類は定住を始めました。定住が始まってから、人はその土地に対する愛着を持つようになったと思われます。中世は逆に定住が主で移動は余りありませんでした。交通手段が発達して、現在では「移動と定住」が両立して来ました。移動が活発な中で、外からの目線で見たりしながら、自らの足元の大切さを認識する時に「ふるさと意識」は出てくると思います。社会学の専門用語では、「**場所への象徴的な愛着**」と言うそうです。

ミュンヘン市の研究員で F・レンツ・ローマイツと言う女史がありますが、彼女は「都市はふるさとか」と言う著書の中で実に示唆に富むことを言っています。少し長いのですが引用しておきます。「**真の都市の市民たる精神的ベースというものは、シンボルが自己実現の中に組み込まれるという事実**に存在する。市民が都市に馴染み、真に市民たりうるためには近隣社会の関係を蘇生させるよりも、まさに、この「象徴的」なシンボル体系を作ることが有効である」つまり「**その都市がその人にとってふるさとになるのは、市民がその都市を自分のものだと理解する時から始まる**」と言うものです。まさに「**My City から My Own City へ**」ですね。そのために「**象徴的なシンボルを作り、視覚化(見える化)すること**」が有効だと言うのです。例示で掲げたものは私が考えた候補です。市民意識を協働で醸成するほかにもこういった象徴的なシンボルの存在は「誇りと愛着」を育てる大きなきっかけになるものと確信しています。

●今後の名古屋の街づくりの方向については如何ですか？

(今後の街づくりの方向)

まず、確認しておきたいのは、名古屋は、すでに先人たちの営々たる努力の結果「**都市基盤のミニマム水準**」はすでに達成しているという点です

少し年次が古いのですが、公共施設の水準を 14 大都市で比較しました。その結果によると、名古屋は、14 都市中 3 位と公共施設はだいたいシビルミニマムを満たしています。また、他都市とは、いちがいには比較できない特色ある施設も数多くあり、施設の数としてはおおむね充足しているといえます。(例：能楽堂、音楽プラザ、文化小劇場、スポーツセンター、デザインセンター、演劇練習館、ランの館、都市センターなど)

今後の課題は、①維持管理コストの問題(アセットマネジメントなど効率的・効果的な管理運営)②いかに効果的かつ効率的に活用していくか(民間譲渡、指定管理、独立行政法人化など PPP 手法などの導入)③全国発信できる魅力的な施設をどのような形でつくっていくか。などが課題になるでしょう。

また、前述したように、これまでの区画整理などの手法で基盤整備を充実してきた結果、道路の整備が進み、それが自動車と呼び込み自動車主体の街になったことも確かです。今後はそれを逆手にとって、これまでデメリットとされてきたものをメリットに転換することが必要ですね。

(みちまちづくり)

名古屋市は、これまで自動車交通のために道路建設を行い、道幅を拡張し、車線を増やすなど、自動車利用を中心とした道路整備を行ってきました。名古屋市の全市平均道路率は約18%と高い水準となっており、とくに都心部での道路率は極めて高く、交通の円滑化に資する反面、必要以上に自動車交通量の増加を招く結果となっています。

名古屋市の「なごや新交通戦略推進プラン」では、名古屋のまちの特長を十分に活かすことが必要と考え、これまでのストックに着目した施策の展開を検討しています。特に道路空間は、3大都市と比較すると恵まれています。

その道路空間をフルに利活用しながら交通施策を推進していくことが有効な手段だと考えています。それを、「みち、まちづくり」と名付け、「自動車中心のまちから人間中心のまちへの転換」「交通需要追従型から交通需要マネジメントへの転換」を名古屋市は提案しています。(図35)

この発想は、「公共空間を再配分」しようとするもので、それに成功した街のひとつに仏のストラスブールがあります。ストラスブールでは車を排除するのではなく、車と共存しながら、道路などの公共空間を市民のために再配分しました。その鍵が交通輸送手段としてのLRT(トラム)です。既成市街地を中心に魅力的なLRTを敷設し、その周辺に公共施設など市民利用施設を配置し、市民の利便性を確保することでLRTの採算性も担保しようとするものです。「ストラスブール都市共同体エリア在住の47万人に対して325kmのバス路線と54kmのトラム路線(ただし、営業キロ。トラムの軌道距離は38.6km)の公共サービスが提供されている」そうです。(ヴァンソン・藤井由美氏) 住民の94%がバスかトラムの停留所から400m以内に居住し、住民の移動手段の13%を公共交通が占めているそうです。ただし、仏では「国内交通基本法」が1982年に制定され、そこで「すべての利用者の移動する権利、交通手段を選択する自由」が国民に保障されています。従って、日本と違い公共交通に対して税を投入するのが当然という思想が国民に浸透しています。独立採算が要求される日本の公共交通とは雲泥の差ですね。また、この施策の実現には市長の強いリーダーシップがあったようです。我が国においても、富山の森市長が強いリーダーシップを発揮し、LRTを軸とした街づくりに挑戦し、成果を上げて見えます。

今後名古屋も、先人の残した、広い道路空間をいかに市民に再配分していくか、今後の大きな課題ですね。

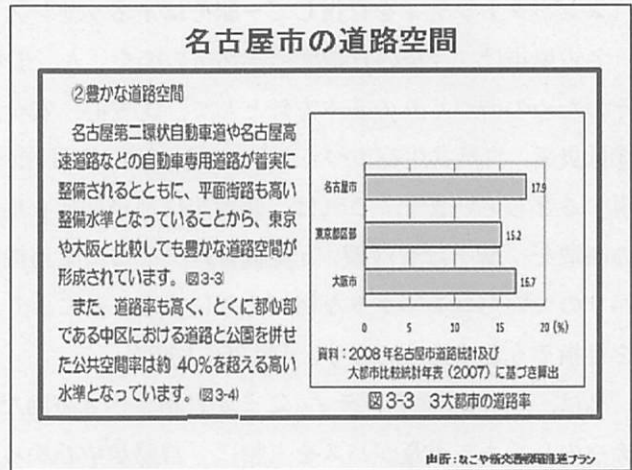


図35



(コンパクトシティを目指して～駅そばルネッサンス)

名古屋市は、今後の目指すべき都市の姿を「人、まち、自然がつながる交流・創造都市」としています。そのための街づくりの基本方針として、①安心、安全、便利な環境づくり②交流、創造的活動の場づくり③低炭素、自然共生都市づくり。の3点を掲げ、目指すべき都市構造としては、「集約連携都市構造」を実現するとしています。これは、駅周辺に都市機能を集約しようとするもので、地下鉄駅の概ね半径800mの圏域を「駅そば生活圏」と位置付け、そこに業務機能などを集約し、現在の分散型の都市構造からメリハリのついたコンパクトな街づくりにより、CO2の排出量を抑制した、環境に優しい都市構造を目指そうとするものです。(図36、図37)

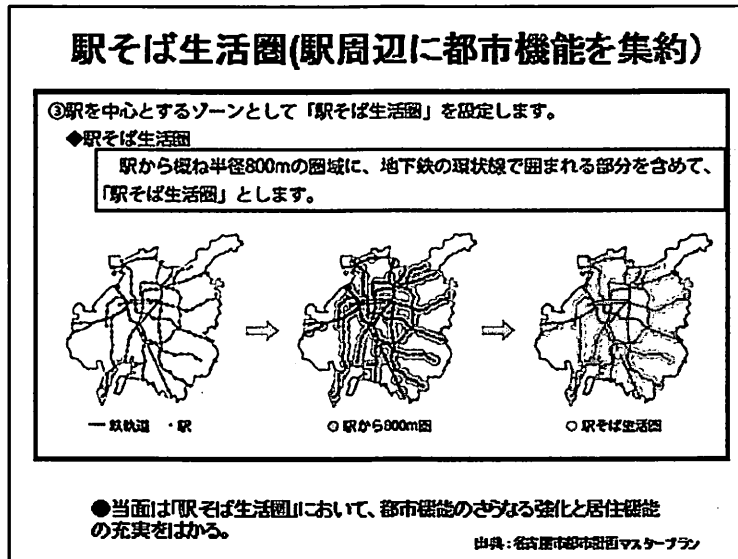
私は、「コンパクトシティ」こそが目指すべき方向だと考えています。すでに海外では、ブラジルのクリチバのレルネル市長がバスを主軸に「自動車中心から人間中心の街づくり」に転換しましたが、レルネル市長の考え方は、ドラスティックに転換するのではなく、どのツボを先ず抑えるか。次にはどこに鍼を打つか。といった具合に効果のあると思われるポイントを順次抑え、全体の状況を観察しながら都市を作っていくという考え方で、本人は「都市の^{はりちりょう}鍼治療」と言っていますが、実に示唆に富んでいます。個人的な話で恐縮ですが、私も鍼灸・東洋医学の信奉者で、「将棋的ではない、囲碁的な街づくり」が大切だと考えています。いわば「漢方療法的街づくり」と言ってもいいでしょうね。また、国内では前述した富山の森市長がコンパクトシティを実践して見えます。

名古屋市の場合には中小都市と都市のスケールが違います。従って、どこから手を付けるかがポイントです。一挙に、どっとやることは不可能ですからまず「どこに鍼を打つか、そのポイント(ツボ)を見つけること」です。それを前述した様にプロジェクトとして組み立てる、プロジェクト方式が有効でしょう。それを主軸にした、ガイドラインを作ってはどうかと考えています。これが新たな計画の方向になります。そこで、鍵になるのは、移動を担う、交通局です。これまで述べた、「みち・まち」にせよ「駅そば」にせよすべて都市計画を所管する住宅都市局が所管局です。いわばハードの街づくりのプロ集団です。もちろん

図 36



図 37



んそこには交通についての専門家もいます。一方、交通局は交通局生え抜きの職員が多く、運輸業の認識が浸透しています。私も局長の時よく言っていました。「交通は総合産業であって、運輸業ではない」と。これはこれまでの街づくりを振り返れば容易に理解できます。東急の五島さんや西武の堤さんをみればわかりますね。まず鉄道敷設構想を持ったら最初に行うことは鉄道の先端駅周辺の土地買収です。そして、そこに大規模住宅を建設し、それと並行して鉄道敷設計画を公表し、あわせて駅前デパートをつくります。つまり鉄道沿線を開発し、住民をそこにはりつけ「結果として鉄道を利用」してもらおうという考えです。本来なら地下鉄も同様のことが可能だと職員の意識も異なってくるのですが、現在の法制度では困難なのです。しかし、自治体でも戦前は、交通事業は利益が上がりましたから、それを民間でやるのか公共が独占するのが最大の都市経営問題だったのです。

いずれにせよ、どこの街のケースを見ても鍵は、公共交通と車をどう考えるかだと思います。結局、構想は描いても実現しないのは「関係者の合意と熱意」がないからです。そのためには、職員が自分の仕事のみならず、もっと大局的に、市民目線で政策を考えることが大切です。そういった、人材を養成することが実に肝要だと思います。

安岡正篤さんが、物の見方の3原則を言ってみえます。①目先にとらわれず長い目で見る。②物事の一面的のみ見ないで多面的・全面的に観測する。③枝葉末節にこだわることなく根本的に考察する。また、佐藤一斎は視点を高く持てと言っています。「着眼高ければ、即ち理をみて枝せず」「一眼を遠く歴史のかなたに、しかし、もう一眼は脚下の実践に」と言ったのは、森信三です。

多面的に、大局的に見るためには、交流が大切です。自分の蜻壺に閉じこめるのではなく、異業種交流を積極的に行い、外部との交流が難しければ、市役所の他局との交流、議論を積極的に行うことが大切です。また、「好奇心」をもって、幅広い知識と教養を身に着けなければなりません。そして、人事でどんどん色んな部署を経験させることが人材の育成になります。そうすることによって、多面的なものの見方が身に付きます。まさに、「自分と異なる価値観との触れ合い」ですね。人は触れ合うことによって、成長し

ます。都市景観の哲学「触れ合いと調和」を思い出してください。書を捨て、街に出て、大いに議論していただきたいと心から思います。そういったベースがないと、いくらコンパクトシティのお題目を唱えていても政策として実現しません。本来は長の強い「リーダーシップ」が当然必要ですが、それが望めない時こそ、「人材育成」が必要なのです。

●なるほど、交流ですか。重要ですね。異なった価値観との交流と言えれば観光施策などが重要になってくると思いますが如何ですか？

(交流促進に観光を)

名古屋の村性を脱却して、国際的な交流都市になるためには、観光というのは、ひとつのポイントとなる施策だと思います。国でも観光に力を入れ、ビジットジャパンとかクールジャパン戦略とかがんばっています。外国人観光客も、今年やっとひとつの目標 1000 万人を初めて達成しました。今の計画だと、最終的には 3000 万人を目標としていますが、これからのターゲットは東南アジアですね。東南アジアのイスラム人口はインドネシアなど東南アジアを中心に約 16 億人います。しかも経済成長率を考えれば旅行できる所得層の人はどんどん増加しています。イスラムの場合は食と毎日の礼拝の場所が鍵になります。ホテルで「ハラール認証」を取るなど彼らの習慣を十分調べ対策を練っておく必要があります。タイ辺りでも日本に旅行することは憧れです。アフリカをターゲットにした観光も今後増加することが予想されますから、今から手を打っておく必要があります。

●先生は、高感度情報都市と言って見えますが、真意は何ですか？

(高感度情報都市に向けて)

確か、一昨年の市立大学主催のシンポジウムで出席者から質問を頂いていながら時間切れでお答えできなかった質問ですね。

高感度情報都市というと、名古屋が情報を取る、そんなイメージをもちます。しかし、今や通常の情報収集なら ICT (情報通信技術) で十分です。私が言いたいのは、そうではなくて、「生情報」というか、「人との接触から得られる情報」が必要だということなのです。情報にも、データ、インフォメーション、インテリジェンスといった三つのレベルの情報がありますが、インテリジェンス情報として組み立てる必要があります。そのためには、前にも言いましたが、多様な価値観がぶつかり合うことが必要ですね。まさに、都市を都市足らしめる「攪拌装置としての場」が必要なのです。そうした中から、新しいクリエイティブなものが生まれてきます。そういうものが、求められているのではないかと思います。

また、情報をオープンにし、市民のために活用することも大切ですね。「役所(行政)は情報の宝庫」です。役所としては必要な情報は情報提供という形で一応市民向けに公開していますが、それはあくまで役所が判断し選択した情報にすぎません。これを役人ではなく「ユーザーとしての市民の目線で判断」してもらうことが必要です。まず、市民が「こういうことをやりたい。そのためにはこういう情報があるといいがどうだろうか」と役所に相談します。それに基づいて役所は多くの情報の中から選択します。それを、「このように加工した方がいいのでは」と言ったように、お互いに議論し、協議の上で決定します。それに基づき民間でアプリを作ります。それを有料で販売することも考えられます。こうなりますとベン

図 38

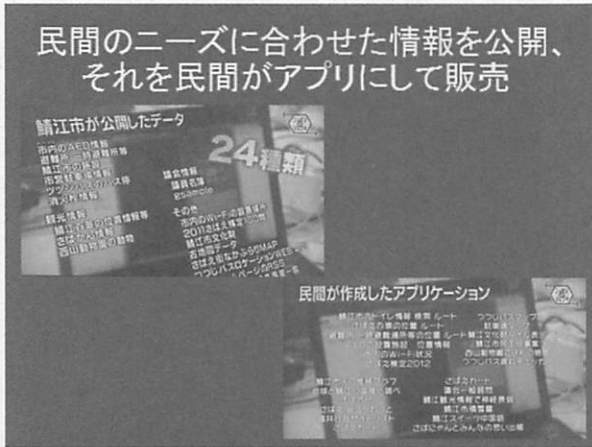


図 39



チャー支援ですから産業振興策にもなりますね。これが「オープンデータ」という考え方です。福井県の鯖江市ではこのオープンデータを使って、例えば車椅子の人のためのトイレの場所をモバイルで提供するというアプリも登場しています。鯖江市は、「勝手に特区」と考え、「鯖江モデル」で雇用を促進し、人口の増加を図ろうとしています。(図 38) もうひとつ、IT 関係で今後行政としても注目しなくてはいけないのが「ビッグデータの活用」ですね。すでに防災面で検討がされていますが行政としてどう活用していくか至急検討が必要です。(図 39)

●最後に市立大学と学生に何かメッセージをお願いします。

(市立大学と都市センターに期待)

街づくりというのは、すごく面白いのだということを、体験すると違うのではないかと考えています。議論することも必要ですがやはり体験が一番ですね。やはり自分で気づく、きっかけがあると思いますね。例えば現場を見るとか、それから一緒に街づくりをやってみるとか、参画して、面白さを体得することが必要ですね。そういうきっかけがあるのかなと思います。口先でいろいろ言っても、なかなかピンとこないですよ。まさに「百聞は一見にしかず」です。本当は、例えば、一緒に地図を持って、地域を歩くとか。なんかプロジェクトと一緒にやって、地域振興に役立つ実感を持つとか。そういうことが、本当は授業でもできるといいと思いますね。講義でやるのはどうしても限界があります。都市センターにしても名市大にしてもともに地域に役立つために設立されたものですね。だから、もっと地域に絡んで、地域をつくっていくという気概でやるのがいいと思います。

(地域振興は心の振興)

18 世紀の末くらいに、岡山県の久世町というところに、^{はちろうざえもん}早川八郎左衛門という久世代官がいました。あまり知られていないですが、この人すごい名代官で、普通、代官というと水戸黄門に出てくる悪代官のイメージが強いですが、当時は寛政年間で、松平定信が老中首座(今の内閣総理大臣)の時でしたが、この時期に、地域で名代官が三人くらい出ているのです。中でも、早川八郎左衛門が一番有名で、14 年間久世

の代官をやっていました。当然役人ですから、転勤の命令が出ますが、その都度（計4回）地域住民から残留の嘆願書が出て、結局14年間久世に留まったという人です。この人は江戸（中央）ばかりを見ることなく、「軸足を地域に置き地域のために全力を傾注した人」です。通常は、役人ですから（今で言う国のキャリア官僚）数年で江戸に戻ります。そのため地域に在任中は、無難に失政のないように身を処するのが普通です。ところが、早川は地域のために全力投球をします。彼はこう言っています。「地域振興の元はそこに住む人々の心の持ち方」だと。「地域振興は心の振興」だということです。これが実はすごく大事なことなのです。現在では、地域振興というと、まず経済振興が頭に浮かびます。どうやったら儲かるかといった話ばかりです。そこが違うのです。儲かる話は後からついてくる。その前に自分のところの地域をどうしたいのだということです。自分の地域に対する「誇りと愛着、愛情」があれば、もしその地域が衰退しようなら、こんなことではいけないからなんとかしなきゃいかんと思うはずで、自分の子供は幸せになってほしいと愛情のある親なら誰でもそう思いますね。地域でも同じです。自分の地域に愛情があれば衰退をほっておけるはずがありません。もっといい町にしようと思って、必死に考え色んなことを試みます。その結果として利益はついてくるわけですよ。そういうふうを考える地域振興ではなくて、先にどうやったら儲かるかを考えるというのは違いますね。それはこれまで何度となく言ってきたように「道徳を頭においた経済」（道徳経済）という考え方を持たないと駄目なのです。

大学でも、学生にはそういうことを理解してほしいと思っています。この地域に根差した大学であるということは、地域のことを真剣に考えて、地域を豊かにしていかななくてはなりません。街づくりは本当に面白いのです。何が面白いかというと、街が現実になってくるわけですよ。形ができてきて、みんながそこで楽しんでいる。例えば、オアシスへ行くと、本当にオアシスのところでスケートをやったり、小さい子供がキャッキョッ言っていて、みんなすごく楽しそうです。そういう「人が楽しむ様子をみる」とこちらもうれしくなります。そういうことなのですね。街づくりの面白さを是非知って貰いたいと思うのです。まだまだ、名古屋市側も、例えば、こんないいところがありますよというアピールが下手ですね。それも先ほどの縦割りの弊害も要因のひとつですね。例えば各区に史跡散策路というのがありますが、史跡散策路は区ごとで作ってネットで公開していますが、その区のことしか記載されていません。「ユーザーの視点」が欠落していますね。利用者からすれば、ある史跡散策路を歩いたとして、区境のすぐ近くに隣の区の名所があるとすると当然ついでに寄ろうとしますね。ところがそこを探そうとすると他区の散策路を見なくてはなりません。そんなことは簡単に解決ができます。区役所同士の会合がありますから調整すればいいことです。もっと市民の視点からものを考えるような職員、そういう職員を育てていかななくては駄目だと思いますね。そのためには、「市民の声」に謙虚に耳を傾けるという姿勢が大事です。民間企業でもクレームを貴重な意見と考えて真摯に対応し、新商品を開発して伸びた企業も数多くあります。市民のクレームでも役所が100%正しいということはないので、少しでも相手の意図を汲み、改善していくという姿勢が大切だと思います。

後藤新平が東京市政を診断してもらうために、彼の友人でピアード博士と言う米国の学者を招聘したことがあります。ピアード博士は「東京市政論」と言う名著を日本に残してくれましたが、その中で「行政はサービス業である」と言う当時では考えられないことを言っています。日本で行政=サービス業と言う概念が公になったのはこれが最初ですね。この精神を私達は忘れてはいけません。「行政は、サービス業」

なのです。そのためには人材育成が大切ですが、この点は前述しましたのでここでは触れません。

(いかにして気づかせるか)

先日、セミナーで現場学生を現場に連れて行きました。交通局の大幸車庫というところでドーム球場の下のある地下鉄の車両基地です。やはり言葉で伝えるより実際に見ることの方が感動しますね。まさに「百聞は一見にしかず」です。現場を見ると、実際に不用意に手を触れ、「そこ触ったら感電して死ぬぞ」と注意され、ドキッとしたりします。そういった経験が大切ですね。市は「揺りかごから墓場まで」市民生活のすべてに関わっていますから、見どころは満載です。名古屋市でも一般の見学可能な施設はあります。でもそんなにPRをしているわけではありません。積極的に見せていくことは双方にとって有意義だと思います。問題は「見てみたいという気になるかどうか」です。一旦その気になれば事は簡単です。興味さえあればいくらでも学ぶチャンスはあります。例えば都市センターでは、いつでも勉強会を開催していますし、相談にもものっています。問題は「気づききっかけをどう作るか」です。それは学ぶことの楽しさをどう知ってもらうかです。まさに、教育の原点ですね。

教育で大切なことは「学生にいかにして学ぶことの楽しさを知ってもらうか」だと思います。教育とは知識を教えることではありません。“気づきのお手伝い”をすることだと私は思っています。では何に気づくか。そうです。学ぶことの楽しさです。知ることの喜びです。その喜びは単に知識が豊富になるというだけではありません。「自分で考え、知る喜び」のほうが大きいのです。しかも、人から一方的に教えてもらう知識は忘れてしまいます。しかし、自分で知りたくて知った知識は身に付きます。そのためには学ぶことの楽しさに気づかなくてはなりません。一旦気づけば後は何もありません。知りたいことは本を読んだり、調べたり自分でします。昔と違って今はインターネットというすごいツールがあります。

今ひとつは、“体験をすること”です。実際の現場を見、地域を自分の足で歩くことです。色んな発見があります。特に自分が住んでいる地域（名古屋）のことについて知ることはいい勉強になります。人は意外に身近な自分の足元に無関心です。メーテルリンクの“青い鳥”の話を思い出してください。「幸せの青い鳥は自分の足元にいた」ことを。

気づきのきっかけは人によって異なりますが「共感と感動」が大きな要素だと思います。「偉人の生き様を知りそれに自分を重ねる」ことが有効だと私は確信しています。「読書尚友」という言葉があります。古典を読み本の中に友や師を見つけるという意味です。歴史上の偉人の生き様を知り、その生き方に共感し、感動し、自分もそうなりたいと思う。そうなればしめたものです。共感するとは「相手の気持ちになる」ことです。「Sympathy」ですね。孔子の「恕の精神」でもあります。原発事故のその後を見ていても、このシンパシイに欠けているような気がしてなりません。この「Sympathy」も持てる人材を育てていくことが大事だと思っています。

長時間お付き合いいただき心から感謝申し上げます。何分インタビューですので、話があちらこちら飛んで取りとめがなかったり、だぶったりした点が多々あろうかと思えます。私の気持ち（心）をくみ取っていただくということで、ご容赦頂きたいと思えます。まだまだ話し尽くせませんが時間になりましたので今回はこれまでにしたいと思えます。長時間お付き合い頂いた、井上先生、学生の皆様始め関係者の皆

さんに心から御礼申し上げます。ありがとうございました。

(2013年12月2日インタビュー 於：名古屋市立大学経済学部)

(注：重要と思われるキーワードは、鍵かっこ、太文字斜体で強調しています。)